

---

RNATIVE The future in my future = other side

もんた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Muv-Luv ALTERNATIVE The future  
in my future = other side

### 【Zコード】

N1544U

### 【作者名】

もんた

### 【あらすじ】

1998年からのタケル三週目です。純夏がヒロインです。色々と未熟ですが、楽しんでいただけたら幸いです。読んで気になったこと、感想などがありましたらどうぞ気軽に書き込んでください。

## メイン人物紹介（前書き）

テストが2週間と続くので、今のうちにメイン人物紹介を上げさせてもらいます。

（と言つても現状確認程度の説明しかありませんが・・・）

更新が遅くなつて申し訳ありません、どうか気長に待つてくださいね。

## メイン人物紹介

シロガネタケル

三回目の悪足掻きをしようとした時に因果を持つて行こうとして失敗、そのまま怪物見たいな姿になつて永い間彷徨つていた。

が他の世界に流れる事は無いといつ、もんたの「都合設定」里田は「嘘」。

理由は本編で

「夏にはたまにふ道俳諧はないでね。」

the regret over です、はい。

鑑純夏

もんたの yo ————— ぐわいひわううううううう 武の嫁。

テコ入れと言うレベルではないです。

本編では不運ヒロインならぬ、弄られ（タケル限定）ヒロインに。純夏に対するもんたの勝手な脳内BGM——某動画サイトで見たマブラヴMADの「JOINT」です。

夕呼先生

基本的にはオルタ本編の夕呼先生ですが、偶にエクストラ先生になつて周りを巻き込みながら遊びます。ぶっちゃつけチート要員です。夕呼先生に対するもんたの勝手な脳内BGM——こちらは別のMAD

影響で「聖少女領域」です。

社霞

もんたの musu — ゴハ、グホ。

基本的には上記の夕呼先生と同じ扱いですが、安心のようじゴパ。純夏と一緒に夕呼先生のお手伝いがメインです。

霞に対するもんたの勝手な脳内 BGM — DTB の「ツキアカリ」・・

- 似てませんかね？

## もう一度=今度こそ（前書き）

ここにちはもんたです。設定はあらすじの通りです。

注意書きをば

1・「都合主義。

2・（名前のある）オリキャラ極力出さない。

3・開き直っているタケルちゃん。

4・Wikiを参考にしていますが、独自解釈等があると思います。

5・オリジナル機体は無し。

6・理系の人が読んだらツーハンドアックスを装備したくなる様な展開があるかもしれません。おつかけないでください。

こんな所でしょうか、もしかしたら続きを書いていく時に追加するかもしません。

以上の注意書きを読んで不快になつた、気分が悪い、海に帰りたくなつた、幻聴が聞こえる、ああ、窓にー窓にーという方は戻つた方が良いと思います。

7月20日改訂しました。

7月29日チョッピリ改定しました。

## もう一度=今度こそ

願つてしまつた。

もう一度、顔を見たいと。

もう一度、頭を撫でてほしさ。

もう一度、強く、優しく、抱きしめて欲しいと。

もう一度、力強くて優しいあの手で私の手を引いて欲しいと。

願つてしまつた、さよならを言いたいと。

タケルちゃんに会いたいと。

私のそんな自分勝手な願いは最悪の形で叶つた。

一話「もう一度=今度こそ」

ああ、なんでだらう。

白い饅頭の頭をしたお化け見たいな奴 兵士級に運ばれながら私は心がどこか抜けてしまつた思考で今の状況を考える。

桜花作戦で力を使い果たし、朦朧とする意識の中で願つてしまつた。  
もつ一度と、

そして再び田を覚ました時に、私の田の前に広がっていたのは悪夢の再現だった。

BETAに食べられていた。

武ちゃんがまた、私の田の前で。

私はあの時と同じで何もできなくて・・・・。

呆然とした意識の中、同じ考えが何度も頭の中を回る。

傍から見たら今の私はきっと人形の様に見えるだらう。

これはタケルちゃんの未来を滅茶苦茶にしてしまつた自分に対する神様の罰なのかな？

もし、そうだつたらどうしよう、大人しく受けるべきなのだらう

か。

そう考えると、「やつすのべき」「なんで、そんなの酷いよ」といつの矛盾した気持ちが、無意識から浮き出る。

また、ぐるぐる思考が回る。

どれ位繰り返しただらうか。

「 もち 「

気がつくと兵士級が私を無造作に地面へ下ろす。  
ビシリヤリ田的の場所へ着いたらしき。

嫌なほど見覚えのある場所だった。

私が『実験された』場所だ。

兵士級が私に近づく。

「 ハハ！ 嫌ー！？」

私の悲鳴など聞こえていないかのようだ私の衣服を破く。

兵士級はこれで仕事は終わつたといつ感じで、やつやつと向處かへ行つてしまつ。

それと同時に壁の隅からよく知つてゐる触手が私を吊るやつと寄つて来る。

それもうかうの反応を楽しむのがいいこと。

「……や、イヤ、嫌！ 来ないで……。」

思い出す。された事を、快感を、屈辱を、壊されていく心を。

「たす……か……助けて」

近づく恐怖に比例して思いが強くなる。

駄目だ、これ以上願っては駄目だ。

「たすけて、タスケテ、たすけて、助けて、助けて」

理性じゃ押さえられないくらい気持ちがどんどん強くなる。

駄目だ、駄目だ、このままじゃまた、奪いつてしまつ。壊してしまつ。

あと一回。 絶対に言つてはいけない。

セレード。

私との距離が半分になつた途端、触手達が一気に近づいてくる。

眼前に迫つたその恐怖に、弱い私は叫んでしまつた。

「うう！ 助けて、助けて！ タケルちゃん……。」

田を強く瞑る。

それと同時によく知っている感触が私を包む錯覚を感じた。

バツシツと何かが何かを掴む音が聞こえる。

…………。

……何時まで待っても触手達が私を呑るしに来ない。

ぎゅっと私の後ろから暖かい感触が伝わる。誰かの手が私を包み込む。

私は目をゆっくりと開ける。私の目の前にあつた光景は

まとめて掴まっていた。無数の触手が私の視界の左後ろから伸びる人の手によつて。

軍人なのだろうか？

触手を掴んでいる手は99式強化装備に包まれている。

違う、知ってる。この手は知つている。

「い、んの、野うおおおオオオオオオおおおおおー！」

よく聞いた声が私の後ろから聞こえる。

「なに、人の女に、手え出してんだ！ こんの、触手野郎！…」

左手が力いっぱい触手達を前に引っ張る。

ブチブチと触手からB E T A特有の赤黒い液体が流れしていく。

「オ、ラアアああ！…！」

彼が叫びながら左手を更に前へ引っ張る。すると触手達は悲鳴も上げずに千切れしていく。

私はそこで異変を感じ取る。

「……っ！ 入り口から二体来るよー。」

「まかせろー！」

彼は自分の左肩に掛けていた銃剣を構える。

異常に気がついたのか兵士級が三匹部屋に現れる。

それと同時に乾いた発砲音が連続して響く。

三匹の内、一匹は饅頭の様な頭を蜂の巣にされその場に崩れる。

一匹は胴体が穴だらけになり醜悪なその臓物を撒き散らす。

しかし、三体は一匹と一匹の影に入っていたため一気に此方に距離を詰めて来る。

騎士級程では無いとは言え、兵士級の動きはけして侮つてはならない。

歩兵にとつて小型種は十分な脅威だ。

彼は銃剣を構え直す。

予想外の早い動きで私達に迫る兵士級は人間の数倍の握力がある両手を伸ばす。

恐怖で私は彼にしがみつき顔を埋める。

同時にバッスと何かを貫く音が聞こえる。

静かになった。

恐る恐る目を開く。

すると、二匹目のやたらと広い、目と目の中間に銃剣が刺さっていた。

小銃に取り付けられている短剣が兵士級に深く刺さっている。それでもまだ死に切れないのだろう。

兵士級が大きいその顎を私に向けて開く。

目とは思えない兵士級の目が私の視線と重なる。

体が恐怖で萎縮する。

「だから、純夏に、近づくなつて、言つてん、だろがああアア！」

彼は拳で大きい杭を打ち込むよつこ、二匹目の顔面へ、深く刺さっている銃剣を更に食い込ませる為に拳を打ち込む。

グツシャツと音を立てて二匹目の顔を銃剣が貫通する。

兵士級がその場で崩れる。

今度こそ死んだようだ。

戦いが終わると同時に彼は私を正面から抱きしめる。

あの時と同じ優しくて暖かい感触に包まれる。

それと同時にわかつまで感じていた罪悪感が再び私に溢れる。

けど、それよりも。

「……………」わ……かつた……怖かつたよお……タケ  
ルちゃん」

わかつまで我慢していたものが一気に溢れる。決壊した心の堰は簡単に治まりそうに無い。

届いた、来てくれた、その事が堪えられないくらい

「『めんな、もひ、大丈夫だから俺が直ぐに此処から連れ出してやるから』

嬉しかった、彼に

ことが。

タケルちゃんにまた会えた

いつもは楽観的で、子供っぽくて、普段は私をよく苛めてくるけど、偶に、優しくて、かつこよくて、小さい頃からずっと一緒にいる。

そんなタケルちゃんが『世界で一番大好きだ』

。

## 虚数空間

どれ位この場所で彷徨つていただらうか？

最初は一つの思い付きだった。

此処で他の俺を見送った後すぐさま三度田をと、悪足掻きをする直前に思いついた。

「……ソリハて因果の宝庫だよな？」

虚数空間にあらゆる因果が可能性として散ばっていると言つながらこの場所でBETAに打ち勝ち、かつ守るべき人達を誰も犠牲にしな

い。

更には純夏を人の体に戻してやれる。

そんな夢の様な可能性があるのでないかと。

結果は御覧の通りだ。

名伏しがたいガラクタが集まつた山のよつな、肉塊が一つ。

今の俺の姿だ。

失敗した。

どうやら、欲張りすぎたらしい。

欲しい因果のイメージを明確にしないで大雑把にしすぎたのも原因  
だろう。

大量の因果は一人の白銀には重すぎた。

滑稽だと思った。

怪物になつて永遠に彷徨う。

まるで御伽噺の悪役だ。

悪くないかも知れない。

何も守れない、一番守りたいものは必ず守れない哀れな男にお似合

いの最期だ。

そして彷徨う。大量の因果をその身に宿しながら。

どれ位この場所で彷徨つていただろうつか？

「……や、イヤ、嫌！ 来ないで！！」

声が聞こえた。

前方に光が見える。

彷徨う怪物は理解する。

呼んでいる。己を求めている。

「たす……けて……助けて」

待つてつてくれ直ぐに助けに行くから。

そうして怪物らしく無数の手を広げるが声の先に届かない。

くそ、クソ。

怪物では届かない。

だから呼んで欲しい、俺の名を。怪物ではなく、俺の名を。

「たすけて、タスケテ、たすけて、助けて、助けて、助けて」

怪物の体が変化する。

呼ぶ者の声に怪物の体が変化する。

怪物は願う。

あの場に必要なものを。

あれど、これと、ああ！ これも必要だ！！

肉塊がまた変化する。

えあ、呼んでくれ俺の名を！

「つっ！ 助けて、助けて！ タケルちゃん！..！」

「ああ！ 今行くからなーー！」

光へ手を伸ばす。

その時、怪物の体は強化装備に身を包む一人の人間に変わっていた。

今度こそ、守り抜く覚悟を、自分の大切なものを、

それになにより、

自分を呼ぶ少女を今度こそ、時空確立一番の幸せ者にするため。

ところがこれな、とてもおおむね、とてもたこせつな

かこぶつのしょりねんと、かいぶつのまわるねんわ

めの

あことひめのねじめばなしが

## 持ってきたもの=運ばれたもの（前書き）

一話です。・・・・こんかいはかなり」都合主義です。  
そして、タイトルのセンスが無い自分。

しかも次の話がけつこいつ遅れそうです。人として恥ずかしい。

高校の頃よく顧問に「お前最初はいいんだけどなって」言われるの  
思い出します。

こんなんですが、生暖かい目で見守つてやって下さい。  
・・・・・ストックも作らなきや。次の話は7月中になります。  
読んでくれている皆様申し訳ない。

6／20修正 自分であとから気づいた事なのですが・・・。  
関東地方に居るのに関東ってなんだよ！大変申し訳ありません。  
その部分を修正させてもらいます。

前「・・・関東へ」後「・・・高尾山へ」迷惑をお掛けしました。  
ああ、日本地図が欲しい・・・・。

7月20日改訂しました。

7月26日誤字修正しました。（ちゃんと直せたか、不安ですが  
……）

7月29日チョピット改定しました。

持ってきたもの=運ばれたもの

仙台第一帝都

不味い。

「マズ、…………もうちょっと何とかならないのかしら」

一口つけたコーヒーもどきを机に置き不満を吐く。

手元には未完成の数式。徹夜は3日目。

体が倦怠感に包まれている。

そもそも一休みするべきだらうか？ 時間は……3～4時間は寝すぎか。

取り敢えず椅子に深く腰掛ける。

……1時間だけ、1時間だけ脳を休めよう。

.....

。

夢だ、

.....

私は今夢を見ている。

なぜ夢と言えるか、だって、世界が可笑しい。

現実とは真逆だ。

世界 少なくとも日本は平和。

私は学会から爪弾きにされて、学校の教師に甘んじている。

そして自分の思いつきで、まりもや、おもしろい反応をしてくれる生徒を弄っている。

なかなかに楽しそうだ。

けれど同時に思う。私が教師？ 滑稽だ。

既に何人の人間の人生を壊したと思っている？

現に私は横浜の人々を見捨てたではないか。

人類を救うために、目の前の人を見捨てる。

矛盾だ、矛盾している。

それでも、私はやつた、横浜の人々を見捨てた。

一人の少女を利用して世界を救おうとした。

一人の少年をモルモットにして自分の研究材料にし

た。

そして、数少ない自分の理解者を  
まりもを自分の計画で死  
なせた。

私が弱さでその事を仄めかして言つたとき、意見  
を聞いてこう言つてくれる人間がいた。

『大丈夫、あなたは正しい事をした。世の中は理不尽と不幸と不平等  
等が普通なのであって、彼女達がその中にあった事は別に誰の責任  
でもない』

フザケルナ。

こんな事が言える人間は明らかに自分が『理不尽と不幸と不平等』  
と遠い所に入るのを前提で話している。

もしくは既に自分が『理不尽と不幸と不平等』な目にあつたか。そ  
れとも、脳が朦んでいるか、

あるいは、財布を落とす事、道に迷う事程度の『理不尽と不幸と不  
平等』が彼女たちの『理不尽と不幸と不平等』と同じ物だと勘違い  
しているのか。

そして思い出す。消えていく少年の言葉を、

「…………先生。俺たちがやつたこいつって……みんなが命と引き  
換えにてに入れたたるものって…………」

。

「…………ちやんと意味…………ありますよね……？」

私がそこで何か言おうとした時、意識は現実に戻る。

「…………て………… やー。おめでトやー、香月博士」

声がする、田を開けると私の部下が少し慌てた様子で話かけて来る。

今、BETAは横浜でハイヴを建設中のはずだが何か起きたのだろうか？

いや、待ておかしい。

「お休みのといふ、大変申し訳ないのですが…………」

部下が喋つてくるのを尻目に俯く。

溢れてくる、自分が。

色々な自分が頭の中でごちゃ混ぜになる。教師として絶望へ向かう生徒を見送る自分。第四計画が失敗して自棄酒を呷る自分。

そして、友を死なせながらも、手を罪でじす黒く染めても歩みを止めない自分。

それぞれが中途半端な穴あきチーズで、それが溶けて混ざっていく。

堪えられず、気持ちが悪くなり頭を抑える。

そして気味が悪いほどに簡単に今の自分の異変に理解が来る。

「どうされました？…………頭痛…………ですか？」

部下が不安そうに声をかける。

「……大丈夫、少し眩暈がしただけよ、報告して頂戴」

「しかし」

「いいからー」

「……はい、ではこの写真を」

[写真には偵察衛星で撮影された横浜ハイツと小さな影が一つ。

予感と言つか確信が来る。

状況証拠がある程度そろった。

あれから恐らく連れ出せたのだ。いつ。

「…………この影どこへ向かった？」

部下が驚いて目を見開く。『まだ詳細を言っていないのに』やつ、言  
いたげな目だ。

「…………帽廻山へ

「…………やう」

あんた、まだ足搔くつもつなのね……白銀。

約1日前、横浜ハイヴ

少し困ったことになつた。

「…………うつぐ…………うあ…………「べん、ね…………また巻き込んでじゅつ  
て…………「めん…………ね

それから純夏が泣き止まない。

いや、何に謝つてるかは知つていい。

さすがにそれくらいの機敏はさつせるよつになつた。

「……あーなんだ、その別にな、俺が此処に来たのはなんといつか  
……お前のせい半分、自分の意思半分と言つか  
……」

が、いかせんフォローが上手くなつたわけではない。

「…………それでも…………それでもおー。」

もう泣いてるこいつもなかなか……。って違つだろ、俺。

とつあえず落ち着かせることに専念する。

いつかしたよつこ少し強く抱きしめ、右手で純夏の頭を撫でてやる。

「うう、…………はう…………」

少し驚いたのか、ため息混じりの小さな悲鳴を上げる。

暫く続ける。

泣き声が小さくなつてきた。じつやら落ち着いてきたらしい。

「もひ、大丈夫か？」

「…………うん」

実際に今の現状はだいぶ危険だ。なんてたつてハイヴの中である。

早くこいつを連れ出さなくちゃいけない。

「よし、まことに部屋を出よう

「……へ？」

「確信があるんだ。それに」

俺はつい、今の純夏の格好、もとい体を見る。

「あ……」

自分が裸に靴下という一部の人には堪らない格好である」とを思い出したのか顔を急に赤くする。 カメラだしだっけ？

「～～つー！ レバ！」

「がふー！」

……とりあえず触手エリアから純夏を連れ出す。

俺の確信が当たっていた。

広いハイヴの抗道には俺が純夏に呼ばれる直前に必要だと感じた物が散ばっていた。一番目当ての物は目の前にあった。

つーか、物が物なので嫌でも田立つ。

## Type -00C

武御雷。

桜花作戦を成功に導いた要因の一つ。日本の戦術機に対する技術を集めた傑作だ。

これは一般の近衛兵が使う機体だが性能は日本の第三世代主力機である不知火と比べると出力は2割り増し、関節強度は6割り増しだ。一般兵が使うのでこれだけの性能があるのでから、操縦経験なしで、白以上は難しいと思うしな。

今それが、俺と純夏の田の前に、ハイヴ内の光に美しく照らされる日本の守り神が威厳を感じさせながら前屈みで静止していた。

「……なんで、戦術機が……」

純夏が驚いている。無理も無いと思つ。俺だつて予想以上の結果だ。

純夏の所に行く直前考えた。あの場で必要な物をと、流石にこの身一つでハイヴから純夏を助け出せるほど、スーパーマンではない。

そこで、俺のイメージする。最強だと思う機体。

それが武御雷だった。乗った記憶が無い事が不安材料だが、やはりハイヴから脱出するなら少しでも性能がいい物をと考えたのだ。

因果を持つて来るのに成功したなり、管制コニシットは複座型、OSはXM3になつてゐるはずだ。

俺と純夏が無事に脱出するためなり。無茶苦茶に動かしてスクラップにしても、問題ない。

「ねえ、タケルちゃん。…………どうやつたのこれ？」

「あーなんだ、その、失敗の副産物というか、…………後でな」

結構氣まずい。『二回目をやりつとした時、因果を持つて行こうと失敗してその時に運よく、くつづいてたんだぜ！』とは言い辛い。

取り合えず持つてきた物を集める。

あ、その前に。

「おい、純夏。ホラ」

俺は武御雷の近くにあつたものを拾い、純夏に服の代わりにと渡す。

訓練兵が使う強化装備だ。訓練兵用って言つても機能に違ひは無い。何故、訓練兵用かは…………無意識だ。

「あ、強化装備……なんで訓練兵用？」

「…………ナンデダロウナ、不思議ナ事モアルモンダ」

「じー」

視線が痛い。

「はあー」

ため息をつかれた。

スケベ

۱۰۷

そう言つて武御雷の蔭に隠れてしまつた。  
覗いたら

「うるさい」

ですか。

うん、準備だな、脱出準備。ハレンチな事を考えてる暇はないんだ。

俺はそこらへんに転がっている人類の希望を集める事に専念する事にした。

「直ぐ戻つて来るから」

そう言って俺が純夏から離れて作業に移ろうとした時、

「？」せこやけ

後ろから手を掴まれ少し体勢を崩す。

「えーと、純夏さん？」

俺は何故か丁寧語で、顔を武御雷の蔭から出してくる純夏に意図を尋ねる。

「直ぐに……着替えるから」

「へ」

「直ぐに、直ぐに着替えるから一人にしないで……」

不安そうな顔（+上田遣い）で見つめられる。

その表情は保護欲をかきたてられると云つか、そんな田で見つめられるとき々我慢しなくちゃいけなくなると言つか。

「わ、解った。待つてつてやるから早く着替えりまえ」

「…………うん」

少しだけ笑つてから顔を引っ込め蔭から物音が聞こえ始める。

…………やばい、可愛い、可愛いすぎる。

キテルなあ俺。

そして純夏が着替えた所で作業を開始する。

俺が因果として持ってきたのは、

前回の時、純夏が集めた各ハイヴのマップデータを含むBETAの情報。

これは大量のデータディスクに入っているので、脱出中に割れる危険が高いから軍用バッグに詰める。クッションに綿も持ってきた。

そして桜花作戦後の夕呼先生の研究室にあるオルタネイティブ4に関する資料を全部。流石にすごい量だ。こちらはトランクスに。

複座型だけど全部入るか不安だ。

この不安で一つ思い出す。

数式だ。

BETAの情報を夕呼先生に渡すのは別に構わない。あの人ならそれを使って大暴れするだろう。

でも数式は……。

俺の横にいる純夏を見る。

純夏は『人間』だ、……オルタネイティブ4の資料を全部は渡せないな……純夏に触れる所だけ後で抜こう。

最悪、事の次第によつては夕呼先生と敵対する。

考えるだけで絶望的な気分になるが、今はそれだけの覚悟で済ませておく。

「……タケルちやん？」

「なんでもない、それより早く武御雷に乗るぞ。そろそろBEITA  
が気づくかもしね」

「うそ

手を繋ぐ。

温もつが云わぬ。『一度も離してたまるか。

』『この手を…………一度も離してたまるか。

』の悪魔の巣窟から必ず彼女を連れて生還してやる。

因果の壁を超えた怪物を無礼なよ。

## 脱出=出発（前書き）

話がきりの良い所まで出来たので、上げさせてもらいます。

・・・・・ストック結局出来てない。（汗

申し訳ないです。

今回、初めての戦闘描写なので不安あります。でも、もし気になつた所がありましたら、指摘お願いします。

7月20日改訂しました。

7月26日誤字修正。（他にあつたら、報告お願いします）

7月29日チョピット改定しました。

## 脱出＝出発

怪物は駆け回る　人類の刃を身に纏い　己の胸に抱く最愛の姫君を悪魔の巣窟から連れ出すため。

状況は予想通り。

白銀の駆ける道、ハイヴのドリフトには、淡く光るその美しい道には酷く不釣合いな異形が溢れている。

いや、酷く不釣合いな異形だからこそ似合つのかもしねり。

B E T A

全人類の天敵、それは途方もない数で白銀の通るべき道を埋めていく。

く。

しかも武御雷の方へお行儀良く隊列を組み真っ直ぐ此方へ。

武の膝に乗せられてる純夏の顔をから血の気が引いていく。

だが、因果を超えた怪物は、白銀武はそんなものには屈しない。屈せない。

目の前に絶望が広がっていたとしても、もう立ち止まりはしない。

決めたのだ、大切な人達を守り通すと。

誓つたのだ、今、白銀武に暖かい温もりをくれる少女をこの狂つた世界で一番の幸せ者にし、共に未来へ《明日》行くと。

「……純夏、用え閉じて、歯あ食いしばりてやー。」

「は、はいー?」

純夏が突然の言葉に口をぱくべつとせるが今はかまつてやれない。

(行くぞー)

覚悟を決めると同時にアクセルを一気に踏む。それと同時に管制コーンツト内にかかるGが一気に強くなる。

ぎしづと後ろのシートから縛つたバッグヒートランクスが音を立て軋み揺れる。

ジャンプユニットから吹き出る光が一気に増え、武御雷がBETAの群れへ突っ込む。

今の武御雷の装備は**強襲掃討**。

87式突撃砲が4門、あと本当は65式近接戦闘短刀が2丁あるのだが武御雷には両腕に00式近接戦闘用短刀という近接戦用固定装備が装備されているので装備してない。

そして予備弾倉は36//つが8個120//つが4個。

現在装填中のと合わせると36//リ24000発120//つが48

発とかなりの数だが、田の前の異形どもを全部殺すにはまったくたたかりない。

そもそも今の目的は、

(「これから、絶対に生きて出でやるー。もちろん、一人とも無事にだー！」)

生きて此処から抜け出す事だ。要は、

(邪魔なヤツラだけ斃して押し進むー。)

そして最初の接触、BETAの中で一番の硬さを持つ突撃級　こいつは無視だ。

旋回能力はBETA中最低のこじつは上に跳んでしまえば簡単にやり過げせる問題は、……一番田ー

突撃級をかわすと同時に一番田、要撃級が着地と同時に左から角の様な前腕を振り上げてきた。

(……つらー。)

すぐさま左の87式突撃砲からマズルフラッシュが起きる、要撃級の苦悶に満ちた顔、感覚器が汚い音を立て弾ける。

そして、鈍くなつた瞬間を逃さず武は87式突撃砲で要撃級を物言わぬ死体を作り変える。

こじつはさつきの突撃級と違いBETAの中でも旋回、機動力共に

優れておりBETA戦力の中核を担っている。

が、反面、尾節の部位、武が先程撃ち飛ばした苦悶に満ちた顔が感覚器の役割を果していいるらしく、そこを潰されると動きは途端に鈍くなる。今は脱出が目的なので、そこは積極的に狙つ箇所だ。

(……危つぶね、XM3で良かつた)

そう思いながら武は要撃級の群れの中を高速道路を突つ切る猫の様に飛び回る。

止まつては駄目だ、躊躇しては駄目だ、間違えては駄目だ、なにか一つずれたらそこで終わつてしまつ。

(……フツン!)

要撃級の頭だけを潰しながら進む、着地が危険な時は要撃級を踏んづけながら跳ぶ。

(……出やがつた!)

こんどは前方にある右横のドリフトから赤い何かが飛び出してきた、人のような腕、赤い皮膚、馬の蹄のような足、明らかにおかしい口の位置に剥き出しの歯、そしてのっぺらぼうの顔に釘をたくさん打ち付けたような頭部らしき物。

BETAの中で一番衛士を殺している事で悪名高い、 戦車  
級だ。

今日の前に迫つてゐる奴の後ろには大きい赤い肉の塊が、地獄絵図

が、後へと続いている。全て戦車級だ。

距離が近い、銃を構え様としてる時には取り付かれているだろう。こいつに取り付かれたら最後、後方の戦車級共に食べ尽くされてしまう。

(撃てないんだつたら 斬るだけだ)

戦車級がご自慢の大きい口を開き武御雷へと、飛びつく瞬間、白銀は武御雷の右腕の87式突撃砲を手放し、右腕を突き出した、それに合わせて武御雷の右腕にある筆手の様な場所から、隠し爪0式近接戦闘用短刀が勢いよく飛び出す。そして戦車級はその刃に自ら飛び込むような形で串刺しにされる。

しかし、まだ生きているらしく戦車級の体が激しく痙攣している。

(クツソ、ゴキブリかよ！？…………いや、待てよ…………むしろチヤンス！）

武は串刺しにした、戦車級を後方の戦車級の群れへ投げ入れる。投げ捨てられた戦車級は宙を舞い、自らの同胞への群れへ飲み込まれる。

ここにBEITAの特徴を一つ、 奴らは決して仲間を攻撃しない。

そこで、一つの現象が起きる。投げ捨てられた戦車級を中心に、戦車級の群れに小さい空間が開いた。

投げ捨てられた戦車級は左側の足が潰れたのか、右足だけで急いで

立ち上がりうとし、円を描きながらその場で足搔いている。

(今だ、ここの方法……行けるー。)

それから武はBETAを殺さず、無力化 別の呼び方をする  
なら、半殺しにしながら道を開いてゆく。

同胞を決して攻撃しないBETAの性質を利用したのだ。この方法  
なら弾の消費を抑えられるし、半殺しのBETAが他のBETAの  
通路を邪魔するので進行速度を抑えられる。

そして武は己の目的を満たすため、進み続ける。

暫く同じ作業をしながら飛び込んだ。

『……ねえ、タケルちゃん、タケルちゃん』

不意に純夏に声をかけられた、厳密には頭の中に声が聞こえた。

純夏の方を見ると手を武の胸に当て、耳と口を閉じている。どう見  
ても喋つてはいない。

そもそも、体が軍人ではなく一般人の今の純夏が時速何百キロも出  
す戦術機の中で平氣でいられる方がおかしい。

ならば、何故、純夏から声が聞こえるか。

## プロジェクト機能。

それは今までの彼女が使えていた能力。使用する相手に自分の画や色を見せる能力だ。しかし今の彼女は〇〇ゴニットでは無い筈だ。

(お前……なんで使えるんだ?)

『前みたいに万能って訳じゃないよ? 現にタケルちゃんにこうちやつて触れてないと出来ないみたい。』

そういつて純夏は田を開じたまま武の胸に強く手を当てる。

(なるほど、要は残り物……って痛い、イタイ! 抓るなー?)

武がそう思った瞬間、純夏の手が武の頬を抓る。因みに今はハイヴ内で大逃走の真っ最中だ。

『それで……タケルちゃん。もしかしなくても反応炉、S-11で爆撃するつもりでしょ?』

(……ばれてたか。いや、ほらこのまま外出でもレーザー種に攻撃されるだろ?だから……)

『だから、反応炉を戦術機に付いてるS-11で攻撃、破壊は無理でも、弱い所をピンポイントで破壊できたら、ある程度の損害を与える。そして、あわよくば、その時のBETAの混乱に乗じて脱出つてところかな?』

(よくできた、純夏。……つうか、純夏のくせに頗良いな、おこ)

その言葉を聞いてムカツときたのか、さつきまで閉じていた大きい瞳を開けて得意げな顔をする。

嫌な予感がする。

「フーんっだ、元〇〇ゴニットを舐めない事だね。あつかんべーつ痛だ！」

純夏が舌を出していたら武御雷が激しくタイミング良く飛び、あんのじょう、純夏が舌を噛んだ。

……跳ばしたのは俺だけど、いやほり、近くに要撃級がいたし……。

(……悪い)

『馬鹿ー！ タケルちゃんのバカーー！』

そして怪物はお姫様の機嫌を取りながら、悪魔の脳味噌を田指す。

約22時間後仙台第一帝都

「伊隅、伊隅、イースミー」

「……………ビラしたんですか、香月博士？……………お疲れですか？」

「違つわよーあー違わないか、今少しこれからの……………じゃなかつた、極秘任務よ、極秘任務」

「はあ……………でしたら、A - 01に召集を……………いえ、私個人に、ですか」

もしA - 01部隊に召集があるのならブリーフィングルームに召集が掛かるはずだ、そうではなく伊隅個人を呼び出したと言つ事は……そういう事なのだろう。

「ビンゴ、さすが隊長ね、回収してきて欲しいのがあるのよ」

「……………場所は？」

「高尾山へ行つて頂戴。人類のこれからを左右しかねないモノがあるはずよ」

「それ程の物を私、個人で?……………お言葉ですが、あそこは今はBE

「TAの勢力圏内です。それ程重要な物ならばA-01部隊全体で行動した方がいいのでは？」

「今は、まだ正規の帝国軍、もとい日本政府に知られる訳にはいないのよ。だから関係者も極力増やさないようにしなくちゃいけないの、いざとなつたら私の権限をフルに使うのを許可するわ」

「……了解しました、回収目標は？」

「…………未練たらたらの怪物と、その馬鹿が守つてゐる、お姫様」

「は？」

「あ、そつそつお姫様を乱暴に扱つたら、馬鹿な怪物が暴れるから気を付けなさい。……詳細はあなたの出撃準備が出来てからよ」

「りょ、了解です」

そう言つて伊隅が退室しきつとした時。

「伊隅

夕呼が声をかける、心なしか、普段より優しい響きに聞こえた。

「まだ、なにか？」

「今回の件が一段落ついたら休暇の手配するから……幼馴染と一緒に温泉でも行きなさいな……混浴で」

「え、えええ！？　お、温泉！　こ、混浴！？　と、とこいつがここに、香月博士どうしてその、正樹の事を？」

「夢よ、ゆ・め、それもどびつき甘いね……」

そして、夕呼は窓へ目を向ける。…………は靈と幽に彩られている……。

(…………今度はいつ晴れるのかしら)

魔女は釜を回す準備を始めた。

27時間前、横浜ハイヴ下層。反応炉まで約数キロ

淡く光を放つハイヴの下層、そこを後数キロ進めばハイヴの頭脳、反応炉がある。

反応炉はBETAにとってはハイヴの中核であり、なにより甲一号オリジナルハイヴの上位存在との通信機の役割もある。

まさに、ハイヴの司令塔である。

そこへ向かう黒金に光る機体がある。

Type -00C 武御雷。

BETAの返り血で所々が汚れていたり、装甲が傷だらけだが、欠損箇所は無い。

そしてその後ろには大量の魑魅魍魎が迫つており、肉の壁がハイヴの光る壁を侵食している様にも見える。

その様子は丸で、御伽噺の呪われたお城からお姫様を連れて逃げる異国の王子様と呪われた城の住人達とのおつかけっこだ。まあ、城の住人たちの見た目は呪われてるというレベルを超えてしまっているが。

『タケルちゃん！ 後ろ！ うーしーろーーー！』

純夏 お姫様がパニックになりながら、王子様の頭の中で直接喚く。

(解つてる！ こまま突つ込むぞーーー！)

武 王子様は既に覚悟を決めているらしくお姫様より落ち着いている。

そして、二人の乗る戦術機の道の奥には、広く開けた空間が見える、そして他の場所よりも大分明るい。

大広間だ。  
メインホール

あと少し、後数秒。武にはこの時間が永遠のようだ感じじる。

(頼む)

なにも起きるな、ここが終わる未来は武と純夏は望まない。

後、数キロ。

(こつせんじで、邪魔に入る)

後、数百メートル。

(なにかに、縋りたい気分になるな。……ああ、だから宗教があるのか)

後、数百メートル。

(じやあ、俺は、俺と純夏を信じよう)

刹那、武は目を閉じ祈る。

『タケルちゃん着いたよ!』

叶つた。

(よし、純夏! 後でたっぷり可愛がつてやるー!)

『ふえええ！？』

武御雷は部屋に着くと同時に飛翔し、反応炉に着地する。

『場所は……そこが通信ボイント！』

純夏が管制ユニットのコントロールパネルに何か入力するとモニターに、設置ポイントが表示される。

(よつし、設定は.....出来た!)

武はS-11の設置を終えると主縦坑の真上へ跳んだ。

それとタツチの差で、戦車級が反応炉の目の前へ迫り

( 飛 つ ベ ー ダ ! ! ! )

武御雷が急上昇すると、同時に大広間は破壊の光に包まれた。

. ~ )

急上昇しながら、武御雷が爆発の余波で揺さぶられる。今、壁に激突したら一貫の終わりだ。

武が必死になりながら、武御雷の姿勢を保ちながら上へ、空を手指数す。

武と純夏の眼前に外の光が漏れだす。

そして。

(スゲえ……)

『ふわああ……』

二人の目に荒野の世界が広がっていた。

ハイヴの頂上に出た、出れた。

成し遂げたのだ、

あの、絶望の中から。

白銀武は奪い返したのだ、

最愛の者を。

(……つて、呆けてる場合じゃねえ！？)

武は網膜投影されている機体の状態を見て慌てる。

跳躍ユニットの燃料が残り4割を切っているのだ。

それにこゝは、ハイヴの頂上、もたもたしているヒーラー種に落とされかねない。

(行くぞ純夏ー!)

『ど、どう?』

(こゝよつ少しでも安全な場所へ行こう)

『ハイヴより危険な所の方が少ないと思つよ……』

(じゃあ、燃料が持つ限り進む)

『……うん』

こゝにして怪物と姫君は悪魔の巣から脱出した。

空は今にも雨が降りそつて、こゝの世界の現状を訴える様だ

けど、

そんな事は今の一人の頭の中にある幸せと比べれば、どうでも良い事だった。

## やるもの=オレノモノ（前書き）

どうもです、もんたです。4話が出来たので上げさせてもらいます。

純夏の誕生日前に出来てよかったです。

今回は・・・・・もしかしたら結構イタイかもしないです。

一つい報告を、

もんたの凄い個人的な事情で次の話が一ヶ月程遅れてしまいます。  
(・・・・・世紀末テスト怖いです。タンイオトシタクナイ)  
世紀末を乗り越えたあたりで再開、もしくは次話を投稿するつもりです。

いや、本当に個人的で申し訳ない、普段から真面目に勉強していれば・・・。  
(何回目の後悔だろ?)

7月20日改訂しました。

7月26日誤字修正しました。もし誤字を見つけたら報告お願いします。

7月29日チョコレット改定しました。

## やるもの=オレノモノ

高尾山

(…………あれか…………)

伊隅は雨と泥で汚れた山の車道でそれを双眼鏡越しでそれを確認した。

車道には伊隅と戦術機輸送車両の87式自走整備支援担架が一台だけ、周りには山の景色以外は何もなく雨の奏でる自然の音しか聞こえない。

鬱葱とした山の中、少し開けた所にべつとつと付着した赤黒い液体と傷だらけの装甲を雨に濡れさせている見たことのない戦術機をその場で視認した。

その様子は戦いを終え力尽きた様で、山の斜面を背にして、しゃがんでいる。なぜだか寂しい気持ちになる。

(それにしても…………あの液体はBETAの返り血じゃないか?  
…………だとしたらあれは本當に…………)

ありえない。

普通にそう思った。香月博士を信用していない訳ではないが、詳細を聞いた時は自分の耳を疑つた。

現に香月博士も『自分の目で確認するまで信用できないと思つけど』と前置きしていた。

(あの、ハイヴから脱出したというのか！？)

ハイヴは人類にとって敗北の象徴である。

現に人類は幾度かハイヴに大規模な戦力を投入し、その度に膨大な犠牲者をだしている。

落とせない理由は単純だ。

あそこには言わばBETAの巣。数の暴力を最大の売りにしている侵略者共の巣窟だ。

入つたら最後、原水のように湧き出るBETAを相手に反応炉のある大広間を目指さなくてはならない。

そしてそれを人類は一度も成し遂げられていない。

そんな、あの世の方がマシなんじゃないかと思うような場所に地上からの支援を無しに脱出する。

もう一度強く思う

ありえない。

(こいつたい、どんな魔法を使つたんだ? ..... とあります回収  
目標を探すか)

伊隅は己の疑問を胸に一先ず仕舞い。事の真相を知る当事者を探す事にした。

高尾山、山小屋

ぱみゅぱみゅぱみゅぱみゅと薪を出してこる囲炉裏の火をじっと見つめる。

火はゆつたりと形を変え、熱で狭い部屋を暖めている。

俺は自分の横に有るあらかじめ集めておいた薪に使えそうな枝を火の中に放り込み備え付けの火搔き棒で勢いを調節する。

一気に勢いが強くなりかけた火は火搔き棒という不自然な干渉によって入れる前と比べ少しだけ大きくなるだけで留まる。

ついでに『必要の無い資料』を燃やす。

『必要の無い資料』は火の中にくべると端から燃え始め紙に意思があるかのように捻りながら消し炭に変化して行く。

(.....雨、か)

紙の最後を見届けたあと、視線を山小屋の窓へ向ける。

窓のガラスは白く濁つており、隅には蜘蛛の巣や木屑、名前の知らない虫の死骸が散らかっているが外の様子はなんとか見える。

外は雨が降つており、雨が小屋に当たつている音が聞こえ、黙つている俺にとつては喧しく聞こえる。

窓ガラスの向こうには俺と純夏の蜘蛛の糸になつてくれた武御雷が力尽きている。一応まだ動かせるみたいだが、徒でさえ専門の整備知識が必要な武御雷が雨晒しつて整備兵の人から見たら悲鳴どころじやない氣がする。

(……本当にお疲れさん。お前は命の恩人だよ)

とりあえず、短い付き合いになつた相棒に労いの言葉を心の中でかける。

「うへふにゃタケルちゃん」

突然、俺の膝で寝ている純夏の頭が動く、けつこうくすぐつたい。安心しているのか、年齢より何処か幼く見える寝顔だ。

俺は純夏の頭のアホ毛を指で少し弄りながら、純夏の着ている強化装備のバイタルデータをチェックする。

(熱は……37・2、少しほ下がつたな。…………もう少し休んだら連れて行こう)

こんどは頭を撫でる。

少し汚れているリボンが目につき遣

る瀟無い気分になりながら俺は昨日のことを思い出していった。

約7時間前

(…………うー！…………あー、雨降つてさひやつたか…………)

小屋の周りで手ごひな薪枝を拾いながら空を見上げる。

小さな雲が少しずつ勢いを増して落ちてくる。本降りになりそうだ。

俺は純夏が待つている小屋へ急いで戻ることにした。

俺はハイヴから脱出した後、武御雷の残りの跳躍ユニットの残量燃料をギリギリまで使って此処 高尾山に到着もとい不時着をした。

それで偶然見つけた小屋で一晩過ごす事にした。小屋の中は狭いが、囲炉裏があり、寒さを凌ぐならけつこう使えそつだ。

強化装備はまだ機能しているが、寒いものは寒い、主に顔が。

本当なら近くを偵察している帝国軍に接触する所なのだが、一度拘束されると開放されるまでどれ位掛かるか解つたもんじやない。それにその時に持つている物を調べられたりしたら……最悪の事態が頭の中で浮かぶ……。

今持つている荷物の中には、オルタネイティブ4の結果とも言える資料があり、例の数式まである。……まあ、オルタネイティブ4の結果は知られても構わないし、むしろ教えるべきだとも思う。相手を選ぶ必要があるが。

でも〇〇ゴニットの素体 鑑純夏の事は隠し通す必要がある。  
もし、〇〇ゴニットの素体に鑑純夏という少女が最適と知られたら  
……。

間違いなくこの世界の人類はやる。己のする事が外道だと知りながらも、自分達のやる事が罪だと知りながらも、許してくれなくともいいと、恨んでくれとも思いながらも、必ず 普通の女の子と人類を天秤に賭けて。

一般的にどちらに価値が在るかは明白だ、だから 渡せない、させない、許さない、天秤に賭けさせない。

人は必ず価値観を持つ。

例えば 宝物で がりで 力を与えて。

何でもない徒の貝殻が、ある少女にとつては大切な徒のお揃いの人形が、ある姉妹の世界で唯一つの繋不出来な木彫り人形が、〇〇ゴニットに世界を守る

結局、モノの価値と言う概念は個人に委ねられるのだ。だから、だ

から.....。

怪物にとつてお姫様は

世界より価値がある。

傲慢だ、とてもなく傲慢だ、当事者以外の人間から見たらどんなにエゴイストだと言われるだろう。

だが、こうも思う 何が悪い？

大勢が個人に要求を求める事が問題ないなら、個人も大勢に要求を求めても良いだろう？ 大勢だつて多くの個人の集りなのだから。

エゴイスト？ 僕の大切な人達と純夏を守り通すことが人類にとってエゴならば、人類がBETAに対抗しているのも他所から見れば人類のエゴではないか。

（ああ、そういうばBETAは自分達の事を生き物とは定義してなかつたな.....。まあたいした事じゃないけど、殺る事には何も変わらないし）

脱線したけど、結局は犠牲に出来るモノと犠牲に出来ないモノが違うだけ、価値観が違うだけ、....お互いに大切なモノがあるから.....。

だから俺から一つ解決案を、

俺がついでに守ってやるうじゃないか、人類を。

心配するな、前回はそっちを優先しやり遂げた。  
亡くして。

みんなを

だから今度は俺の都合を優先する、別にいいだろ？ 俺の大切な人たちを守る事を最優先にしたって。

それで、俺の知らない所で他人が死ぬ事になつてもその事実をけつしつて忘れたりしないから。悪い話じやないだろ？ 前は誰が世界を救つたか殆どの人が知らなかつたんだし。知りようが無かつたとは言わせない。それは知ろうとしなかつた事と同義だ、たとえ周りの都合があつたとしても、だ。

「…………ね…………ん」

だからマシだと思つて欲しい。

「…………ふ？ わた…………い…………？」

俺はけつしつて後悔はしないから。

「聞いてるー？ タケルちゃんー！」

「…………あり？」

気づくと小屋の中  
扉の前で大量の薪枝を抱えたまま突つ立つていた。小屋で待っていた純夏が心配そうな顔をして立っている。

(…………いかん、自分の思考に酔つていた…………)

どつやら道を戻る途中で、考え方に入っただらし。

(……悪い癖だな…………」つや……)

言い訳を一つ、なにせ虚数空間で永い間一人、（または一匹）ずっと彷徨つていたから意識を無くさないためにずっと、色々考え事をしていたのだ。

例えば、霞のウサ耳はどうやって動いているか不思議だよなとか、冥夜の髪のセットは色々切れそうだよなとか、今度機会があつたら純夏のアホ毛を弄つて見ようとか、周りの人達に関する素朴な疑問から『これってけつこう謎じゃね？』という事を良く題材にしていた。

…………一応、理由はある。あそこは元々因果が漂つだけの場所だ、人が意識を保ち続けるのは簡単じやない。だから他の人や、自分に関することを常に意識しないとあそこで精神を崩壊してしまう。だからけつしつて、けつしつて、下らない事を考えていた訳ではない。

（よし、後で純夏のアホ毛を弄るつ）

寝た時がいいか、いや待てよ？ 寝てる時ずっと寝顔を見ていてやるのもいい、と下らない事を考へている時だった。

「もー何時まで一人」と言つて……

呆れ顔の純夏がこぢらに近づいて歩足を出した。

「…………あれ？」

けど急に膝が曲がり、くぐると、その場で女の子座りしてしまつ。

「ん、純夏…… オイ、純夏？」

「あ…… れ？ …… 可笑しいな…… 上手く、たて、ない、や……」

「……」

俺は純夏の様子が変わつてゐる事に気がつく。まず顔の頬が赤く、呼吸が少し荒い、極めつけは目の焦点がぼやけている事だ。

俺は純夏の強化装備をチェックする。

38 - 6 、他は割かし正常、専門的な知識が無いのでなんとも言えないが、恐らく疲労から来る風邪だ。

「純夏、お前…… けつこう熱あるぞ」

「あれ、れ…… そつなの？」

「待つてろ直ぐに部屋を暖めるから………… ついあえず休んでる」

「…………うん」

やつぱり純夏が床に寝ようとする。

「………… オイ、こいつ」

「え…… ？ …… あ」

床に寝よつとした純夏の腕を引っ張り、

「床に頭付けるよつはましだろ?」

「……うん」

俺の膝を純夏に貸す事にした。

(……………体調が崩れるのも…………無理も無いか)

一般人が戦術機に乗りハイヴから脱出。  
いつたいどれくらいのストレスと疲労が掛かるのだろうか?

そう考えながら囲炉裏に枝を燃えやすい様に並べ、備え付けのマッチを擦り、付いた火を小枝に移し火種を手ごろな大きさにしてから囲炉裏の中の薪に突っ込む。

「…………」

「…………」

少し、どこか重たい空気が流れる。囲炉裏の火はしだいに大きくなり小屋の中に光が広がる。

…………真剣な話をするのには良い空気かもしない。さつきの、薪拾いの時の考え方ついでにずっと気になつた事を聞こいづ。

「…………純夏、お前さ…………」

風邪で少し弱気になつてた方が聞きやすいんじやないかと打診的に

考えつつも、

「…………どうしたの……タケルちやん？」

「……この状況でもなあや、あつとい」の質問は答えないよなーと納得して、聞いてみる。

「…………お前何時まで引きずっとんだ?」

「…………な、何の事かな…………あ、気にしちゃなんじやないかな」

また、愛想笑いをする。

また、だ。

ずっと、ずっと愛想笑い。なにかを誤魔化すよつこ。

「別に気にしちゃんじゃないだら、だつてお前…………」

「な、なにや…………」

「…………いやんと、ちやんと笑つてないだろ?」

「…………」

そう、そつなんどよ、まだ一度も俺は、俺はこいつの大好きな表情を見ていない。（他の顔が嫌いなんて事はけつしつて無い）

ハイヴから出てからずっと何かを思い出したかのように表情に影がちらついていた。見逃すわけが無い。

理由は知っている、ここには後悔しているまだ、後悔している。俺を呼んだ事を。

「………… タケルちゃんは…… 優しいから……」

「アホか、なんで自分が助けて欲しい時に助けを求める事が間違いなんだよ。」

「じゃあ、じゃあ、聞くけどー。」

純夏が上半身を起こし俺の方を真っ直ぐ見つめている。  
こいつの準備は出来ている。

だからありつたつけの不安をぶつけて欲しい。後悔もぶつけて欲しい。何時も、何時もこいつの不安に気づいてやれなかつたから。

だから、だから、

「なんで、なんで平氣でいられるの？………… 私がしちゃつた事………… 霊ちゃんと全部教えてもらつたんだしょ？」

その不安を全部消してやる。なんてつたつてこいつちは永い間彷徨つて、消えかけるその度に思い出すのだ。

「タケルちゃん」 そう言ひて幸せそうにする少女を、それを見て面倒くさい顔をしつつも笑っている少年を。

この記憶が何度も、何万回も、何億回も、何兆回も、白銀武を留まらせてくれた。

俺は  
鑑純夏の「タケルちゃん」なんだ。

「……」  
「いいで、深呼吸一つ。

「ああ、知ってる。お前がした事、しちやつた事、全部全部、霞から聞いた……お前が桜花作戦の時、死ぬつもりだつたのも」

「だつたら……尚更だよ……ビリして？」

「そんなの決まってるだろ。……お前は……」

桜花作戦直前のシユミコレータールームの時は既に全部知つてしまつた筈だ、自分の無意識の嫉妬で世界を狂わせた事を。自分が大好きな人の人生を無茶苦茶にしてしまつた事を。

それはどんな気持ちなのだろう？

普通に、極々普通に生きていて、ある日突然侵略者達に囚われて、目の前で自分が世界で一番大切な人が食い殺されて、実験動物の様に心と体を壊されて、数年間薄暗い所で一人だけ脳髄状態で生かされて、なにも知らないまま一度殺されて、〇〇ユニットと言う兵器になつて蘇らされでお前は人類を救う道具だと言われて、やつとの事で自分を取り戻せて、大好きな人がやつと自分をきちんと見てくれて、その直後に自分が無意識でした事が世界と大好きな人の運命を狂わせてしまつて、全てを背負わされて死を覚悟して、最後に別れを惜しんでまた目覚めたと思つたら目の前でまた食い殺されて、そしてまた、大好きな人を巻き込むのはいつたいどんな気持ちだろう？

確かに『では、無意識で何をやつてもいいのか?』

と言つ意見は正しい、虫睡が走る位に正論だ。

でもさ、人間が嫉妬も、恨み事を無しに一生を終える事は絶対に無いだろ!?

女だ……偶に、少しアレだが。

純夏は普通の女の子だ、どこにでも居る普通の少女だ……偶に、少しアレだが。

そんな子が自分が無意識でやつた事を唐突に知られ、自分のトラウマと闘いながら人類を救つたんだぞ?

もう、十分だろ? そもそもこいつの無

意識の願望が叶う切つ掛けになつたのはBETAだろ!?

それにそもそも……。

お前は俺の、…………白銀武のモノだからだよ

「……へ?」

あ、固まつた。えーと……。

といつあえず上半身を起こしているこいつを正面から抱き抱える。二回田の世界の時と比べると感触が少し小さい。だがこれも好い。

「…………無茶苦茶だよ…………」

純夏は暫くして漸く反論を口にする。

「無茶なもんか、お前は俺のモノだ。だからお前がしつこった事を、責める権利も、責めない権利も、俺だけのモノだ」

「…………馬鹿…………ここなの？」

何がとは聞く必要は無い。

「いいよ、いいに決まってる……だから、安心して少し眠つてろ」

「…………うん…………ねえ…………タケルちゃん…………」

「なん…………ん」

純夏が顔をじりじりと向け俺が目を瞑わせる、その時。

この世界で初めてのキスを交わした。

回想終わり。

(…………あのまま寝るのはちと、生殺しなんじやないか?)

昨日の事を思い出し寝ている顔を見る。

「ふみゅ～～ タケルちゃん」

さつきから変わらず同じ事を繰り返しながら安心したどこか幼い寝顔。…………あ、そうか、俺も純夏もこの世界ではまだ15歳なんか。

(……ハツ！ 気づいてしまった！？)

15歳＝中 学三年生、 という事実に。

15歳の純夏のキス…………なんだろ………… ムラムラしてきた。

誤魔化すようにアホ毛弄りを再開する。

「ん、…………あ…………」

くすぐつたいのか悶える様な声を上げる純夏、けつこロロロイ。

(～～～つー堪えろ、 堪えるんだMy son! )

獣は悶え続けた。この世界で始めての再会をするまで。

## 初めまして＝久しぶり（前書き）

テスト勉強中に現実逃避しながらやつてたら一話分出来てしまいました・・・。

「めんなさい！（なんか謝つてばっかりだな・・・自分・・・）ちゃんと勉強しますので！」

ゞれくれに純夏誕生日おめでとつ！

何時見てもやつぱり可愛いな・・・純夏は（変態）

あ、今回の最後に一言、「PVが一万超えました！初めての事なので大変嬉しいです読んでる皆さんありがとうございます！」

7月20日改訂しました。

7月26日誤字修正しました。読んでくれている方に頼るようで申し訳ないのですが、誤字がありましたら感想にお願いします。

7月29日チョッピリ改定しました。

## 初めてまして=久しぶり

むかし、むかし、ある所に、300番のウサギがいました、ウサギには300匹程の兄弟が居ました。

ウサギ達はある目的のため、ニンゲンと言つ神様を作られました。

ウサギ達の目的は神様達の怨敵、B E T A と言つ悪魔と話して仲良くなる事でした。

悪魔と話すため、ウサギ達は色々な事を勉強したり、練習したり、タマニコワライジッケンサレタリシマシタ。

けれど、300番のウサギは良い子だったので恐い実験はされませんでした。

ウサギノキョウウダイガイツピキヘリマシタ、ツギハニヒキヘリマシタ、でもまだ兄弟はたくさん居ます。

ウサギ達はウサギなので二ングンでは無いので神様は氣にしません。毎日毎日、勉強したり、練習したり、タマニコワイジッケン、勉強したり、練習したり、タマニコワライジッケン、勉強したり、練習したり、タマニコワライジッケンの繰り返しでした。

ウサギノキョウウダイガサンビキキヘリマシタ、ツギハニヒキヘリマシタ、でもまだ兄弟は居ます。

漸く悪魔と話す事になります。神様がそう言

いました。

悪魔の所へは神様達の作った強い強い鉄の巨人が届けてくれるようです、だから安心大丈夫。

300番目のウサギの兄弟達が鉄の巨人に乗つて悪魔のお城へ出発です。

ウサギの兄弟たちは一生懸命『仲良くしようとしました』。

赤い悪魔が話を聞かずに沢山寄ってきて鉄の巨人が一人倒れ食べられました。

まだ諦めません、頑張ります。

サソリ見たいな触角が巨人のお腹を貫きました。

まだ諦めません、神様の為に頑張ります。

硬い甲羅が迫ってきます。

諦めません。だつてそうするのが

ウ

サギ達の生まれた意味だから。

そんな、昔の古い古い記憶を弄つた夢を見た。

(………… 悪夢みて醒了のかな………… ハハ)

のやうと自分のベッドから立ち上がり重たい目を擦る。  
まだ眠い。

(ウー………… うわわん………… あれ)

一度寝を試みようとして自分の大切なものが無いのに気がつく。

(………… うわわんが………… 消えました………… !)

うわわん ある人の為こと自分で作った可愛い? 大きいウ  
サギのぬいぐるみの事だ。

本来はその人にあげる予定だったのだが……ある事情で渡すのをや  
めた、それに今はもういない人なので結局自分の抱き枕になつてい  
る。

(ウー………… どこに行つたんですか………… うわわん………… )

そうして少女は今の自分の異変の気づかないまま  
基地内を寝惚けたまま歩き出す。

## 87式自走整備支援担架車内

今、俺の目の前には狭いトレーラーのフロントガラスにあるワイパーが上下に遅すぎず早すぎずの適度な速度で雨を拭取る姿と、代わり映えの無い山の車道が延々と進む光景だけが広がっている。

まあ、BETAの制圧地域だから人がいるわけ無いんだけどな。

(……それにしても……)

氣まずい。

そう、例えるなら典型的な厳しい顧問の先生がいる武道系部活の強化合宿へ行く際、移動手段のバスの中で自分の隣の席に座っているのがその厳しい顧問の先生位には氣まずい。因みに極めつけは合席になつた瞬間に後ろの先輩が、「うわ、可哀想」と自分にピンポイントに聞こえる様に言う事だ。

ここは無駄とも知りつつも厳しい顧問  
伊隅大尉に話しかけるべきだらう。

「あの……伊隅大尉？」

「悪いが今貴様の質問に答える事は出来ない」

即答ですか。

「…………… そうですか」

なまじ、一方的に知つてゐる分、無視されると堪えるものがある。

あーやつぱりアレか、ファースト「ンタクトがあんな事になつたから警戒されてるのか？

一応聞いてみる。

「…………… わつきの事…………… 根に持つてます?」

「……………」（俺）

「……………」（伊隅大尉）

「……………スー……………スー……………」（寝てる純夏）

（やばい、根に持つてる絶対に根に持つてる。）

不可抗力……………は言い訳だよなあ……………。

いや、気配消した状況で小屋の前に立たれたから……………仕掛けで来ると思つちやつて……偶々その時持つてた火搔き棒で対応しちゃつて。

伊隅大尉じやなかつたらあのまま『田』を潰してたよ  
な……………。

我ながら随分と無茶をした、相手が複数だつたりしたら返り討ちに会つてしまつ。

(……つて違うだろ？よ、俺。なんか血の気が多くなったな……永い間、化物になつてたからか？)

あの後話し合いで持つていいくのが大変で、この世界で始めての土下座を使つ羽田に明らかに俺のせいだけど。

「…………スー…………スー…………んみゅ…………タケルちゃん…………」

こゝで急に、後方で横になつている俺のお姫様もとい純夏からの7回目のタケルちゃん発言。伊隅大尉と一緒に寝終えた後、寝たまま車の中へ運んだ。

やはり、疲労が溜まつてじるりじく熟睡している。

(とこゝか純夏よ、どつこゝ夢を見てるんだ？つーかズルイ、俺も寝たい。別に眠くないけど、状況的に。)

「…………タケルちゃんとは貴様の事か？」

(あ、アクション起こしてくれた、此処は返さなこと。)

「…………ええ、そうですよ、あいつ…………純夏は小さい頃から俺の事ずっとそりやつて呼ぶんです

そう言つて後ろの眠り姫を見る、幸せそりに「んへへへ」いや、本気でどんな夢を見てるんだ？

「小さい頃？…………もしかして、幼馴染なのか？」

(おお、この話題にその反応！　この世界でもその事について悩んでいるのですね伊隅大尉。)

「はい、幼馴染兼、恋人です」

(さあ食い付くがいい！　そして一気にフレンドリーになりましょうーー？)

「フ、そつか……博士の言つ通りか」

(ぬあ、反応薄い……ん？…………博士？…………やつぱり伊隅大尉を寄越したのは…………。)

「あの、博士つて誰の……」

「その質問には答えられない」

(…………何だか読めてきたな、でもどうして夕呼先生が？)

結局、せつかくの再会はこれと言つた感動も無いまま終わって。

田下の心配事は四つ、純夏の体調とこの担架に積んだ武御雷の事、それと先程伊隅大尉に渡した第四計画諸々の資料、

そして、

(夕呼先生…………信用……つて言つか『味方』になつてくれるか

な？）

必ず起きるであろう夕呼先生との再会だった。

仙台第一帝都

「……それじゃ予定通りに頼むわよ」

自身の研究室で魔女 香月夕呼は見た目はパッと見、普通のサラリーマン。鎧衣 左近に今後の計画の最終確認をする。

「ええ、了解ですよ。任せていただきたい、貴女ほどの女性の頼みを実行出来ない様では男が廢ってしまいますからね」

そう言つてサラリーマン 鎧衣 左近は不敵に笑う。

「はいはい、お世辞は良いから確実にお願いね…………今月中にはそっちに行くから

このサラリーマン一見、飄々としていて変人みたい（というか変人だと思いたい）だが気付かぬうちにこちらの弱いところに潜り込

現に何人の人間がこの男の策略に嵌つたかわかつたものではない。む危険さがこの男にある。

「…………では、失敬」

そして、左近は足音も立てずに部屋を去っていく。別に今回は普通に来たのだからパソコンする必要は無い筈だが……。

(あー、後は…………そろそろかしらね?)

「あの、博士……」

左近が出て行つた入り口から入れ違いに小さい人影が入つてくる。

その少女はどこか儻げな雰囲気を身に纏つている…………はずだつた。

「…………霞、あんたなんて格好してんのよ…………」

「？」

霞と呼ばれた少女の格好は簡単に言うと…………薄い黒いランジェリー一枚と言う紳士の人たちが大変な我慢を必要とする格好だつた。

現にこの基地内で何人の紳士がこの子の今の姿を確認して悶えたのだろうか?

この子が無事にここまで來た事を考へると流石、侍の国。日本の男達は『ロリコンなら幼女を守れ』の精神を持っているらしい。

まあ、変態なのに変わりないが。

(「やう言えぱ」)のナ……寝起き悪いのよね……記憶の方は大丈夫かしら? )

そして取り合えず夕呼がそれとなく探りを入れようと口を開く時に霞が小さく口を開いた。

「…………博士…………ウササンビ」ですか?」

(…………ハア、確定ね…………迷わずここにこの場所に来れたつてことは記憶が統合した可能性もあるわね…………)

魔女は取り合えず寝惚けたウサギさんに事情を説明する事にした。

数時間後

「着いたぞ」

伊隅大尉がそう言ってシートベルトを外し車内のドアに手を掛け、

慣れた手つきで開ける。

「どうやうじ俺と純夏に対する警戒は結構薄いよつで先に外へ出てしまつ。

（…………いつたい俺達の事どう説明したんだ……夕呼先生は…………）

取り敢えずいい加減、純夏に起きてもらつ。つか、こいつ本氣です  
つと寝てやがつた……本当に疲れ溜めてたんだな。

（どれ、起こすついでにバイタルチェックでもするか…………36  
8。こりゃあ一安心……かな？）

…………なんだろ、純夏に対してどんどん過保護になつてゐ自分がいる  
…………今までの分の反動か？

「おーい着いたぞ、起きるー」

女の子特有の柔らかい頬をペチペチと軽く叩く。

「あう…………わう…………」

結構熟睡のよつで。……少し強くなる。

ひしひし。

「わわわわ…………むしゃ」

…………悪いな純夏、何時もこんな面倒お前にかけてたんだな…………

必殺！

俺は久しぶりにビーチルスリッパを取り出したりとしてやめた。

「しょうがねえな…………よいつしょつと」

寝たままの純夏を両手で前に抱える。  
いわゆる、お姉様抱っこだ。

「んー…………タケルちゃん……」

「はこはい、居ますよつと…………つか、お前やつぱり思つてゐよつ細いよな…………」

本当に今は普通の女の子なんだと意識してしまつ。

だから 簡単に壊れてしまふんじゃないかと不安になる。

（アホか…………俺が守れば良いだけじゃねか…………）

パツと頭に浮かんだ不安を振り払つ為に純夏を抱えたまま着いた基地を見渡す。

別に期待をしたわけじゃないけど基地はやっぱ基地だ、無骨に出た物々しいイメージはきっと世界共通だら。

そのままグランドの方へ視界を向けてみる。

思考が硬直した。

正直不意打ち過ぎると思ひ、居るのは予想してたけど、いきなり見つけてしまった。

「おい、まだか？」

伊隅大尉が何か催促しているが、俺の耳には入つても頭には入らない。

泣いてた、気づいたら自分の目から涙が細い線になつて流れてる。まだ体は泣く事を覚えてくれていたらしい。なんとも言えない気持ちが胸に溢れる。

この気持ちは、後悔、喜び、不安、希望。まったくベクトルが違う感情が自分の心中で激しく渦巻く。

（……可笑しいな、伊隅大尉の時は平氣だつたじゃねえか……  
なんで……）

「……タケルちゃん」

俺が泣いてる時に純夏が目を覚ます。どうやら起こしてしまったらしい。

彼女は何かを見透かした様に

「……行つておいで、待つてるから

丸で母親が子供に告げるよつこいひ。

正直言つてありがとうございました。

「直ぐ戻る」

「うん」

俺は純夏をその場に降ろすと同時に走り出した。

「あ、おい貴様！」

「大丈夫ですよ。えっと……伊隅大尉」

「……なにを根拠に」

「だつて、タケルちゃんですし」

「…………根拠になつてないぞ」

「あれ、そうですか？」

グラウンドで見つけた人達の方へ走り続ける。

体力は有り余つてゐる筈なのに呼吸はどこか必死だ。

でも、そんな事は別に問題じやない。

(勢いつけて走つたのはいいけど、どうしよう)

なんと声をかけようか?

『久しぶりです』いや、向こうは俺の事をしらんだろ。

『今帰りました』だから向こうは解らないだろ。

『俺はあなた達を知っています』ストーカー発言だろ  
それは。

そんな感じで自分の意見を却下しつつ走る、それに連れて懐かしい  
人達にどんどん自分の体が近づく。

見える人影は三つ 髪が短い遙中尉、背が少し縮んだ水月中  
尉、後一人は後ろを向いているがきっと 神宮司教官  
まりもちゃんだ。

遙中尉と水月中尉は正面を向いてるので、走つてくる俺の姿に氣  
づき田を丸くする。

二人の異変に気づいたまりもちゃんがこちらを振り返り一人と同様  
に田を丸くする。

「ん……貴官は…………いや、貴様は誰だ……それに、その強化装  
備は…………」

俺の見た目が15歳位の少年だと気づいたらしく、様子を探る様に声をかけてくる。警戒されている理由はまだ正式に配備されてない99式強化装備を、15歳程度の少年が身に着けている事だろうか？

でもそれは今、どうでもいい。

（あああ、どうしよう…。純夏の時は直ぐに返せたのに…えつと、えつと…。）

数十秒悩んだ末、俺が出せた言葉は……。

「初め……まして……」

「「「……え？」」」

我が事ながら、自分の言った事に呆れた。

（精一杯がこれかよ……）

ある意味当然の発言に三人とも固まる。

「あの、俺……『武さん…』『は…？』

俺が弁明を計らうとした時、鳩尾から下の腹部にかけて鈍い衝撃が響く。

田を下腹部に向けると見慣れた銀髪のツインテールの頭が一つ。

懐かしい人物がもう一人。

(やつか…… タ呼先生がもしそうなら霊も可能性があるよな…  
…)

取り敢えず「ひちには言つても問題ないのでわざわざ言えなかつた  
事を。

「……ただいま、霞」

「……おかえりなさい、です」

霞は俺の下腹部に自分の顔を埋めたままくぐもつた声で返事を返し  
てくれた。

## 更新〃変更（前書き）

—・・・・言い訳をさせて下さい・・・。

テストの大半が節電対策の理由で日程変更して、今週は何故か余裕が出来てしましました・・。（汗）そして来週がどうらい事に・・・！BETAの増援並みの絶望が・・。くつそ、何時になつたら先週生まれた従兄妹の顔を見れるんだ！

—今日は説明回なので、結構ドキドキです。  
追記です ——— つて邪魔ですかね？

もし、ご意見がある方がいるなら感想にお願いします。

7月20日改訂しました。

7月26日誤字修正しました。

もし、誤字を見かけたら感想の方へお願ひします。  
チヨツピリ改定しました。

緊張している。

喉は渴き、手は汗ばみ、心臓の音が耳に響く。  
人生で一番の正念所じやないだろうか？

今、この場には怪物と魔女が一匹と一人いる。

純夏には今、霞が付いているから一安心  
くとも霞だけは俺と純夏の味方であつて欲しい。  
だと信じる。少な

「久しぶりね、……白銀武？」

「お久しぶりです……夕呼先生」

横浜ハイヴでB E T Aと戦つた時の方がまだ心に余裕があつたんじ  
やないだろうか？

碌な作戦が浮かばない。そもそも殺す事しか能が無い今の俺に交渉  
など出来るのだろうか？

「フーン、大分緊張してるのね…………前は急に押しかけて偉そう  
に人の研究成果にケチつけたのに」

「…………つつ

ヤバイ

読まれてる！

「……それともせつかく体張って助けた愛しの鑑が今、脳味噌だけにされるかもしない不安？」

「…………？」

とつさに殺意が体から溢れるのを理性で必死に抑える。

大丈夫だ、今のは俺を試すための偽りの情報……プラフだ。深呼吸を繰り返し理性のブレーキを強くする。

俺は靈を信じる。…………つい先程再会したばかりの彼女にそう約束したのだ。

「へー、引っかかるないのね？」

少し驚いた様に顔を歪める。

(完全に主導権は向こうつか……じづするへ)

「…………ふう」

「？」

急に夕呼先生がため息を付いた、正直、いや、かなり珍しい事だ。

「…………悪かったわね…………いきなり試して」

「は？」

今度は急に謝られた……夕呼先生にいったい何があったんだ？

「……取り合えず現状を説明して上げる。その為に危険を承知でき  
たんでしょう?」

「……お願いします」

そうするとタ呼先生は机の後ろにあるホワイトボードの用意を始め  
る。

「まあ私と霞の事は一先ず置いて置くとして、…………一つ確認す  
るわよ、あんたは鑑に呼ばれたのね?」

俺は頷きついでに一番の重要な事項を聞く。

「…………タ呼先生、今の俺つて因果導体なんですか?」

「わいね…………ぢかと書いつとわれつぱい』『なにか』ね

「『なにか』…………つてどういつひ「今から説明するから黙る」…………ハ  
イ」

「まず、説明する前に書つけど今回のマループじゃないわ、ぢか  
かと言つと移動ね……」

そつとホワイトボードに備え付けられている水性マジックペン  
を手に取りボードになにやら書き込みを始める。

授業を思い出すな。

「一回目……オルタネイティヴ4が成功をさせて消えたあんたをつと

……

ホワイトボードに『オルタケル』と書かれる。突っ込みは話が脱線しそうなので都合上無しにする。

「で、そのオルタケルが……虚数空間で、こいつ分裂したのよ」

オルタケルと書かれた名前の上に『白銀武群』と『アンタ』の二つが書かれる。

「それでと……」

白銀武群の横に矢印が二つ付き、『それぞれの元の世界』と『鑑が構築した世界』が新しく書かれる。

「……」で、白銀武群は元の世界へ、そして、その白銀武群の一部の情報、この世界関連の極一部情報が、鑑が構築した世界へと……んで、アンタなんだけど……」

心臓の音が加速する。破裂しそうだ……やつぱりなに言われるか、怖えな。

俺は唾を飲み込み喉を鳴らした。

夕呼先生は一度目を伏せた後カツと一気に開けて言い放つ。気分は被告人だ。

「……アンタはどの白銀武でもない……オルタケルの残した、余りモノよ」

俺の時が止まつた。

はい？

今なんて言いました？

「……きっと鑑の無意識のフィルタリングに引っかかつた部分の集まりなんですよ、今のアンタは」

俺のショックを余所に説明を進める夕呼先生、学者としてのスイッチが入ったのか、それとも単にこの人の気質か、はたまた両方か。

「んで、アンタが消えなかつたのは……消したくなかったんですね、アンタの事を」

そう言つて急に此方を見る　　そのままはどこか、からかつて見る様に見え、『やっぱり純夏に愛されているんだな』と自分の自惚れがばれた様な気がしてなんだか恥ずかしくなる。

「だから、今のアンタは簡単に言つと『元の世界』が無いのよ、だから簡単に鑑の呼びかけに応じられたのね、更に言つとアンタがそんなんだから、因果が流れるなんて事は無いわ、他の世界との繋がりが無いんだし」

なにやら喜ぶべきなのかそれとも自分が白銀武の残り物である事にショックを受けるべきか少し悩むけど、ここは素直に喜ぶことにする

　　残り物だったからあの時、純夏を救い出せたと考えよつ。  
「それじゃ次は鑑についてね」

そのまま説明を続行するようで、別に構いませんけど……。  
どうせ俺の発言、許可してくれないだろ？」。

夕呼先生の目の様子が変わった

嫌な予感だ。

「…………00ゴーリットの意識は他の平行世界の鑑純夏の集合体である事は既に知ってるわね？……自分で作ってなんだけど凄い『人形』よね……」

『人形』　その響きに俺の中に先程強くした理性のブレーク軋む。

落ち着け…………俺。

『撤回しろ香月夕呼！…………あいつを…………純夏を人形扱いするな！！』…………その言葉を出掛けた喉から殺意と一緒にゅっくりと腹へ落す。

「…………なにか言いたげね？」

黙つて説明を続けて欲しい。

「…………一々試すような真似しないで下さい。あいつの事に關してはあいつを守る事だけは…………絶対に妥協するつもりはありません…………」

自分にも言い聞かせる様に語氣を少し強くする。　　倫理的利

己主義 (ethical egoism)　　上等だ。

「…………こつちも不安があるのよ…………話を進めるわよ」

クッソ…………やつらの事といい、今の事といい、後で問い合わせしてやる

「一つ一つは微々たる力しかない唯の意識でも、無限にある平行世界で繋がるのならその力は理論上無限になる……嫉妬で他の世界からあなたを呼ぶほどね」

「一つ一つは微々たる力しかない唯の意識でも、無限にある平行世界で繋がるのならその力は理論上無限になる……いや、待て考えろ、何故彼女は此処で挑発を繰り返す？ メリットは？」

むしろ此処は形だけでも協力的にしたほうが俺と純夏を騙せて遣り易いはずだ。これでは丸でハツ当たりではないか。

待て、もしかしてハツ当たりなのか？ 何に対しても？

ありえそうな事は……例えば、俺と純夏はなんだかんだでこういう事態に慣れているけど、この人は？

いつも一人で闘い続けるこの人は？

他人に弱さを見せずに世界を救うため、『聖母』になるため自らの手を血で汚し続けるこの人は？

心が何かに納得した。

（あああ、そういう事か……ハツ当たりとか……夕呼先生らしいな。）

神富司教官をみならつて、この苦労人の聖母　　もと  
い恩師に付き合つことにする。

(弱みを見せたくないからとか……この人も結局は『普通の人間』なんだよな…………。)

(「……もつと素直になれよ…………　俺が言える」とではないな。  
思案を纏めた所で説明に再び耳を傾ける。

「……そんな鑑の意識の一部があんたと別れを告げたいと願つた、  
でもその時の鑑は既に死んでいる」

ちやんと記述してゐる……やつぱりわかつまでの発言は八つ当たりか  
…………。

「だから、鑑はお別れを言える世界まで無意識に移動しようとした、  
でもそこで一つ問題が起きた　　鑑が知つてゐるこの世界のあん  
たの最期が殺されるところしかないのよ、しかもその時の鑑自身は自  
分が定まつていらない脳髄状態　　だからこそ、B E T A がいる世界  
で鑑純夏が『人間』の状態で会える白銀武の最期　　1998  
年の横浜ハイヴに移動したのね」

長い説明を終えた夕呼先生は疲れたのか軽くため息をつく。

「…………我ながらけつこづ暴論ね…………」

(「……それは今更じゃありませんか?」)

「まあ鑑についてはこんな感じ、それじゃあたしと、霞の事だけど

……霞の方はあんたも心当たりあるんじゃない?』

心当たり? 俺が覚えているって事は桜花作戦が成功した世界の記憶だよな……。

霞との記憶を片つ端から思い返す。

『弱虫』『なんだ……。

『あーん…………ですか』みんなが怖かつたあの時。

『 私…………見でます。どんな世界でも必ずあなたの事を見てます…………。』あの時は嬉しかったな、少しだけ恥ずかしかったけど…………もしかしてこれが原因か?

「やつそれ」

「…………読まんで下さこよ……人の心を」

「だつてあんた、相変わらずわらはず解りやすい顔をするだもの、見てれば解るわ」

なんか…………悔しいな…………。

「相変わらず美少女たらしまくつよね、そんなんだといつか鑑に刺されるとわよ~」

「…………自重して見ます…………。」

んなこと言われても自分でどうとかできる問題じゃない気がする……

……つか、純夏が俺を刺すとか有り得ない……よな？

でも、要は自分の恋人の前で他の女性とベタベタしてはいけない、  
と言つ当たり前の事を守ればいいのだ。

うん、楽勝楽勝。

「あんたは無目覚でそれが出来てなかつたから今、ここの調子元にいじ  
やなかつた？」

「……人の揚げ足をとらんで下さい。つか、話が脱線しますよ」

後、このままだと俺の精神が持たない。

「それもそうね。……私と霞が他の世界の記憶を受け取つた直接の  
理由は……立ち会いすぎたのよ、あんたの世界移動に。そのおかげ  
であたしと霞の因果がアンタと言つ特異点に引き寄せられやすくな  
つた、そして霞の場合はあの子のアンタを『ずっと見ている』とい  
う気持ちが切つ掛け、それと霞は『前』の記憶しかないけど、私は  
前の世界のアンタに關つた香月夕呼の記憶が大分混じつてるからあ  
んたが持つてきた数式はあんまり必要ないわよ？ むしろ今のアン  
タは一度虚数空間に入つたら出てこれなくなる可能性が高いわ。  
…………最後に言うけど私が移動した切つ掛けは…… やっぱ  
りやめるわ、察しなさい」

そう言つてこちらから顔を背ける。俺に弱さを見せるのがよっぽど  
嫌らしい。

「……取り合えず今後の事は明日から詳しく述べるから今日は鑑  
と一緒に医務室で大人しくしてなさい」

これで話は終わりそう言わんばかりに椅子に深く座る。……俺も精神的に疲れたので純夏と霞が待っているであろう医務室に向けて退出する事にした。

扉に手を掛けたとき

「……白銀」

後ろから声を掛けらる。振り返ると椅子に座つたままの夕呼先生がこちらを真つ直ぐに見つめる。

「さつきの話で解ると思うけど今の私達4人は運命共同体よ。……正確に言うと鑑がアンタが消えると連鎖的に私と霞の記憶が消えるわ、だから私達、いえ、私をし『信じますよ、先生が言つたじゃないですか、俺と先生は共犯者だつて』…………そう、なら……いいわ。  
……引止めて悪かつたわね」

そのまま俺は部屋から出ると近くの壁に持たれかけた。

ふう 契約更新完了、かな？

とりあえず今する事は 。

「あ、ああ～～～緊張した～～～

先程までの緊張を解す事だ。

訓練が終わってそれは唐突に告げられた。

ハツキリ<sup>ハツキリ</sup>つ 理不<sup>ハズ</sup>だら。

「ぶ、部隊移動！？ 僕も慎一も正式に配属されて半年もしてないのにですか！？」

「……そうだ、香月博士の命令でな」

しかも俺達の部隊、直属の上司からかよ！？

「……一体何処に？」

横にいる慎一が口を開く。こいつも俺同様に驚きを隠せないようだ。  
唯一の救いは相棒<sup>ハレメシヤ</sup>こいつと一緒にすることか……。 木戸じゅ  
ないぞ。

「…………伊隅大尉が指揮している中隊、通称イスミヴァルキ  
リーズ。詳しくは伊隅大尉に聞けや」

イスミヴァルキリーズ

たしか、代々女性だけで構成されて

る部隊だつて？

「まあ、A - 01にいる事が変わるわけじゃねえし、縁があればまた会えるさ」

因みにこの人、いつもこんなんだけど実際は無茶苦茶強く他の人達からも結構信頼されている。

そして、今は既に元だが、俺と信一の『教育係』だつたりする。やつと、あの鬼の様な訓練が楽しくなってきたのに！

変態的な意味ではなく。

「んじゅ、頑張れや」

そんな隊長は何時もと変わらない何処かやる気のない感じで去つてしまつ。幾ら同じ隊の中とはいえ、部隊が変わるためにあつさりしきだろ？

「……なんで急に？」

去つていいく元隊長の背中を見送りながら慎一は俺に向かつて言ひ、「俺も知りたいわ。

「解んないけど……なるようになるしかないだろ？」

「……だな」

大丈夫かな…………俺達…………。遙、水月、不安だよ……。

困った事になつた、どうしよう?

「ううぐ……ふえ……縦夏さん……」

靈ちゃんがさつきから泣き止んでくれない。

なんでだろ、少しだけ『ジャビュ』を感じてしまつ。

「残されるのはもう……イヤ、です」

「靈ちゃん……」めんね

靈ちゃんの頭を優しく撫でる。今更だけど、私が知ってる靈ちゃん  
より大分幼く見える。

私がずっと一人だった時にこの子は私に色々話してくれた、もっと  
も当時の私は碌な返事をしてあげられなかつたけど。

そんな自分にとつて家族みたいな子に寂しい思いをさせてしまった、  
タケルちゃんとは別の罪悪感が沸いてしまつ。

「……大丈夫だよ、靈ちゃん。私もタケルちゃんも、あなたを置いてどこかへ行つたりしないから」

小さくて細い体を、お母さんが子供にしてあげる様に出来るだけ優しく包む。

此處で私の誓いを一つ。

とてもとも、自分勝手かもしれないけど、今度こそタケルちゃんや靈ちゃん、みんなで

笑つて終われる。

そんな素敵なハッピーハンドを皿指せり。

## 大切な事＝続ける事（前書き）

テストの山場を越えました！そして今回から文の形式を変えました！  
これで、問題が無いようだったら、今までのも改訂するつもりです。

そして、今回の内容は……もんたのストレス発散が入っています。  
それでは「ごめん」とお楽しみ下さい。

7月26日誤字修正しました。今後も誤字を見つけたらどうぞ感  
想へ。

本当に迷惑をかけて申し訳ありません。（特に慎一、本当に「ごめん  
ね……）

7月29日チョッピリ改定しました。

## 大切な事＝続ける事

「此処か……」

やつと見つけた。

当たり前だが、横浜基地内部と大分違うので少し迷った。

一応、今は軍の制服と夕呼先生から貰ったＩＤカードがあるのでこの基地内を自由に移動できるが、知らない場所なので結構ドキドキする。

……子供か俺は。15歳は……子供だな。

(まあいいや、さて、麗しの我が姫君と娘兼妹と感動の再会を…)

俺は先程までの交渉の疲れを吹き飛ばすように医務室の扉に手を掛けた。

「おーい、今帰つたぞ！」

意氣揚々とした俺の眼前に広がっていたのは。

「え……」

何故か上半身裸でブラを付け直している純夏。

「あ……」

その横には霞。

「まあ」

少し離れた所で、どこかで見たことがある、お下げで眼鏡のお姉さん。

これは……やつらがひつまつた。

俺は慌てて部屋から出ようとする。……結果はすでに見えてるけど、それでもやらなきゃこけない事つて、この世の中に確かににあるだろ？

「……純夏さん、これ、どういわ？」

霞が横で固まっている純夏になにか手渡す。アレは……は、灰皿。

そして俺の方へいつもと変わらない表情を向け、手を握り親指を立ててる。

「……グッ、です」

「何が！？ つーか、灰皿はヤバイヨ、つかなんでそんなものが医務室にあるのー？」

「私の先輩がタバコを吸うのでたまに使つてるんです

眼鏡の女性が少し気まずそりて答える。

「また心が読まれてる…?」

「…………口にしてたら誰でも聞こえるよ…………タケルちゃん」

「つづー。」

ヤバイヨ、やばいですよーの状況は……。純夏のやつ顔が笑ってるけど、田が、田が……。

「…………言つ事は?」

やつ言つ純夏の方に視線を向ける。

今純夏は入院患者用の淡いピンク色の衣服の上着の部分を両手に持ち自分の身体を隠そうとしているが、ぶっちゃつけ結構見える。

健康そうな程よい感じの白い肌は先程身に付けたばかりの薄い桜色の花柄のブラと、とても良く似合いかなり魅力的だ。

それをじっくり見ながらの俺の弁明は

「…………悪かった、ノックもせずに入った俺が悪い。以後気をつける……所でサイズは大丈夫か? ほらお前つて見かけによらず着痩せる『じっくりと人の胸を見てから感想を言つな!』『がー!』

灰皿 それは有能な武器である。

俺はそれをこの身を持つて知った。

「タケルちゃんの…………スケベ……」

「ふつ、純夏よ……男はみんな獸なんだぞ？ 特に好きな女性に……対しては、な」

朦朧とする意識の中、素直に今の気持ちを伝える。

「好きなって……他の人が居るとこで罵られると、流石に……恥ずかしいよ」

純夏は俺の発言に照れたのか、赤面した顔を隠すように俯かせる。

フフフ、やつぱりからかうと純夏は可愛いな……取り合えず、今之内に早く、着替えて、欲しい…………あぐ。

「あ……氣絶したみたいです」

頭部に鈍い痛みを覚えながら俺はそのまま意識を落した。

今日は神宮寺教官から変わったことを聞かされた。

「え、新しい訓練兵…………ですか？」

今、確か10月だよね？

「いんな時期にですか」

うん、水月も私と同じように驚く。

「いや、正確には少し違うが、明日から暫くの間、貴様らと一緒に訓練をする事になる。……今は医務室にいるらしいから、この訓練後、先輩らしく挨拶でもしておけ」

何か誤魔化す様に少し歯切れを悪くしながら神宮寺教官は話を切り上げる。…………もしかして教官もまだ詳しく知らないのかも。

「「了解です」」

そつかー、新しい子が来るのかー。水月と一人だけで寂しかったし楽しみだな。後で水月と一緒に二つと。

「よし、それじゃ何時も通りに最初は水月が遙を背負ってトラックを走るぞ」

「はーい、ほら、遙」

「うん、こつもありがとね水月」

水月が私の方に背を向けしゃがんでくれる。

私の足はある事故が理由で駄目になってしまい、今は擬態を使っている。

そして、それが理由で衛士の道が完全に絶たれてしまった。

本来は衛士の代わりの道として選んだCPの勉強に集中するべきな

のだろうけど、正式に任官するまでは水月と一緒に衛士の訓練をしていたかった。

「うして訓練に形だけでも参加しているのは私が神宮寺教官にお願いしたからだ。」

せめて訓練兵の間だけでも、と……。

「ねえー、遙」

そんな少し落ち込んでしまった私を余所に水月は私を背負つて走りながら速度を緩めず、声をかける。

「何ー水月？ っというか……走りながら喋つて大丈夫？」

「へーき、平氣ー！」ちと体力には自信あるのよー。」

水月の身体能力は友人という身内顛真無しでも通常の女子いや、男子よりも上だ。

私は水月のこいつ所を凄いと思っているのだが本人にその事を告げると何故か落ち込んでしまう。 不思議だ。

「明日から来るつて子もしかして例のアレじゃない？」

「例のつて……もしかして、私達の所に来て泣きながら何か言おつとして小さい子にタックルされて倒れた後立ち上がってそのまま抱き返した男の子？」

何でだろ？ 最後の件が自分で言つた事なのに妙に引っかかった。

「もういい、それよ、それ」

「んーと、どうだろ? してたし……」何だか見た感じあの男の子、衛士の格好

あの装備も正規のじやなかつたし…………もしかして特殊任務とか？

## 私の予想としては

「水月はあの男の子の後ろに正規兵の人と私達位の、訓練兵用の強化装備着た、女の子居たの……気づいてた？」

「へ……、居たの？」

「居たよー水月は気づかなかつたの？」

「あんたこそ、あの状況で良く氣づいたわね」

「え、そうかな？」

なんとなーく後ろが気になつて見て見たら、女の子が優しい顔で男の子を見守つてたんだよね。もしかして、恋人かも……。

「まあ、会つてからのお楽しみでしょ。よーしスピード上げるわよ

「着いたな……」

「あああ、着いたな……」

目の前の扉の存在感が半端ではない。

さつそく前の部隊が恋しくなる。

「……お前が開けろよ」

「いや、お間に譲る」

「…………」

「…………」

クソ、やるしかないのか。

俺と慎一は互いに視線を交わすその刹那

「「最初はグー！」「パー！」な、孝之！汚いぞ……」

「悪いな慎一……」んな時代だ、人を騙すのも仕方ないだろ？

例え親友を欺いてでも俺は、俺は……！

「いや、せいいだけだよ、お前」

…………ふぞろひる時に冷静に返されたと、キツイ。

「あー、もういいわ、俺が開ける」

「あ、おい」

お願い慎一！ 私を置いて行かないで！？

虚しいな。

そのままノックをしながら扉を開けてしまつ慎一。何故か最近、こいつに上手くあしらわれている。

入ったブリーフィングルームには『仕事が出来る女性』をそのままにした様な美人さんがいた。

……この人が俺達の新しい隊長……！

「遅かつたな。まあいい、…………ようこそ、イスミニアルキリーズへ」

こうして、俺と慎一の新しい生活が始まった。この変化が俺達にとってどうか、良い転機になりますように。

温かくて、柔らかい、それに何だか良い匂いがする。

どこか懐かしい気持ちになる。なんというか、いつ……記憶と言つより体が、覚えている感じの…………。

誰かに優しく包まれているとこう安心感。こんな世界ではもう味わ

えないと思っていたのに……。

違う。あつたけど、一度無くしてしまったんだ。

だから、諦められなくて　だから、取り戻したくて。

もう無くしたくない一心で、包んでくれているものを抱き返す。

包んでくれたものは、驚いてしまったのか感触が少し硬くなる。

それは困ると俺はそれを解そうと手を捏ね回そうとして

「……………」

包んでくれている者が何か必死に叫んでる。　起きなくては、もう無くさない為に。

俺はまどろみの中から意識を飛び起こした。

「どうした純夏…？　って…………なんだ、この状況？」

意識を覚醒させた俺は自分の状況を確認する。…………どうやら俺は医務室の丸椅子に座りながら純夏の膝を枕にして寝ていたらしい。

証拠に俺の両手は純夏の柔らかい太ももを必死で掴んでいた…………さくせに少し撫でる。

「……………」

いい反応で純夏が答えてくれる。

あれ？ 何故だか後から視線を感じる。

「うわ、わわわ……ビ、ビツシヨウ、水月？ もしかして、私たち  
邪魔かも…………！」

「まさか、人目も憚らないとはね…………鑑に聞いた話以上じゃな  
いの…………」

俺の背後から一人の女性の声がする。…………何故か冷や汗が体から一  
気に噴出す。

「…………だから、他の人が見てるから止めてって言つたのに…………」

俺の目の前のベッド休んでいた純夏が恨めしげに俺を見つめる。

えええと、こいつは…………。

「久…………じゃなかつた、始めてまし

「…………無かつた事にしようと…………」

「むしろ開き直つてない？」

チツ、流せなかつたか。

でも、ちよび良いかも知れない。

幾らか、イレギュラーな自己紹介になつてしまつたが今度こそそちや  
んと挨拶をしよう。

それに……今なら気持ちが落ち着いてるし、な。

「改めまして、白銀武です。前回は迷惑をかけて申し訳ありませんでした」

「…………前回？ 今さつまじやなくて？」

「ぐつ……さすが、遙中尉。的確かつ、容赦のない発言だぜ。」

「鑑……私が書つのもあれだけど、いつこつ男は苦労するわよ?」

「酷いです、水月中尉。というか一人とも何時の間に純夏と知り合つたんだ？」

疑問を抱いている俺を余所にに会話を続ける女性陣。女三人寄ればなんとやら、とこう状況だ。

「えへへへ、でも結構良い所もあるんですよ?」

いきいきと返事をする純夏……会話の空気が少し盛しきくなつてきただ。

「へー、例えば?」

あー水月中尉が食いつこちやつたよ、…………今之内に部屋から出ますか。

そーっとね、そーっと、抜け足、差し足、忍び「逃げちゃ駄目です」  
……服を掴まる。

「…………居たんですか、靈さん」

「…………いました、武さんが、純夏さんと喋っていた最中に『おー、純夏。少しの間、膝貸せ』って言つて、急に純夏さんに膝枕させて寝ちゃつてから、遙さんと水月さんの一人が新しい子の顔を見に来た一つて言つて、挨拶しに来てくれて暫くみんなで談笑してたら、武さんがあんまり寝ながら純夏さんの膝を弄りだして、純夏さんが思わず悲鳴紛いの声を上げて、それを聞いた武さんが飛び起きてから現在に至るまで居ました」

「まじスイマセンでした!! それと説明ありがとうございます! おかげで寝惚けてた頭がスッキリしました!」

「…………なら、良いです」

ほつ、思つたより怒つてなかつたみたいだ。と言つか靈、お前つて滅茶苦茶喋れるんじゃねえか!?

ビックリしたわ!

「…………フルフル」

「口で言つな、口で」

思わず小さく頭を掴み左右に振る。

「あが～～……です」

「あ～！ タケルちゃんが靈ちゃんを苛めてるーー?」

ヤバイ、変な所で見られた！？

「白銀え～幼児虐待は死刑よ、死刑」

「…………酷い白銀君」

「なつ、こ、これは…………」

気づいたら四面楚歌になつてゐる。霞、君だけが頼りだ！俺は霞に精一杯の助けてコールを送る。

俺の視線に気づいて何かを考える霞。きっと弁明を考えてくれているに違いない。

「…………つわ～ん。純夏さ～ん…………です」

……いや、無理ないか、それは。

「タケルちゃん！」

うわあ、効果あつたよ……。

畜生、霞の奴ノリが良くなつてやがる！？ 誰のせいだ！ 誰の！？

…………俺のせいですよ！チクショー！――

…………楽しい。

素直にそう思えた。

霞も

水月中尉も

遙中尉も

そして、純夏も

だから、さつと俺も

この場に居るみんながきつと笑っている。

それが堪らなく、笑い泣きしたくなるくらい嬉しかった。

そんな風に、久しぶりに思いつきり笑えた日の夜。私はタケルちゃんに我が仮を言った。

だって、暗かつたから。暗い所で一人で寝ようとすると『思い出してしまつ』から。

今日が楽しかった分だけ夜の闇が私を責めている様に感じてしまつたから。

本当に責めているのは私自身なのに。

「……無理するなよ」

タケルちゃんが、私の気持ちを振り払う様に私を優しく抱きしめてくれる、タケルちゃんこういふじてもうひさえると凄く安心する。なんだか子供に戻ったみたい。

「…………めんね、我が姫言ひかけやつて」

タケルちゃんの胸に顔を埋め、呟く。

「だから、良いくて。君は俺の方がお前に付き合わせたんだし」

タケルちゃんは私を覆つ様に頭に手を置いてくれる。……何故だか少し泣きたくなつた。

「うそ、そうだね。昔は私が付き合わされてた」

意地つ張りな私は誤魔化そつとタケルちゃんに話を合わせる。

きっとタケルちゃんの今の言葉自体に意味は無いんだと思つ。単に、私の気を紛らわそうとしてくれているんだ。

その優しさにまた、泣きたくなる。

「……今日は楽しかったな

「うそ、凄い楽しかった

頑張ろ、今日みたいな日がこの世界で当たり前になるよ！」

「続けような、ずっと、ずっと

「うそ、凄い楽しかった

「うん、一緒に頑張るわ」

努力しよう、あなたの隣にずっと居られるよ！」。

「だから、ずっと俺の隣に居てくれ、純夏」

「……うん、私とタケルちゃんは一人で一つだもん」

「ああ、そうだな。俺とお前は一人で一つだ」

うん、そつなんだ。自分で言つて確かなものにする。

私とタケルちゃんは一人で一つ。

私の半分はタケルちゃんで、タケルちゃんの半分は私。

これは幼い頃からずっと一緒に幼馴染、そんな私とタケルちゃんだけの方程式。

だから頑張ろう、だから諦めない、だから壊してやる、この世界を覆う絶望を。

ずっと、ずっと、大好きな貴方と一緒に幸せでいるために。

今日と言つ口を忘れないようにしよう、また、私とタケルちゃんの日記を書くために。

「の日はとても、気持ち良く眠れた。

大好きだよ、タケルちゃん。

## **初めて = 再認識（前書き）**

今回から後書きの方へ移動させてもらいます。

## 初めて＝再認識

人の習慣、特に口癖とかは本人が抜けたと思つても些細な事でまた出ちゃつたりする。それは本当の事だと俺は思つ。……例えば、明らかに管轄外の事をやれと言われた時とか。

「マジですか」

「マジ？」

白銀語が永い時を経てついにこの世界で通じた。……正直どうでもいい。

「あの、夕呼先生だけってのは……」

「アンタ、何を尻込みしてんのよ。前に一回会つたんでしょう？」

「前とは状況が違いますよ、それに現場に行つても俺が出来る事は無いとと思うんですよ」

やれやれと、横のソファに腰掛ける。俺に夕呼先生と一緒に将軍悠陽殿下の所まで付いて来いとは、夕呼先生も無理を言つ。

「別にアンタにそいつの方面をやれなんて言つてないわよ、ビビりかと言つと今回のは……そうね、脅迫みたいなもんね」

何かの設計図を手に持ちながら「ひらひら」と向いて説明をする夕呼先生。  
「……脅迫って……やうつと、とんでもない事を。

そもそも何を脅迫するつもりだよ。……あつた。

心当たりが出る、多分当たりだろ？。でも、夕呼先生には悪いけど、簡単に行く気がしない。

「……今日本に教えるんですか？ 未来のことを」

そりや、それを『信じてもらえば』俺達にひとつはかなり有利になるけど……。

「そうね……白銀、私達の事、信じてもらえると思う？」

そんなもの決まってる。

「俺と純夏と夕呼先生と霞、四人揃つてストレス性の精神疲労って言われて、病院送りじゃないですか？」

いきなり『未来の事を知っています』と言つて無条件で信じてもらえるほど世間は甘くない。せめて信用……までは行かなくてもそろかも位には思われる何かが必要だ。でも、その与えるべき物を間違えるとこちらに對して不利な事を勝手にやられてしまう可能性がある。聞こえが悪いが、飽くまでもこちらのコントロール内にいてもらわなきゃいけない。

俺の顔を見て夕呼先生が頷く。

「そうね。だから、無理に未来の情報だと教える必要は無いわ、形を変えて教えてやるのよ……私達がコントロールしやすいようにね。で……これ、見なさい」

俺に机の上に置いてある写真を見せる。 比較的に小さいハイヴとその上を黒い人影が飛んでいる。

「……うわ、バツチリ写ってる……情報は大丈夫なんですか？」

「米国の方は割と簡単だつたわよ。あつちは今、G弾の事でお熱だつたから知る前に揉み消せたわ。国連はオルタネイティヴ関連の私の権限でね、日本も同じよ……正直、今回のはかなりギリギリだつたけど」

思い出したのか少し疲れた顔をする。……夕呼先生に尻拭いして貢つちゃつたな。

少し罪悪感が胸を突く。俺、会つて行き成り夕呼先生の事を警戒しちゃつたのに……。 ハツ！？

策略に気付いた俺は夕呼先生の方を向く 満面の笑みの夕呼先生がいる。はつきり言つて恐い。

「……つといふ事で白銀、一緒に来てくれるわね？」

前より信頼関係が深まつた途端にこれですか。

「……了解、です」

この人はやつぱり 魔女だ。

露骨に面倒な顔をすると、夕呼先生が顔をしかめた。

「そんなに嫌な顔をされると、流石に少しむかつくわよ？」

「…………」ひとり、純夏と一緒に訓練兵やれると思つてたんですよ……

「……」

明確に口にして少し落ち込む。今日の朝に起きて早々、夕呼先生に呼ばれたてなんだと思つたらこれだもんな。

窓の方から外を見てみる。横浜基地の時は違つて今の夕呼先生の研究室は一階にある。もつとも、セキュリティレベルは基地内でもトップだけど、窓からはグランドの様子が良く見え、純夏達が走っているのを眺める事が出来る。……うん？ 数人知らない人がいる。他の同期の人だらうか？ ……あ、純夏がこけた。

あいつ……どちらかと言つと運動オノンチだしな、ホンッとしうがねえ奴だな……怪我してないよな？ 大丈夫だよな？ ……あ、立つた。

ほつ、一安心一安心。 また背中から視線が！？

振り向くと夕呼先生がまた、ニヤニヤと顔を歪めながらひつちを見てる。

「アンタ今までの反動で大分、鑑に対し過保護ね？」

「ぐつ……痛い所を突かんで下さい」

「別に良いと思うわよ？ 私の一部の記憶だと、鑑は数年前までアンタにそんざいに扱われた分、甘えたいと思ってるだらうじ？」

「ぐぐぐ……言い返せないのを解つてて言つてるな、これは……」

「昔の古傷は持ち出さないで下せ。一応、今は……違うんですから」

よべ、タイムマシンがあるなら過去の自分を殴りたいって言ひ奴がいるけど、今の俺の気分はまさにそれだ。意味のある事では無いんだけど感情と理性は違う物だ、ついついこうした事を考えたりしてしまひ。

「まつたく……自分の女に対しても独占欲出るのは別に良いけど、あんまり束縛すると……鑑の場合はどうなのかしらね?」

「……」

途中で自分の話を自己否定する先生を余所に、聞いた事を元にして俺に束縛される純夏をイメージしてしまひ。束縛かあ……繩とか? 繩ひる……繩で……純夏を……。頭になにやらイケナイ妄想が膨らんで来た、……Hロイ。

直後に白い視線を浴びる。

「ホンシと考えを隠すの下手よねアンタ。あ、そういうのが忘れてたけど鑑とアンタは同じ部屋にしておいたから。隣の部屋も少ないし」

「……このタイミングで言こますか?」

「別に一度してるんだから良いじゃない。って……もしかして」

「……えええ、お察しの通り『Hロイ』では……まだです」

何を報告してんだ俺はー? あーでも昨日の夜の時はアイツ

何だか、何かに怯えてたみたいだしそういう事を出来る雰囲気じゃなかつたんだよ！　断じてへタレた訳じゃない、寧ろ理性を総動員して純夏に思考が漏れないよう必死だったわ！　なんというか……色々暖かくて、柔らか過ぎて！

「まあ、成るべくタイミングを読んで早めにしなさい、とだけ言っておくれ。……話を戻すけどあなたには訪問販売を頼みたいのよ」

「……何を売つてのこと？」

夕呼先生の言葉で思考を元に戻す。

「XM3」

「え、いきなり使つちゃうんですか？」

そりや、確かに早く普及すれば帝国軍の底上げになつて、今後が楽にはなるけど……。あれは夕呼先生にとつても政治面で使える力ードの籌だ。

「大丈夫よ、こつちは新しいの作つて今のXM3は帝国……近衛部隊にでも売りつけましょっ」

「……新しいのって簡単に出来るんですか？」

「今私の知識を舐めちや駄目よ？……でも、まだ、準備しなきゃいけない事あるから殿下の所に行くのはそつちの下拵えが済んでからね」

仕事の話が終わりそうな所で、一番重要な所である今回の目的を聞

いてない事を思い出し、聞くことにする。

「今回の事って、何が目的なんですか？」

「金と今後の「コネ」

……露骨だ。

「ほら、アンタはさつさとX-M3の説明を考えときなさい。あ、後で鑑と霞を呼んで来てちょうどいい。手伝つて欲しい事があるから」

「了解です」

半ば追い出されるように部屋を出る。夕呼先生の口から手伝つてか……。本人は気づいて使つたのどうかはこの際、別として……。年上の人には失礼だけど、少し微笑ましく感じた。……そろそろお昼だしPXへ行こう。

疲れた。体が熱くて汗でベトベト、シャワーが恋しい。言われた距離を何とかこなした私は髪が汚れるの気にせず　気に出来ず、グランドで仰向けになつてしまつ。いつかの記憶で、特訓と言つてタケルちゃんと一緒に朝早く起きて走つた日々を思い出し、空を見上げる。見上げる空は真っ青な海の様に綺麗で今の私とは丸で対照的。体が全身鉛になつた様に重く、肺が燃えてるような錯覚を感じて息をするのが苦しい、でもこの疲れ自体がどこか嬉しく感じる。私は人間なんだ。

「大丈夫かい？　えええっと、鑑ちゃん

私の視界が綺麗な青空から人の形をした影に覆われる。その影の人は穏やかな顔で私に手を伸ばす。汗は搔いてるけど、顔色はとても爽やかだ。

(「うう……これが正規兵の人と私との差かあ）

事前に霞ちゃんから私達が訓練に参加するのは体力作りみたいなものと説明を受けてなければ本気で凹んでしまってそう。因みにその霞ちゃんは今、遙さん達に木陰で介抱されてる。……無茶しすぎだよ霞ちゃん。

「ありがとうござります。えええと、慎一さん

慎一さんの手を掴む、すると慎一さんが引っ張る力で私は起こされる。やつぱり男の人は力持ちだ。

「どういたしまして。……それにしても、君つてまだ徴兵される年齢じゃないだろ？」

もつともな疑問を口にする。えと、どう答えよつか？

「えーと、実は私幼馴染の男の子と一緒に横浜から命からがら逃げてきたんです。でも、頼る当てがなくて、難民キャンプもイヤだなつて、それで此処の人に駄目元で置いて下さって、一人で言つたら……今の状況つて感じです」

ううう、誤魔化すのには少し苦しい言い訳になっちゃったよ……。

「……それ、本当かい？」

「めんなさー、本当はハイヴから逃げてきました。……言ふる訳ないけど。

「は、はー」

わつりうなつたり山に押しだ。

「……そつか……よく無事だったね……」

慎一さんの目が少し潤んでる。あ、そつか……慎一さん達も横浜出身なんだっけ。

「おーい、慎一。気持ちは解るけど、こんな所で泣くなよ。鑑ちゃん困ってるだろ?」

慎一さんの後ろから、男の人が声を掛けてくる。この人は……確かに孝之さん。全体的に線が細い体つきが印象的で、昨日聞いた話では遙さんと水月さん、一人にとつて意中の相手らしい。

「悪かつたな鑑ちゃん。取り敢えず昼飯でも行こう。まつもつやんん!……神宮司教官は今日はこれで上がりだしてや」

「あ、はい! 遙さん達も呼んで来ますね」

私は霞ちやん達の居る木陰へ向かって走る。本音を言つと疲れて頭が上手く回らないけど、兎に角今は一刻も早くシャワーを浴びよう。

だって、数時間振りにタケルちゃんに会えるんだから。

「お前……もう少し距離置けよな？」

「へ、悪い……」

変に近づかずして座られたら冗談も子もな。それにわし、遙と水月に再開早々

「へーー、孝之君って中学生位の子が好きなんだ？　じゃあ、これからは中学生属性の男性、略して変態だね？」

やめて！？　その全てを優しく包むような顔と声で罵倒しないで！　癖になつちやうから！

「孝之……」めんね、アンタの心の闇に気づいて上げられなくて……

「ひも、イヤー！　敬語はやめて！　お願ひだから何時もの水月で俺を殴つて！？」

つてな感じで誤解されたりじつはりよ。

「……大丈夫か孝之？」

「……ほー走つつかれてるせいでテンションが俺に妄想を…」

慎一に肩を揺れがられ正氣に戻る。

「いや、正気に戻りきっていないから。なんでテンションがお前に妄想見せるんだよ？」

冷静な慎一の突つ込みに俺の理性が徐々に息を吹き返す。

「……悪い、あいつらに久しぶりに会えたもんだから少し舞い上がつてた」

「だらうな、まあ俺も水月達に久しぶりに会えて嬉しかったから気持ちは解るよ」

流石はマブダチ、気持ちは同じか。今回は俺達の任務の都合で一人に再会出来たけど、実際なら正式に任官したら最後 って言うのも今の「」時勢では割と普通の事だ。だからどうしてもどこか刹那的になってしまふんだ。刹那主義は本来、あんまり良い事ではないんだけど……。

ちらりと遙達のいる木陰へ向かつて走る鑑ちゃんを見る。どこか、いきいきしているその様子からは俺の道化が馬鹿らしいものに感じる。

(……やつ言えば)

彼女のさつきの笑顔は遙の笑顔に何処か似たものを感じた。 そんな感じの、この世界ではかなり平和な午前だった。

PXで純夏達を探す。

この時間はやつぱり人が大勢居て探すのは少し骨が折れる。早く見つかると良いんだけど。

「タケルちゃん、見つけた！」

「うおー？」

急に背後からよく知った柔らかさと何時もより少し高めの体温が俺の背中にくっつく。それにシャワーを浴びてきたのか、石鹼の香りもある。ハツキリ言つて気持ちいい。

「……純夏、テンション高くないか？」

俺の背中に伸し掛かっている純夏に声をかける。元気なのはこいつの魅力の一つだが今回のはどこか違和感を感じる。いや、これも可愛いんだけど。

「えっとねー、生まれて初めての本格的な軍隊訓練に疲れてテンションがハイになってるんだよ！」

声が元気なのが、どこか大切なネジを外してしまった危うさを感じる。なるほど、これはアレだ、深夜の会議でよく起ころと言われる一種の疲労症状だ。しかも、頭のアホ毛が壊れたアンテナのようにクルクル回転してる……どうしよう？

「ん~、タケルちゃん」

子供の様に俺の背中に頬擦り始める。……いつそ持つて帰ろうか？

「カーガーミー、ビニ言つたのよー？」

少し離れた所から、恐らく純夏を探しているであつた水月中尉今は先輩を見つける。

「水月センパーイ！」

声を張り上げながら手を大きく振る、すると直ぐここに現れる。この人ごみの中でのあの速さ……やつぱり、流石だな。

「お、白銀じゃない！ 行き成りで悪いんだけど、鑑知らない？ あの子つたら、さつきまで疲れてへ口へ口になつてた筈なのに急に何かを見つけて飛び出しちゃって」

「純夏ならほり、一覧の通りです」

俺は水月先輩に背中 純夏を見せる。

「鑑……アンタ、何やつてんの？」

「んふふふ、タケルちゃんを見つけたので居ても立つても居られないかつたんです」

なんか凄い上機嫌だな……大丈夫か？

「…………ああ、やつ……」

流石の水月先輩もテンションがハイな純夏にたじろぐ。こには俺が仕切った方が良さそうだ。

「水月先輩、これからのお毎ご飯に俺も一緒に良いですか？」

「へ？ ああ、うん。OK、OK、元々そのつもりだったのよ、こ  
つちも。……ついでに鑑の事、頼んでもいい？」

「……迷惑かけてすいません」

「えへへ、ターケールーちゃん」

再び背中に頬擦りを再開される。

頼むから早く正氣に戻ってくれ純夏……。 あああ、でもこんな  
風に無邪気なのはその分、俺に対する素直な気持ちなわけで……。  
なにやら、嬉しいのと、困ったので、微妙に複雑な気分に……。

結局、純夏を背中に引き摺つたまま移動する事にした。

「あ、そう言えばさ、アンタに紹介したい一人がいんのよ

「はあ、紹介したい人ですか？」

グラウンドで見かけた人達だろ？

「私と遙の同期で、本当ならもう配属されてるんだけど、今はちょ  
つと特別な事情で戻ってきたのよ。って言つても午後には部隊の方  
に行つちゃうらしいけど」

特別な事情……間違ひなく夕呼先生の仕業だよな？ どんな人  
達か少し探りを入れてみるか。

「どういう人達なんですか？」

「そうね、一人は少し固い所が有るけど、結構お人好しね。もう一人は……」

何故か顔を見つめられる。……どうしたんだ?

「まあ、会つてからのお楽しみよ」

そいつ言つてさつと先に行つてしまつ。さつきの間は一体何なんだ?  
? ……水月先輩の言つとおり会えば解るか……。

さて、取り敢えずお昼ご飯に行く前に

「んふふふ、タケルちゃんの背中は暖かいねー」

テンションがハイになつたこいつをじうやつて正気に戻そつか  
……。

## 初めて＝再認識（後書き）

どうもです。まず初めにみなさんに誤字をそのまましていた事に対してお詫びを。

お見苦しくて申し訳ありませんでした。

正直に言いますと、感想で報告を貰った時にはSAN値が切れそうになりました、今は無性に岬に行きたいです……。

追記でも書きましたが、今後も誤字を見つけたら感想へどうぞ。因みに下からはもんたの後書きです。このSSとは関係無い事をグダグダ書いてますが、お暇の時にでも。 7月29日チヨツピリ改定しました。

では、氣を取り直して……んん、 ヒヤッホオオオオおおおおおお！

遂に、遂に、予約しちゃいましたよ！×box版マップラヴィンパックを！！

先日見たPVと純夏のフィギアが購入の決め手でした！

取り敢えず家に来たら、オルタを先にやつてエクストラ PCのサブリメントの順番でやろううと思います。（個人的にはこれが精神的に一番優しい順番です）

追加要素は……あつたら良いな。

ではここで恒例になつつある愚痴を

前に感想で書いた他の大学に居る冥夜スキーな友人から夜中の1時過ぎにメールで、

「課題が、課題の奴らが進めても進めても沸いて来るんだ俺を助けてくれ！」

つと、イヤ、メールする暇あつたりその課題をやひつよと返信した  
ら。

「……夜中一人は寂しい……」自分にどつしろと。

結局、深夜3時までメールに付き合わされました。

早寝の自分にはキツかつたです。まあ、友人の課題が終わつたので  
良いんですが。

アイツには今度アイス奢つてもらひ予定です。やつたね（ニヤリ）

最後に次回の軽い予告でも。

久しぶりの戦闘描写です。接近戦予定なのです。……激しく不安で  
す。

## 昔の事＝今の事

初めての訓練でテニショーンが少々ハイになつた純夏を背負つたまま食堂内の席に到着した。席には霞と遙先輩の一人が座つており、席を確保してくれている。あれ？ さつき水月先輩に話を聞いたかぎりあと、一人いる筈だけど……。

「おまたせーつて、あれ？ 孝之と慎一は？」

俺と同じ疑問を感じた水月先輩が遙先輩に聞く。遙先輩は独特のポツワとした空氣で微笑んで答える。

「あ、純夏ちゃん見つかったんだ？ あの一人には純夏ちゃんが食堂から出て行いかないように出入り口で見張つてもらつてるよ。今から呼んでくるね」

俺の背中にへばりつく純夏に気がつき立ち上がる。どうやら例の二人を迎えて行くらしい。…………純夏よお前は今、迷子の子供扱いされてるわ。

「やうなんだ。じゃあ私も一緒に孝之達を向かいにいくわ

遙先輩に続くように水月先輩も一人を向かいに行くらしい。俺はその人たちの顔をしらないし、ここで待たせてもらおつ……そして、その間に純夏を何とかしよう。

「純夏さん……大丈夫ですか？」

頭に何故かスポーツ等で使う小さい氷嚢を付けて冷やしている霞が、

案じる様に純夏を見る。……頭でもぶつけたのか？

「どうしたんだそれ？」

「……頑張り過ぎちゃいました」

……此処にも純夏と似たような娘が……取り敢えず。

「少しだけ借りるが。氷は……入ってるな」

霞から氷嚢を借り中の氷を取り出す。んで、それを

「ひょい」と

俺の背中に張り付いてる純夏の服の中に入れる。

「……ひゃ！ づ、ヅメたい！ 冷たい！？ なに！？ 何入れたの！？」

純夏が俺の背中から離れ暴れだす。あー、結構パーティクになつてないつ。見てて楽しいと思つのは俺の胸の内にそつとしまつておく。

悶絶する純夏の様子を暫く見守るとやつとの思いで取り出した氷を手にし、プルプルと震えながらこりらを振り返る。……取り敢えず声でもかけるか。

「おーい、大丈夫か？」

「ク

無言でうなずく。……落ち着いたかな？

「落ち着いたかー？」

コクコク

今度は一回、どうやら大丈夫そうだ。

「ふー、元に戻って良かったぜ。疲れて気持ちが高ぶったりするの  
は誰にでもある事だから仕方ないけど、お前はもう少しTOPをだ  
な……」

「……タケル……ちやんの……」

「うん？ なんか言ったか、純夏？」

「……タケルちゃんの……」

「すまん。もう少し大きい声で頼む」

「タケルちゃんのバカアア――――――!？」

そう叫ぶと純夏は拳を大きく天に向かつて振り上げる。あ、あれは  
間違いない！ D M P（どりる みるきー パンチ）！ や、  
三百六系逃げるに如かず！

そこで俺が逃げようとすると服を誰かに掴まれる。 い、この展  
開は……。

「逃がして……くれないんだな？……靈？」

「……」めんなさー、でも、でも、……逃げちゃ……駄目ですー。」

「……靈」

靈は静かに、でも確かに俺に力強く言葉を放つ。……そうだった、俺は田の前の問題からもう田を背けないって決めたんだ！

「で、ぶっちゃけお前楽しんでない？」

「…………楽しい、です」

ハハハ、靈はホンッとに素直ないい娘だな。

ビ畜生。

「く、ひえーー、愛と、嫉妬の、どじるみるきこーーーぱんちーーー。」

「バンプ！」

純夏の右の拳が螺旋を描くよしに放たれ、俺の腹部　鳩尾を貫く。貫かれた俺の体は飛行機の先端についているプロペラの様に回転しながら壁に叩きつけられる。あ、あいつ……！」腰がしつかり入つてやがる……。この調子で……訓練……頑張れよ？　純夏……ぐふ。

朦朧とする意識の中、集まつてくる野次に紛れて遙先輩達が見知らぬ男性一人を引き連れてくるのを見た。

人の第一印象というものは見た目で決まる。軍人の服を着てる人は軍人に見えるし、医者の格好をしてる人はその人の本当の職業を知らない限り医者だと思うだろう。他にも、その人と始めて会話した時の反応なども判断基準に入る。こちらに對して友好的な反応を返すこちらは『話しかけ易い』または『社交的』と捉えるし、あからさまに警戒されると『用心深い人』もしくは『絡みにくい人』という具合だ。こうやつて人は自分の中でコミュニケーションを築く。

もつとも中にはそれをめんどくさがり、自分から孤立をしたがる人種もいるが。でも、実際はそうやつて心の底から対人関係を作るのを拒む人間はそう居る者ではない。他者との関係を絶つことを本心から望まない限り人は必ず心の何処かで他人を求めるものだ。だから他人と関りたくないと言う人達の大半は人間関係を作る事を単に怠けてるか、どこか他人と言うものに對して恐怖に近い感情を持っている と俺は思つてゐる。話が少し横道に逸れたが結局の所、俺が言いたいのは

「……ぐふ」

壁に叩きつけられ氣絶している少年の第一印象を如何し様か？  
という事だ。

少し視線を横に移すと鑑ちゃんが拳を突き出したままの姿勢を保つており、何故か水月と重ねてしまう。あの少年に何かされたのだろうか？ そして俺と慎二の任務に意味はあるのか少しだけ疑問を覚えてしまう。

「むーー……ねえ、孝之君」

遙に声をかけられ其方を向く。その顔は少し拗ねてるようにも見えどこか可愛らしく感じる。でも一体何に拗ねているのだろう？

「どうしたんだ？ 遙？」

「孝之君、今日ずっと純夏ちゃんの事を見てない？」

……はれてたのか。女性といつのはこいつ事には、やはり敏感なのだろうか？ かと言つて教えて上げるわけにもいかないしな……。

「……もしかして髪が長い女の子が好きだつたりする？」

あれ？ なんか解らないけど意外な質問が来たな。よし、このまま話題を逸らさせて貰おう。

「やつだなどちらかと言つと好きかな？ …… 遙も伸ばしたらきっと似合つんじやないかな？」

何気なく遙の顔を見ながら髪の伸びた彼女をイメージする。……うん、かなり美人だ。今的小動物のような可愛さと違つて、男が描く清楚で穏やかな優しい女性の理想像をそのままにした感じ。

遙が急に俺の腕に掴みかかり迫る。その表情はとても、真剣で目を含わせるのを躊躇つてしまつ。

「ほ、本当！？ 本当にそう思つ！？」

「あ、ああ

俺は彼女から少し視線を逸らしながら遙の意見を肯定する。近づく彼女の香りが鼻孔を擦りドキドキしてしまつ。

「そ、そつか……そうなんだ」

俺から少し離れると俺にしか聞こえない声で呟く。その仕種がきちんと女の子らしくて可愛らしい。と言つた基本的に遙や水月やも美しい少女の部類にしつかりと入るのだ。可愛い女性は何をして也可愛いと言うのは案外、外れてはいない事だと思つ。

「あの、一つお願いしたいんだけど……いいかな」

何かを決心したように俺に話しかける。少し意外だ、彼女は見えた通り自分から意見を言つ娘じやない。一体どういった心境の変化だらう。

「俺で出来る範囲なり……別に構わないけど……」

少しだけ遙の雰囲気に圧倒されながら返事を返す。

「私、髪伸ばしてみるから……その時の私を見てほしいんだ」

「別に……それくらい、構わないけど……」

「だから……それまで無事で居て欲しいんだ……」

「……遙

そつか……遙は俺と慎一が無事だったかどうか心配してくれてるのか……。そうだよな、今回の事が終わったら次は生きて会える保障何処にも無いんだよなB E T A の奴らが今直ぐに襲つてきててもおかしくないんだ……。良い子だな遙は。

「解った……約束する……。俺も今より綺麗になつた遙を見てみたいしな」

最後についつい、軽口をついてしまう。そして俺の軽口に顔を真つ赤にする遙の表情がとても印象的だった。

約束は守らなきやな。一年後が楽しみだ。

お昼を済ませ純夏と霞を夕呼先生の所に連れて行く。氷を突っ込むのはやり過ぎただろか？ 純夏が少しだけ不機嫌そうに俺の前を早歩きで歩くので俺と霞の足取りも自然と速くなる。けど、おもしろい事に純夏は怒つてる筈なのに俺の右手を自分の左手でしつかりと握り締めているので微笑ましい気持ちになつてしまつ。少し前までならこいつのを露骨に嫌つたり恥ずかしがつたりしたけど人間一度開き直ると恐ろしいもので、今では心に余裕を持ちながらこの状況を楽しんでしまう。…………本来なら無くす前に気付かなきゃいけない事なんだけどな……失つてしまうものの価値を。

(……そうだ)

ふと、ちょっとした悪戯を思いつき純夏の握っている手に力を込めわざと純夏の左手と俺の右手を絡ませる　いわゆる恋人繫ぎだ。

一瞬だけ純夏がピクッと左手を強張らせるが何事も無かつたかのように俺の行動に応じる。心なしかさつきまであつた怒りの雰囲気が消えた様に見え、後ろから少しだけ見える頬がほんのりと赤く染まつていて　頭のアホ毛はハートの形になつていた。　幸せ

を噛み締める。

「…………武さん、純夏さん、私…………」の状況なんて言つて知つてます

「どうしたんだ？ 急に」

「どうしたの？ 霊ちゃん」

俺と純夏の様子をジッと見ながら何かを考えていた靈が、急に言葉を発し、俺と純夏は手を繋いだまま立ち止まる。

「……love birds、です」

横に居る靈が小さい声で何か呟いた。鳥の種類だろつか？靈はそれだけ言つと満足そうに微笑みながら先に行ってしまう。

「……一体どうしたの？」

「…………さあ？」

廊下で数秒間、ポカンと一人で立り尽くしてしまった。

悪友。

世間一般では交際すると自分のためにならない友人または反語的に仲の良い親友等に使う言葉だ。そして、私にはその言葉にカテゴリされる友人が居る。意味は……友人の名誉のため、一応後者だけにしておく。確かに本人のGoing My Wayを地で行く様な性格は学生時代なんども私を巻き込みかつ、私本人に対しても大切な損害を与えてきたがそれでも一応、一、応、私の大切な友人なのだ。……つづづく自分と言う人間は損な性格をしていると我ながら呆れる時もあるが。

そして、そんな友人 香月 夕呼は昼食時に行き成り私を呼び出して仕事を言い渡してきた。……私の合成豚角煮定食。

「戦術機用の新しく作ったOSのテスト?」

「そ、今はアンタ割と暇でしょ? 作った奴を試しに使いたいから手伝つてよ」

「手伝つてつて……あなた、自分の部下は?」

「……そつちにはこの前作つたOSの慣熟訓練させてるわ」

「……一つじゃないの?」

「まあね」

話をマイペースにどんどん進められるのと今は一人だけしか居ない事もあり学生時代のやり取りに戻つてしまつ。最近妙だ、昨日行き成り暫くの間、午前中の時間だけ社と鑑と言つ少女を訓練兵として扱えと言われたばかりだ。それに新しいOSを一つも? しかも慣熟訓練をさせてると言う事は一つはもう完成し扱つているという事

ではないか。……もしかして今回の回のは彼女が最高責任者として行っている計画なのだろうか？

「邪推は厳禁よ、……何もとつて食おうつてわけじゃないんだからそんなに心配しないでよ」

「はあ……良く言つわよ……それで私がどれだけトラウマを作ったか……」

「へ？ そんな事あつたかしら？」

「あなたねえ……」

「まあ、細かい事は良いじやない。過ぎたことを後悔するより人間、前を向いて生きた方が建設的よ？」

いやいや、細くない、細くない。少なくとも私にとつては未だに癒えない心の傷だ。

「で、具体的な話をするとアンタには作った〇〇の相手をして欲しいのよ。所謂アグレッサー……仮想敵役は教官をやつてるアンタには打つて付けじやない？」

「…………もう、何年も乗つてないのよ？ ……出来るかしり

昔の事を思い出し、胸に罪悪感が溢れる寸前の所で栓をする。やはり何年経つても消えない、か。

「撃震で不知火を倒したくせに来て言つわ…………」

「……何の事よ?」

「……ベツツにー」

「夕呼……あなた何か悪いものでも食べた?」

「…………かもね」

本当に妙だ、彼女に一体何があつたのだろうか?……もつとも、今  
の彼女とは大分立場が変わつてしまつたし今の彼女の社会的、政治  
的な立場を考えると別段変わつた事ではないのかもしない。

何時からだろう、夕呼との会話に人目を気にするよつになつたのは。

「ただいま……です」

私の後ろでノックと扉を開ける音が聞こえる、目を見やると社が部  
屋に入つて來た。何かいい事でもあつたのだろうか? 何処か上機  
嫌だ。社の事は遠目で何度か基地内で見かけたことは会つたがその  
時の彼女の印象はハツキリ言つてここまで感情を豊かにする娘には  
見えなかつた。

「おかえり、霞。鑑と白銀は?」

鑑? やはり彼女もあの歳で軍に身を置かされるのは何かしらの機  
密関係なのだろうか? 先程から疑問が増えて仕方ない。

「……love birds、です」

「……love birds、ねえ……やっぱり一人そろつて  
溜まつてんのかしら?」

love birds? ..... 確か英語でボタンインコの事だ。ボタンインコはアフリカ南部等に生息している鳥で、オスとメスの仲が非常に良いといつ事が由来で英語ではLove birdと名付けられている。BETA大戦以来、世界中の動植物が全滅しているがボタンインコの生息地はアフリカ……もしかしたらまだ生息しているかもしれない。専門家ではない軍人の私が解るわけではないが、あ、待て。..... love birds? 確か複数形だと

「.....バカツブル」

思わず口に出してしまつ。それと同時に後からノックの再びノックの音がし振り向く。

「すいません！ 遅れました！？」

「'ー'ー'ー'めんなさい」

若い男女が手を繋いだまま駆け込んでくる。鑑と……あの子は……。

「田銀えー卑」とニヤリなさることは言つたけど、TOPの位わきまえなさい」

「なに行き成り言い出すんですか！？」

少年が顔を赤くし声を荒げる。あの時とは違い明るい表情だ。

「何つてナニ」

「その発言はダウトです！」

夕呼が楽しんでいる。珍しさのあまり、目を丸くする。本当に楽しんでいる彼女を見るのは久しぶりだ。

「あ、神富司先生だ。何で此処に？」

鑑が私に気付き無邪気に笑う。はて？ 鑑は確かに社とは対照的に表情が口々口々変わる娘だがあそこまで無防備に笑つただろうか？ 少なくとも午前中は今の表情を出さなかつた。何に安心しているのだろう？

「……え？ 神富司教官？」

少年、夕呼とのやり取りを察するに 白銀と言う少年がこちらを向き少し強張る。白銀は少しだけ目を閉じるともう一度目を開き笑う。先程まであつた白銀の緊張が消えていた。何故か懐かしい人の笑顔を思い出す。そして白銀は

「改めて、初めてまして。……白銀武です」

全然初めてではなさそうに私に挨拶を告げた。

昔の事＝今の事（後書き）

8月7日、小説全体の神宮寺を神宮司に直しました。

（「免なさい！ まりもちゃん。お酒に付き合にますからどうか許してください。ハアハア）

……予告を待つてくれた皆様、申し訳ありません。……戦闘は次回になります。

物事つてなかなか、予定通りに行きませんよね？…………言い訳してスイマセン。つ、次こそは！ ん？ メールだ……高校の時のK先生からだ（当時の顧問です）

内容、「合宿やるからお前も来い。じゃなきゃお前の『武勇伝』を後輩に話す」

本当はもつと優しい言葉です……多分。

！？

## 師弟対決＝食い下がる

薄暗いショミレーターの中で目をつむり深呼吸を繰り返す。

勝てるだらうか？

模擬戦前に最終確認をする。制限時間は10分。機体はお互いにT-SF-Type94不知火、装備は両者、74式近接戦闘長刀の1本だけ。相手と近距離で撃ち合つドッグファイトと言つよりは、どちらが相手に明確な一太刀を入れるかと凌ぎ合つ武士どうしの真剣勝負に近い形になつた。まあ、目的が新OSのテストだから、動きの違いがハツキリ解る様にする為にこういう形式を執つたのだろう。相変わらずなんつー無茶を言つてくれるんだろう、あの魔女は。

勝てるだらうか？

神富司教官の戦つている所はクーデターの時に一度見たきりだが、あとの人の衛士としての能力は決して低いものでは無い筈だ。あの時、神富司教官はOSの違い、不意打ち、幾らか有利な要素はあつたが、第三世代機の不知火を第一世代機の撃震で落している。それでなくとも彼女は俺や207B、ヴァルキリーズの英靈達を育て上げた人だ、弱い筈が無い。

勝ちたい。

無謀なのかもしれない。身の程知らずかもしない。自分を過大評価しているのかもしれない。でも、あの時よりかは少しでもマシになつた筈だ。

……あるいは。

この考えが既におこがましいのかもしれないが。 それでも……

俺は既に犠牲にしているんだ。

207Bのみんなを

A - 01の戦友達を

まりもちゃんを

鑑 純夏を

だから。

どうしよう、どうしよう、と困つて思考放棄していく立ち止まるのはみんなに対する侮辱になる。だから俺は進む。彼女達の死を無駄にしない為に。立派に言うと遺志を受け継ぐ。悪く言うと自分の罪の正当化。 それでいい。他人にその事を責められても否定はない。ただ俺がしたいように、恐ろしく傲慢に。自分で選んだ人達を守り通し、それ以外の人達からの憎悪に甘んじるようだ。

地球を救う救世主でもなく。

人類を守る英雄でもなく。

ただ、ただ、1人の人間としてありのままを受け入れる。

俺自身がしたいように。彼岸で見ている人達に胸を張れる様に。

(……なんだか今の俺、第五計画の連中となにも変わんないかもな

違いはそれこそ 物事の価値観くらいじやないだろうか。

(今の俺だと第五計画の連中を悪く言えないよな……もつとも、だからと言つてあの連中の思い通りにはさせないけど)

第五計画はBETA殲滅を第一に。

第四計画は地球と人類の未来を第一に。

俺は俺と純夏と周りの仲間達の『幸せな未来』を第一に。

人類と地球の未来を守る為に消えた白銀武は今の俺を シロ  
ガネタケルをどう評価するだろつか？ エゴイスト？ 糞餓鬼？  
強欲な怪物？ 偽善者？ 独善者？

でもさ、散々人類の為に苦労したんだ。もつと自分に素直になつても良いだろ？ 今度は自分の為に。もつと極端に言うと早い話が、自己犠牲はもう飽きた。

(あああ…………自己陶酔も良い所だなこりゃ)

少々開き直りすぎだらうか？ やはり、永い間一人でいるどビコか普通の人とズレてしまつ。

こいで、もう一度深呼吸。

だからこそ全力でぶつかりたい。かつての恩師に。今の俺を、俺自身の覚悟を見て欲しい。

そして遂にシユミレー<sup>タ</sup>内に明かりが点り始め、目の前には屈託した雰囲氣の廃墟が現れはじめる。

さあ、師弟対決の始まりだ。

俺は開始直後に一直線に飛び出した。

(…………行き成り突っ込んできた。正氣！？)

前方の不知火が戦闘開始早々、水平噴射跳躍しながら長刀を中段構えで構え、迫つてくる。相手は正面対峙で勝負をするつもりなのだろうか？ 余程己の腕を信じているのか、もしくは新型のOSに自信があるのか。一応、夕呼に新型OSの説明を一通りには聞いている。話に聞いたとおりの物なら、どうしてまったく、とんでもない物を作ったものだ。あれのお蔭でエースの意味が変わってしまうではないか。

(…………感心している場合じゃないわね、取り敢えずは……無難に様子見……してたらやられそうね)

向こうには硬直時間が無いのだ、最悪ごり押しで負けてしまう。だからこちちは無駄な行動は一切取れない。隙を見せたら間違いなくそこを突くだろ？ 隙を突く 妙案かもしれない。あの、15歳の少年に経験の差というものを見せてやろう。

思わず口を歪め、唇を舐める。

(狂犬か……まったく、変な通り名をつけてくれたものね……)

どうやら久しぶりの戦闘に体が思つたよりも興奮しているらしい。何時にもなく好戦的になる。ふいに、先程交わした白銀の目を思い出す。何か重たい決意を秘めていた。もつとも、今時これといつて珍しくはないけれど……なぜだろうか？ 見てみたい。白銀と言う少年の覚悟がどれほどのものか。

(あなたの覚悟……見せてみなさい！)

私の思考とは別に冷静な自分が今の自分を客観的に評価する。  
だから狂犬なんて呼ばれるんだ、と。

(あと少し…)

前方に神宮司教官の不知火を網膜投影を通して肉眼で確認をする。ここで違和感に気付く。向こうもこちらを確認している筈なのに長刀を構えずに突つ立っているだけだ。直感でなにか策がある事を理解する。乗るか、乗らないか。勝負事の常として、技量の差に大きい優劣がある可能性が高い相手に勝つには基本的に守りに徹して隙を突くか、相手が実力を出し切る前に勝ちを決めるかの大きくわけて二つの方法があり。どちらにせよ、相手に対して徹底的に食い下がる必要がある。俺のとる方法は

(OSの特性を活かす。攻めて！ 攻めて！ 攻めまくる！ 神宮司教官が本気になる前に潰す！)

毒を食らわば皿までだ。どうせ時間が経てば経つほど神宮司教官が俺の機動に慣れてこちらがジリ貧になつてしまふなら、多少危険でも相手の考えに乗つた方が勝機はある。

(最初から……全力だ！)

そしてお互いの距離がしだいに近づく。まだ、神宮司教官は動きを見せない。本気で何を狙ってるんだ？

俺は不知火の姿勢を着地をしやすいように調整しつつ、長刀を持つ不知火の腕を神宮司教官の管制ユニットへ向けて一直線に伸ばす。相手の腹を突き刺す形だ。

そこで漸く神宮司教官が動きを見せた。避けた。何事もない様に。丸で道端で、自分にぶつかりそうな他人を何も感じず普通に避けるように。俺は地面に半ば激突する様な形で着地する。早く振り向かないと！ 早く！ 不知火に長刀を左手に持たせ、勢い良く後に横一線。直後にガギイっと横と縦の刃で火花が散る。……間一髪。じゃねえ！？ このままだと……！ ギイギイと鉄の軋む音が徐々にこちらに寄ってくる。そりやそうだ、向こうは両手で。こつちは左手。理由は至極単純だった。……このままだと俺が潰されるのは時間の問題、だよなあ。そら！ そのまま不知火の左手を横に振ると同時に俺から見て右に回り込み一旦距離をとる。神宮司教官は深追いをせずにこちらへ向き直し長刀を上段に構え。また、静止する。

(……結局振り出しか? ……いや、違う。)

今度は先程とは違い、構えている。……って言つ事は……。

神宮司教官の不知火がグッと一瞬膝に力を溜めたかと思つた瞬間、跳躍ユニットを大きく噴かしながら俺が先程そうしたように一気にこちらに詰めて来る。上等だ。向こうは上段で上から切りかかるならこちらは突きだ。向こうは切る面積が広い分、大振りで遅い。こちらは狭い分、動作が小さく早い。

もらつた！

神宮司教官が不知火の頭部より長刀を大きく構え振り下ろす。それに合わせ俺は中段で構えた長刀を向こうの中心へ穿つ 箕だった。

俺の思考が一秒間を十分割したように流れる。俺の予定では今頃、管制ユニットを貫くはずの長刀は……無い。両手ごと。と言うか俺の不知火の両腕が半分程、切り落とされて落ちようとしている。やられた。狙つてたのはこれかよ！？ 神宮司教官は大振りの途中までしか入力していなかつたんだ。大振りを途中まで入力し、一旦止まる。今度はそこから途中まで振り下ろしかけてる状態を利用して丶字にこちらの両手を切り上げる。簡単に言つてしまふとフェイントだ。しかも、XM3じゃない通常のOSで。並大抵の判断力じゃない。やっぱり、流石はヴァルキリーズの育て親。

普通ならここで勝負は着いたも同然。戦意喪失して降参するのが正しいかもしね。でもさ

「おとづら、投げ出す事と中途半端に終わらす事は

「もう！ 止めたんだよおおオオオ！」

まだ、勝負は終わっちゃいない。俺がまだ戦う氣があるのが理解出来たのか、今度こそ長刀で袈裟切りにしようとする。俺は負けじと、そのまま不知火を右からタックルするようにぶつける。その間に、何気なく切り下ろされた腕の先端を確認した。切り下ろされた左腕は綺麗に斜めになっている。これ位尖っているなら突き刺せる筈だ。機体は俺のが神宮司教官の方へ覆いかぶさる様に二機とも倒れる途中。二人とも不安定な姿勢で、神宮司教官の長刀が俺を切り下ろすのが先か、俺が神宮司教官を突き刺すのが先か。

「届き、やがれええエエエエー！」

獣の様に咆哮しながら、俺は不知火の左腕を神宮司教官の管制ユニット田掛けて放った。

「……負けた、か」

再び暗くなつたシユミレーターの室内で息と共に久しぶりの緊張を一気に吐き出す。与えられた情報を上手く扱えなかつた、と言うよりは感覚が鈍つた。向こうのOSが3割も増していく事を甘く考えていたのだ。衛士として現場離れしそうな事を痛感する。……それについても。

「……食い下がりすぎよ。白銀……」

あの時。一瞬だけ、氣圧されてしまった。普通はここで終わりだろうに。なんて無様な……。なんて諦めの悪い……。そう思い、呆れながらもなぜだか氣分が良い。

「……ク、クク……ハハハ……アハハハ」

可笑しくてついには吹き出してしまう。あそこまで諦めの悪い人間は初めてかもしない。でも、きっとそれが……。

「……見せて貰つたわよ。あなたの覚悟」

「はい、二人ともお疲れ様」

模擬戦が終わりまた、夕呼先生の所へ呼び戻される俺と神宮司教官。部屋の隅では何やら奇妙な声が聞こえる。

「も、もう頭回らない。あ、甘いもの～」

「疲れ、ました」

部屋の隅では純夏と霞の二人が草臥れて畳を回しながら、肩を寄せ合っている。何してたんだ？

「鑑が思つたよりも使えたから、仕事を一気に頼んだのよ。主に電卓的な作業を」

夕呼先生が俺の疑問を察したのか、ビッチリと数字と記号が書き込まれた紙を俺に手渡す。元は白紙だった筈なのに白い所が殆ど見当たらず、俺には一切数字の意味が読み取れない。……これを純夏が？ 俺よりも勉強出来てなかつたあいつが！？ ……正直言つて霞がやつたつて言われた方が俺は信じるぞ？

「馬鹿にするな」

俺のあからさまな態度に純夏が畳を回しながら反論する。いや、だつて、お前のキャラじやないだろ？

「だ・か・ら・、元〇〇ゴニシトだつたんだよ～？ これくらい、は～朝飯前なの～」

「……にしては疲れてないか？」

しかもこいつどもへさに紛れて機密情報を……神宮司教官が居るんだとぞ？

「ふー、それはそつとして一人のお蔭である程度、畠処は立つたし……白銀、3日後よ」

夕呼先生が助け舟を出すように強引に話し始める。純夏が自分が口

にした事がどれ程機密なのかを理解したのか、自分の両手で口を開じる。いや、遅いからな？」

「あ、はい」

3日後とはきっと面会もとい訪問販売の事を指しているのだひつ。

……セールスマンか俺は？

「え？ ……タケルちやん何処に行っちゃつの？」

（あ、ヤベ……）

純夏が急に不安そうな声を出す。…………そつだよ…………こいつ、今は夜1人出来ないんだつた…………。…………夕呼先生に確認するか。

「夕呼先生。予定ではどれ位、向こうに居る事になるんですか？」

「別に長く居るつもりはないわよ？ 会談の内容で変わったりする可能性があるけど、予定では1泊2日ね」

（1泊2日かあ…………1日位は…………）

ちうつと純夏を見てみる。 憂い不安な顔をしていた。

（ダ――！ くつや、こいつなつたら…………）

「因みに鑑を連れて行つた場合は鑑の身の安全、保障しないわよ？」

「うがー！」

言つ前に遮られた。いよいよ、進退窮まった。そんな俺に。

「……私がいます！」

白いウサギの救世主が現れた。

あれから2日。明日はいよいよ出発の日。聞いた話では、伊隅大尉も付いて来るとか言っていた。夕呼先生の護衛だらうか？でもまあ、それ程気にする事でもない。寧ろ今は田の前にある「」の問題を解決するべきだ。そう思い自分の部屋の扉の前に、風呂上りの格好で立ち尽くす。扉に向ひてはしゃぐ。最近、落ち込み気味の純夏が居る筈だ。

コン、コンッと軽くノックをする。暫くすると。

「……………」

少しだけ生氣の足りない返事が返つて來た。2日間この調子だ。しかもその癖、寝る時は結構きつく抱きついてくる。そのお蔭でこつちは我慢の限界だ……性的な意味で。でも、無理も無いと思つ。純夏が俺を呼んだ時の状況を考えてみるとやるせない。この世界の俺は純夏の田の前で殺されていて、あいつは田の前で一回も俺が食われた所を見ているんだ。その時のトラウマと、今の純夏自身が抱えている罪悪感。ひとつとその2つが暗闇と言う場所であいつ自身に襲い掛かるのだね。心の傷は簡単には治らない。寝てる時の一

いつが震えるたびに俺は自分の無力さを思い知る。……取り敢えず、部屋に入ろう。

ガチャリと扉を開ける。

「ただいま」

「お帰りなさい……」

バタリと扉を閉める。

……待て、落ち着け。昨日までの純夏の服装を思い出せ。確かにこの基地内の他の女性陣と同じ格好の可愛げなんて無い、軍の支給品だつた。……もう一度。今度は落ち着いて。先程と同じ要領で再び扉を開ける。

「……タケルちゃん?」

部屋を改めて確認する。部屋のサイズ 자체は他の衛士と変わらない。違いはベッドが少し大きい事ぐらいか。もつとも2人で寝ると少し狭いけど。そんなベッドの上で

「……どうしたの?」

パジャマ姿だ、何時もの黄色いリボンも外していて長い髪がベッドに広がっている。種類はえええっと、何だつたか。……たぶん、フニミーン系……だつたけ? 薄い橙色で、襟と袖にフリフリが付いて、襟の真ん中には小さいリボンがあしらわれている。全体的に柔らかく、ふんわりしたイメージを受け、現実を認識した俺の頭の中が凄い事になる。

普通に可愛いな、やっぱり純夏には明るくて暖かい印象の色が似合うな、やっぱり抱き締めると柔らかいのか、風呂に入つたばかりだから良い匂いがするな、リボンを外すと何処か新鮮だな、こいつの頭に俺の顔を埋めて見たい、上の下着がねえな、触りたい、キスしたい、押し倒したい、つーかもう 堪らん。

「あの、変……かな……？」夕呼先生が今日、何着かくれたんだけど……」

純夏がベッドの上で女の子座りしながら上目遣いで不安そうに聞いてくる。んなもん決まってる。最高だ。ついでに夕呼先生、アソタも最高だわ。

「純夏」

「は、はい！？」

純夏の肩に手を回してこちらに引き寄せる。柔らかい。暖かい。自分の心臓の音が増えた錯覚を覚える。心が凄く安らぐ。一人で静かにしている時は違う安心感が俺を包む。

どれくらいこうしていただろうか？

今聞こえるのは俺と純夏の心臓の音と呼吸のリズム、それと無機質な時計の針の動く音。

「……1日だけ、我慢してくれよな？」

必ず帰るから。そう言つてなるべく優しくベッドに押し倒す。

「うふ……靈れいりやくも西のからきつじ、平氣。……『めんね弱虫で  
……』

つーか帰らない訳がない。一人になんかできない。

「アホか……んな事であやまんな」

「でも、だつて……ん……「あ……んむ……」

なんかめんどくさい事を言こやつなので、純夏の小さい口を俺の口で塞ぎ、口内に俺の舌を無理矢理さしこむ。驚いたのか、抵抗があつたが逃がさない様に右手で純夏の頭を後から軽く押さえる。すると、観念したのか閉じた歯を開きおおおおおと自分のから舌を差し出す。やばい、更に興奮して来た。そのまま純夏の舌を俺の舌で味わうように舐める。気分は丸で獣、理性は何処かに行ってしまった。今、俺にあるのは純夏に対する欲望と愛おしさだけ。少し怯えている純夏が可愛らしい。　まだ俺は純夏の口内を貪る。

暫く耳にはにはピチャピチャと、舌と舌を絡ませ合つ音だけしか聞こえなくなる。

数分後、漸く口を離す。つーつと唾液がやらしく糸を引く。

「うふ……ケダモノ……」

非難がましく、少し涙目で「からじを見つめる。罪悪感2割、そそられるのが8割って所か。

「悪い……続考、良いか?」

「……断るとと思つ?」

「いや、全然」

悪びれも無く俺は言い放つ。こんなもんで終わらすつもりは全然無い。少しだけ離れるから、その分こいつを、純夏を俺の中でもつと焼き付けたい。

なんてたつて、今の俺の一番の原動力は純夏なのだから

師弟対決＝食い下がる（後書き）

8月22日一箇所修正しました。

後半の表現を一部変更しました。（今回は色々な意味でギリギリです）

疲れました……アノコモンヨウシャネエデス。

いつちは引退してもう1年なのに一本先取りとか……。

あ、次回はもしかしたらあの娘ができるかもです。  
(あいつに相談しようか……)

行つたかな？

私は狸寝入りをやめ、ベッドから体を起こす。本当は、直接起きて『行つてらっしゃい』を言いたかったけど、どうしても昨日の事が恥ずかしすぎて気まずく、タケルちゃんの見送りを寝たフリで済ませてしまった。…………多分ばれてた。自分の頬をなんとなく手で触れる。

キスされた。しかも、シユチュエーションが昔ドラマとかで見た、寝ている奥さんや恋人にする『行つてきますのキス』。

「ひひ～～～！」

途端に恥ずかしいのと幸せな気持ちでベッドの上で布団を抱きながらはしゃいでしまう。

キスされた！ タケルちゃんに行つてきますのキスされた！！

「……ひつ！ い、痛！？」

当然、昨日の事があるので激しく動くと下腹部 正確には人前で言うのが憚れる場所に、鋭くて重たい痛みが響く。昔、こつそり読んだタケルちゃんの本では初めての女性が気持ち良さそうにしているのを思い出す。 全然違う。まったくの正反対だ。現に昨日、入れた時には痛さのあまり泣いてしまった。一応経験は二回目なん

だけど、痛いものは痛い。

「タケルちゃん…………溜まつてたのかな？」

つい、口に出してしまった。それほど激しかった。大好きな人に強く求められるのは女性として純粋に嬉しいんだけど…………。正直に言つと、タケルちゃんがあんなに積極的に迫るとは思わなかつた。  
…………それにしても、夕呼先生の服を渡すタイミングが良すぎる気がする。あの人の事だ、きっとタケルちゃんが私を抱く事に夕呼先生のメリットが少なからず有つたのだろう。少しだけ頭に来るけど、ありがたいと思うのが本音だ。昨日の事は夕呼先生のお蔭でもあるし。

「…………慣れなきや 駄目かな…………」

首筋を撫でながら、先程の考えにつられて昨日された事を思い出す。色んな所をキスされたり、舐められたり、甘噛みされた。…………なんだから食べられた気分だ……。あと、背後からは恐い。タケルちゃんが見れないのは不安だ。でも、背後からの方がタケルちゃん、やり易いのかな…………。その時のタケルちゃん気持ち良さそうだったし……。

(…………って、朝から何考えてるんだ、私！？)

なんだかイケナイ事をしている気持ちになり、手で頭を抱えながら振り回す。その時に結んでいない髪の毛がベッド一杯に広がるけど、気にしてられない。でも今、体を激しく動かすと…………。

(い、イダダダ！ わ、忘れてた……)

「今日……大丈夫かな？」

体の事と、タケルちゃんが居ない事。両方の意味で不安になつた。

何この状況？

狭い車の中で、右手には共犯者の魔女、左手には元上官の戦友。2人とも大変美人なんだけど なんでだか両手に花の気分にはれない。いや、恋人が既にいる事もあるんだろうけど……。こう、プレッシャー的な物で。

「で、白銀。昨日は楽しめた？ 鑑に似合うのを私なりに見積もつたつもりなんだけど……」

……何言い出すんだ、この人は。そりや、昨日の純夏の事については感謝してますけどこの状況でその事を言つたら……。

一瞬だけ伊隅大尉と目が合う。けれど直ぐに視線を外される。けど、俺が視線を戻すとまた、伊隅大尉の視線が……。

クソ、こうなつたら 。

「ええ、お蔭様で！」

(夕呼先生に届け！ 僕の皮肉！)

言葉にありつたけの皮肉の感情を込める。具体的には『こんな所で聞くなこの野郎』

「そう良かつたわね、因みに鑑の服の代金はあなたの給料から引くから」

やつぱりスルーカよ。給料は……別にいいか。そもそも、配給が当たり前のご時勢に買い物する余裕はそんなに無いだろうし。こには恋人らしく純夏に服を買ってやれたって事で。

「んで、はいこれ」

おもむろに俺に封筒を渡してくる。中は……諭吉さんが3人。まあ、予想通り。……軍隊でよかつた。

「あの、口を挟んで申し訳ないのですが……一体何のこと話をしているのですか？ 鑑がどうしたんですか？」

遂に伊隅大尉が痺れを切らして声をかけてきた。夕呼先生が、してやつたりつと顔をニヤつかせる。多分、本人としては今日の会談の前になるべくリラックスしたいんだろうけど……。にしても、ホントに伊隅大尉つて結構乙女だよな……。ギャップってこういうことを言つんだっけか？ 案外、そこが彼女の魅力の一つかもしれん。

「別に大した事じやないのよ伊隅。ただ私は幼馴染のカッフルに少し世話焼いてあげただけよ」

うわー……スゲー楽しそう……。そして伊隅大尉。顔が……目、見開きすぎですよ……。何でそんなに切羽詰つてるんですか？

「……詳しく述べてもらおうか。白銀……」

必死の形相で肩を両手でかなり強く握られる。痛いです、大尉。  
……つて言つたこりや、根掘り葉掘り聞かれるな……。さて、どうや  
つて話そつか？ あんまり俺と純夏の根っここの所は話したくないし  
……量すか。

「ええと、ですね。実は今回の任務前に純夏と少しケンカ……つ  
て言つるのは気まずくなつてしまつて……」

「ほひ、それで？」

俺が言い終わる前に問い合わせて来た。背後からは夕呼先生のクスク  
スとあきらかに漏れた笑い声が聞こえる。頼むからもつとマシなス  
トレス発散方法にして下さい、夕呼先生。

「それで昨日、出発前には何とかしようと思いまして、取り敢えず  
風呂上り2人でゆつくり話し合おうとしたら……」

「自分のベッドの上で可愛いパジャマを着て待つっていた鑑を思わず  
押し倒して頂いたやつたのよね？」

「…………ええそうです」

我慢できなくなってきたんだろう。夕呼先生が会話に混じつてくる。  
ついでに昨日の純夏を思い出す。今度から寝る時はリボン外しても  
らおうかな……。あと、ちょっと怯え気味な初心な反応が苛めたく  
なるなよな……。 ッハ！ 任務前にナニ考えてんだ、俺は！？  
取り敢えず口の中の涎は出てないな、よし。

「白銀、貴様……意外と積極的なんだな……。正樹もこれ位だったらしいのになあ……」

伊隅大尉がため息を吐きながら愚痴り始める。つと言つか、さつき、意外って言いました？ 水月先輩の時といい、一体彼女達には俺の第一印象はどういう扱いになつてているんだ……。

何気なく伊隅大尉を観察してみると、額が少し汗ばんでいる。緊張してるのか……？ 戦闘前とかなら解るけど、今回みたいな事務的な仕事は楽勝そうな人だと思つていたんだけど……。

「……汗かいてますよ。緊張してるんですか？」

取り敢えず様子見。

「……実はな今回の任務の後に、私には重大な事が控えてるんだ……」

凄い真剣な表情だ……。俺にはこの人がこれから死地に向かう気がしてならない。夕呼先生の方を見る。俺の視線に気付くと表情を魔女の仮面に戻す。……思わず唾を飲み込む。

「言つてなかつたわね……白銀。伊隅にはこの後、重大任務が控えているのよ……」

「重大任務つて……一体……？」

先程までの緩くなつた空氣は何処へ行つたんだろう。車内の空気が緊迫してくる。

「それはな……」

伊隅大尉が重たく閉じた口を開く。俺の動悸が少しだけ早くなる。

「行かねばならないんだ……」

「ど、何処へ」

「場所は……？」

「場所は……？」

問い合わせるように俺は伊隅大尉の言葉を繰り返す。

暫しの沈黙。俺はただ見守る事しかできない。車の機械的な音だけが周りを支配し始める頃、意を決した伊隅の口が開かれる。

「…………温泉だ」

「…………。…………はい？」

やばい、今少しだけ思考を放棄しちゃつたよ、俺。

「…………温泉ですか？」

「そうだ。温泉だ……告白するんだ、幼馴染に……」

確認のため聞き返す。本人は至つて真剣。ふざけている所なんて微塵もない。……スゲー恋する乙女の表情してるけど。

「…………つふ

「オイ。夕呼、アンタ今笑つただろ？ つか、急にシリアルスな顔をするな。こっちは覚悟しまくったんだぞ！」

「伊隅にとつては人生を左右するくらい重大な事でしょ？」

俺の恨めし気な視線を氣にも留めないで至極真つ当な意見を語つ。  
……そりや、本気の恋は当人にとつては人生に絡むものだけどさ  
……。

「すまないんだが……何か、アドバイスをくれないか？ 初めてなんだ……こんなに積極的になるのは……」

アドバイスか……。俺は自分の記憶を掘り返しながら役に立ちそうなものを探してみる。でも、記憶つて言つても、純夏の事以外は2回目の記憶しかないからな……。俺が純夏に告白した時にはもう向こうから告白されるようなものだし……。なんつーか、我ながら情けない気持ちになつてくるな。俺自身、始めから純夏にそれなりの気持ちがあつた筈なのに、純夏が酷い目に遭わなきゃちゃんと自覚できなかつたなんて……。幼馴染だからとか、家族みたいだからとか、純夏もそんなに自覚してなかつたからとか、つて言つるのは自覚が足りなかつた俺からしたら、言い訳になるよな……。言葉にしないで察するのが大切つて言つるのは、理想ではあるけど、飽くまで

理想だ。そもそも、人間がみんなそういうことができて当たり前なのか？ 無理だろ。もし、そんな事ができたら人間はみんな対人関係で悩んだりしない。人類の結束だって、もう少しマシになる筈だ。

だから、その代わりに言葉にするんだ。

「大好き」「愛している」「あなたの事が好きです」

そう言って自分のありつたけの気持ちを言葉に込めるんだ。そうやつて、言われた人は言った人の気持ちを渡されるんだ。その人の気持ちと一緒に。まあ、世の中にはそれを重たいって言う人もいるけど……。言靈っていうのは言いえて妙だと思う。靈感どうのこうのはさて置き、言葉に力があるのは本当だしな。あ……これ、アドバイスになりそうだな。なんだか凄い当たり前のことで申し訳ないけど……。でも、ほら、基本つて大切だし。

もはや習慣になつた熟考もとい一人脳内談義を切り上げ、ずっと俺の言葉を待つている伊隅大尉にアドバイスを渡す。

「……俺自身、純夏に告白されて漸く自分の気持ちに素直になれたんで、アレなんですけど……きちんと、言葉にして下さい。なけなしの勇気を振り絞つて、言葉に自分の気持ちを乗せて下さい。相手が伊隅大尉の事を大なり小なり思つているなら気持ちはしっかり伝わりますよ」

「…………」

伊隅大尉は俺のアドバイスを聞きながら田を開じ、何かを呟く。きっと俺の言った事を繰り返しているのだ。

「……ああ、そうだな。助かったよ、白銀。覚悟が固まつた。この気持ちならきっと伝えられると思つ」

清々しい顔をする伊隅大尉。上手くアドバイス出来ただろうか？ 黙りっぱなしの夕呼先生の顔を見る。

まあ、いいんじゃない？

表情がそつ告げていた。……今考えたら相談するなら夕呼先生の方が……。ああ、立場上の問題とかあるのか。

「そろそろ田的で

黙りっぱなしだったドライバーさんが口を開いた。車のフロントガラスから日本特有の武家屋敷が見え始め、丸で時代劇の舞台に迷い込んだ気分になる。やはり、庭には池があつてそこには鹿威しがあつたりするのだろうか？

「さて、つと」

夕呼先生が軽く自分の頬を手で叩く、表情と田つきが変わっていた。少し驚いたが、どうやらスイッチを入れたらしい。

「……日本の昔話みたいに狐に騙されるお侍さん達だと良いんだけどね……」

珍しく俺の前で弱音を吐く。こゝれどばかりに、俺は茶化そうとする

「あれ？ 昔話だと成敗されませんでしつたつけ？」  
「…………」

「あれ？ 昔話だと成敗されませんでしつたつけ？」  
「…………」

「…………あんた、どっちの味方よ？」

「夕呼先生が俺と純夏の味方なら、俺は夕呼先生の味方です」

「…………あつそ」

「お？ 勝った？」

「帰つたら鑑に、白銀が現地妻作りとしてたつて言つておくわね  
？」

「マジで勘弁してぐださい……」

訂正、口ではござりませんこの人には勝てない。

「着きました」

その時ちよつと玄関…………と言つより大きい門の前で車が止まる。  
到着だ。右と左のドアからそれぞれ、夕呼先生と伊隅大尉が降り  
る。俺は一応左から。

車内から出た所で、夕呼先生と向かい合わせに目が合ひ。

「…………〇〇の事、頼んだわよ、白銀。がつづり稼いできなさい」

「夕呼先生も殿下と日本政府相手に化かしまくつてくれさい」

さて、共犯者同士で意志の確認もした事だし。

「「行きますか」」

カコーンっと、耳当たりの良い音が頭に響く。大きい池の隅にある鹿威しが、私がここに来て何回田かの音響を奏でる。

鹿威しは本来、農作物を荒らす鳥獸を追い払つ為に使われるものらしいが、今では日本庭園の装飾として親しまれている。

また、カコーンっとあたりに音が響く。なかなかに心地良い。静寂に包まれた空間の中でのこの音は自分が日本人で良かつたつと思わせてくれる。

もつとも、今の私には楽しむ余裕なんて無いけれど。

(一体、何が出来るのでしょうか……今の私に……)

見てることしか出来なかつた。

燃える京都を。

襲い掛かる恐怖を自らの命を燃やして戦う人々を。

愛する自分の國の民が食われていくのを。

ただ、ただ、見ている事しか出来なかつた。

ああ、無力だ。

呪詛のように自分に呴く。

(……このままではいけませんね……)

思い直す様に空を仰ぐ。見上げた空は青く澄んでいる。……残念ながら鳥はいない。

それでも空の青さから元氣を貰い、自分に活を入れる様に立ち上がる。

自分が落ち込んでいては駄目だ。そんな資格は無い。既に幾つもの人命の上に立っている私に泣き言は許されない。

「……殿下

背後から自分の部下 鎧衣 左近が控えていた。来たのだろう人物達が。

「……解りました、今行きます

願わくば、今回の事で少しでも前に進むことを祈るつ。

(……祈った後は……)

実践するだけだ。

どもです。マブラヴシリーズのトラウマが冥夜END手前の純夏とのお別れシーンでお馴染みのもんたです。その後、直ぐに純夏を攻略し直したのはいい思い……出?

と言つわけで今回は殿下が初登場でした。個人的には百合……なんでもないです。

ついでに読んでくれている人達に報告を一つ。  
PVが49000越えました! ユニークは10000PVです!  
読んでくれているみなさん、ありがとうございます。

えーっと、では今回の後書きには書いつと想つていたネタを発表したいです。

1、マブラヴヒロインみんなヤンデレ化。

2、テロリストになつた武の話。

3、ハーレムを作つた武に復讐しようとする子供（〇〇ゴーット純夏の養子）の話。

……全部ドロドロしてゐるな……。ではまた次回!。

## 距離＝関係ない

俺達が通された部屋は時代劇でよく見た、將軍様が居座るような広いお座敷だった。これまた時代劇みたいに色々な人達が左右で一列に正座で座つて並んでおり、奥の段にはこの国の顔とも言える人物、政威大將軍殿下が凜と居座つていた。彼女から歳不相応の威厳を感じ、少しだけ体が緊張する。

(……早く挨拶を済ませたい)

打ち合わせでは、俺と伊隅大尉は挨拶が終わつたら、さっさっとＳの説明の為にこの部屋から撤退する予定だ。

(しかも……なんか俺、注目されてる……?)

俺が3人の中で一番見た目が若いせいか、複数の視線が周りから突き刺さり、内心冷や冷やす。左右に居る2人は俺とは逆に涼しい顔をしている。 訂正、伊隅大尉は何故か機嫌良さそうに微笑んでいる。

(ここの緊張した空氣の中で機嫌よく微笑むとは…… さすがです。伊隅大尉)

どうやら伊隅大尉の思考は温泉作戦で一杯らしい。後の仕事で支障が無いといいけど……。

「お初にお目にかかります。私は……」

俺が余所見をしている間に夕呼先生は自己紹介を始める。その間に

俺は頭の中で自己紹介をシリコレートでもじょ。えーと、いつの  
は名前と所属と……あれ？

(……俺の階級……は?)

ヤバイ、重要な事を忘れていた。俺はまだ、階級を夕呼先生に貰つ  
てない。……どうする? どうやって誤魔化す!?

パターン1

「俺は階級に縛られない自由な男です」

そうか、この場から出て行け。

パターン2

「あ、スマセン。階級なんだつたか、忘れました」

前線送り確定。

パターン3

「夕呼先生から階級を貰つのを忘れました

不正発覚。軍事裁判。

……逃げ出しちしがいたい。来て早々に純夏が恋しくなる。

「つで、続いてこの者達なのですが……」

来た！

「「」の少年は社靈同様……」

あれ？ そのまま夕呼先生が説明を始めた。どうやらこの場で俺に発言をせるつもりは無いらしい。……助かった。って言うか、今の俺と純夏の戸籍ってどうなつてるんだ？ あの惨事での消息不明は死亡したのと同義だし……。もし戸籍が鬼籍扱いされてたらやばくないか？ 入籍できないぞ、俺と純夏。

（……って、違うだろ。緩みすぎだ、俺）

いかん、純夏のボケボケうつってる。けど、裏を返せばそれだけこの世界で心穏やかに過ごせている訳だ。今の幸せを確認しながら自然とやる気が沸いてくる。

（「し！ 俺、頑張るからな。純夏）

因みにこの後、顔がニヤニヤしていた事を伊隅大尉共々、夕呼先生に怒られるのは純夏には内緒だ。

お昼。

私の予感は的中した。

「……大丈夫、鑑？」

私の向かいの席に座っている水月先輩が心配そうに声をかけてくれた。

「な、なんとか」

テーブルで上半身をうつ伏せに寝かせながら私は答える。体の痛みが朝の部分と訓練の肉体疲労が合わさって凄い事になっている。人間の体って意外と痛みには耐えられるらしい。うー、ホントに痛い。

「なんか食べたい物、ある？」

水月先輩が気を利かせてくれる。悪いけどここは好意に甘えさせてもらおう。なんって言うか、水月先輩って本当に面倒見が良い人だと思う。多分だけど、この手の人は同性にも人気がある。タケルちゃんを見てたんだから間違いない。……タケルちゃんの周りには何故か女の子ばかりだつたけど。そう言えば、クラス内だと冥夜が来るまで割りと男子と遊んでいた気がするけど、外で鎧衣君以外の友人と遊んだりしたんだろうか？……本人が気にしてなかつたから、大丈夫。きっと、多分……。

「えーっと、日替わり合成定食で」

「オッケー」

私の注文を聞いて人じみの中を泳ぐよつに行く水月先輩。足取りが上手だ。

そこで私をずっと見ている霞ちゃんの視線に気付く。「こちらをじーっと見上げながら見つめる視線はどこか、くすぐったく感じる。

「あの……視線が気になるんだけど、霞ちゃん？」

「…………純夏さん、なにか、隠します」

霞ちゃんがこちらから視線を外さず確信を持ちながら言つ。私の心臓が音を大きくし、段々と早鐘を打ち始める。えと、えと、ええと（！？）で、でも霞ちゃんの能力はその時の考えしかよ、読めないはず！ つまり！ 今を誤魔化せば…………

（もももも、もしかして霞ちゃんに読まれた！？ 昨日の夜にタケルちゃんに されながら×××をbeeやされたりとか、元素周期表だとTmの数字したとか、うつ伏せでとか、他にも色々読まれた！？ で、でも霞ちゃんの能力はその時の考えしかよ、読めないはず！ つまり！ 今を誤魔化せば…………）

「…………すいべ、大人です」

霞ちゃんが頬を可愛らしく赤く染める。瞬時に私の体が音を立てて石化した。ば……馬鹿だ、私。今考えたら読まれるに決まってるじやん！

石化した私の後ろから話しそが聞こえる。どうやら先に行つた遙先輩と一緒に水月先輩が帰ってきたらしい。もちろん、私は固まつて

動けない。

「つひりょー、なんで鑑が固まつてんのー?」

私の異変に気付いた水月先輩が声を大にして驚く。答える余裕なんて今ある訳無いよ…………恥ずかしい、恥ずかしい、恥ずかしい、恥ずかしい。靈ちゃんにばれた、靈ちゃんにばれた、靈ちゃんにばれた、靈ちゃんにばれた、靈ちゃんにばれた。…………あ～う～…………どうしよう。

頭の中で白が中心から周りに向かつて広がつてしまい、頭が真っ白になる。

「……今夜、聞かせて下さいね」

靈ちゃんが微笑む。何故だか解らないけど私には恐く見えた。タケルちゃん……私達の妹は、今日も健やかに成長してるよ…………。

俺はショミーラー内で準備をしながら異変を感じた。

(……? 今、純夏がなんか言つた様な……少し心配だな……よし、

急いで取り掛かる(づ)

急に純夏が心配になり準備を急ぐ。でもここで焦っちゃ駄目だ、ある程度の成果を上げないと近衛部隊の人達は興味を示さないだろうしな。状況設定も、こつちは陽炎で相手は不知火・壹型丙つて言つ不知火の改良型を使うらしい。しかも、二対四。

(……にしても殿下が直接見に来るとはなあ……まあ、現場主義で考えてくれるならこちらとしてはアピールチャンスだ、逃す手は無いよな)

問題はつと……俺が第二世代の戦術機に乗った事無いのは……大丈夫か、不知火乗れるんだし。やっぱ一番の注意点は近衛部隊の練度だな。神宮司教官レベルだとするとやっぱ、短期決戦で行くしかない。こちらのトリックキーな動きに混乱している間に倒さないと。後は……伊隅大尉との連係か。

なんでも夕呼先生の話だと、A-01部隊にはヴァルキリーズにXM3を優先配備させたらしい。本来なら、ヨツシャ！ 連係プレーで楽勝！ になるんだろうけど……。

(冥夜の時もだけど俺って動きが変態過ぎて取りすらいらしく、囮になるしかないか)

4機の間に突っ込む。言葉にすると簡単だけど、そんな訳が無い。戦術機はエレメントといつ一機一組での運用が基本だ、俺の使い方が特殊なのを忘れてはいけないよな。

(……甲21号作戦を思い出せ。あの時は出来ただろうがよ、俺!)

弱気になつてどうする？ 気落ちしそうな自分に檄を飛ばす。己の我が仮を通すと決めたんだ。

「おい、白銀

急に伊隅大尉から通信が入る。事前に作戦を考えたのだろうか？

「私に任せろ」

伊隅大尉が不敵にいや、無敵に笑う。背中にぞくりと寒気が走る。

「こんな瑣事、ひとつ終わらせるぞ」

瑣事つて……任務に忠実なこの人が言うとは……なんか目がギラギラしてゐるし、激しく不安になるんですが……。

……しかし悲しいかな、時は無情だ。

「それではこれより、模擬戦を始めます」

女性のオペレーターが会戦の合図を始めた。

「んで、鑑が固まつてた理由って何なのよ？」

「んんん!? エホ、ケホ……な、何のことですか?」

唐突に先程の話を振られ口に含んだ合成ほうじ茶を噴きそうになる。慌てて飲み込むけど、今度は逆に気管に入りそうになり咽てしまう。

「だ、大丈夫、純夏ちゃん? もう水月つたら、野暮な事聞っちゃ駄目だよ?」

遙先輩が優しい手つきで背中を摩つてくれる。背中を摩つてくれるのはありがたいんだけど、野暮な事つて……。

「えー、遙は気にならないのー?」

「あんまり後輩を苛めちゃ駄目だよ~」

子供みたいに口をへの字に曲げながら水月先輩が抗議する。この2人は仲がいい。私には親友つて呼べるほどの女の子の友達はいなかつた。別に友達がいなかつた訳じゃない。でも、基本的にはタケルちゃんの隣にいる事が私の定位置だったんだ。その事については後悔するとか、寂しかったとか、そういうものは無くて、むしろ自分が望んでタケルちゃんの隣にいた。　ああ、私ってホンツと、本当にタケルちゃんの事が昔から大好きなんだなって、痛感する。　今度は逆に考えてみる。何時から好きだつたんだろう?さすがに初対面の時に一目惚れした訳じゃないと思う。

(…………ああ、そつか。小さい頃からタケルちゃんの隣にいると

私、安心してたんだ）

小さい頃に、良く気が利く子だねと周りの大人の人々に言われた事が  
ある。　違う。今なら解る、と言うか夕呼先生にそれっぽい事を  
教えてもらつた。

## ESP

簡単に言つと超能力の事だ。そしては私には、今は解らないけど『  
元々』それなりの素養があつたらしい。つまりはそういう事なんだ。  
(……昔から女の勘だと思っていたのは超能力でしつたって……ど  
このマンガだよ……)

改めて考へると、それらしい心当たりが出てくる。

子供の頃、人ごみが恐かつた。自分の心がいろんな人に塗り潰  
されそうな気がした。

中学の頃、タケルちゃんの事を気にしてる娘が私の事を嫌つて  
る気がして恐かつた。

もし、それらが全部気のせいじゃなかつたら？　そう思つと背中に  
汗がふつふつと湧いてきた、思考が少し鈍くなり始める。　だけ  
ど。

だけどその分。

タケルちゃんが隣にいると、安心できた。心が温かくなつて、不安  
なんて何処かに行つてしまつた。

子供の頃、タケルちゃんが隣に居てくれれば人ごみは全然恐くなかった。

中学の頃、タケルちゃんが隣に居てくれれば苦手な娘とも普通に話せた。

私は小さい頃からタケルちゃんの優しさに守られてきた。だからだ、だから、タケルちゃんが大好きなんだ。子供の頃から私を守つてくれる男の子 シロガネタケルちゃんが。女性が自分を優しく守ってくれる力ツコイイ男性に惹かれるのは必然だ。そうやって少しずつ、少しづつ、タケルちゃんに対する私の気持ちは大きくなつたんだ。

(早く帰つてこないかな……)

上を見上げるけど天井しか見えなかつた。蛍光灯の眩しさに少し目が眩む。

(……うん、決めた!)

帰つてきたら、思いつきつ甘えてやる。

(あ? ……また、何か純夏にあつたよつな……)

今度はさつきみたいな焦燥感は無く、なぜだか心がくすぐったくなる。なんなんだ?

「ぐつ! このおお!」

「あ、ヤベ」

止めを刺しきっていなかつた。俺の陽炎の足元に仰向けになつている不知火・壱型丙が、唯一稼動出来る左手に持つた87式突撃砲のトリガーを引く。

急いでこちらも構えて直後に発砲。

足元の不知火・壱型丙が完全に機能を停止した。多分今頃、中の衛士は俺に対して毒突いてるだろう。と言うか焦つて120ミリを撃つてしまつた。近距離で120ミリはオーバーキルすぎる。しかも爆風で飛んだ破片が俺の陽炎に何箇所があたり、小破判定ができる。開戦初めての損傷が誤爆つて……神官司教官にバレたらどんなペナルティを出されるやら。

「……〇S様様だな、こりや」

模擬戦中なのに俺は興奮や殺氣立つてもいなかつた。理由は簡単。伊隅大尉にショックを受けて逆に冷静になつてしまつた。あの人、俺の機動を真似して、出来ている。夕呼先生が俺の機動データを渡したんだろうけど、それにしたつて短期間であそこまで出来るのは……。どれくらい努力したのだろうか? 目の前には何時ぞやの自分が相手をおちくりながら飛び回っていた。お蔭で俺は伊隅大尉

のフォロー役に徹する事になった。さすがにまだ、伊隅大尉も出来るようになつたばかりらしく、多少危ない所がある。俺はその隙を相手に狙われないように牽制射撃。俺の動きは俺が一番解る。フォローのタイミングは自然と合わせられた。

「後、二機だ！一気に決めるぞ、フォローを頼む！」

「了解です！」

伊隅大尉の陽炎が廃墟の壁を蹴り進みながら、エレメントを組んでいる2機の不知火・壱型丙へ迫る。俺は伊隅大尉と距離を保ちつつ牽制射撃を行う。伊隅大尉は弾が切れたのか87式突撃砲を放棄し、陽炎の背中からブレードマウントを起こす。長刀を両手に握り、ブレードマウントのリップに長刀を固定しているボルトが炸薬して、勢い良く長刀を目の前の不知火・壱型丙へ振り下ろす。その瞬間を待っていたと言わんばかりに、相手はもう1機の所まで後退し、前衛の背後に控えていた不知火・壱型丙が目の前で前屈みになつている伊隅大尉の機体を蜂の巣にしようとする。そこで、87式突撃砲を両手に持つ俺が120ミリを2機の管制ユニット目掛けて撃ち込んだ。

(……少しは射撃の腕、上がったか？)

俺から見て、綺麗に穴の開いた2機の管制ユニットを見ながらふと、そう思った。

冬になると、暗くなるのが早くなる。武家屋敷の門の前で夜空を見上げながらそう思つ。

「無事に終わったな、白銀」

後から声をかけられ振り返る、伊隅大尉だ。顔が遠足を楽しみにする子供の様に笑っている。温泉が楽しみでしうがない様だ。確かに好きな人にこれから会えると言うのは嬉しくなるもなるだろうし、気持ちちは解る。

「ですね、伊隅大尉。夕呼先生は？」

「なんでも〇〇の事で色々話しているらしい。先に今日の宿に行け、だそうだ」

そう言って右手を開いて親指と人差し指で輪を作る。 値段交渉かよ。

「護衛は良いんですか？」

「なんでも、知り合いの課長がやつてくれるらしい」

知り合いの課長？ ……ああ、鎧衣の親父さんか……。いや、危な

くないか？ 普通に……。ん……でも、あの天才が問題無いと言つたんだ、信用しよう。

「早く行くぞ！ 白銀！」

「あ、待つてください！ 伊隅大尉」

取り敢えず目標は達成したし。温泉で疲れでも取ろう。

ああ、それと。

温泉饅頭、あるといいんだけどな。

## 距離＝関係ない（後書き）

2ヶ所修正しました。8月25日

どうもです。君が望む永遠をプレイ中のもんたです。慎一が良い人過ぎて惚れました。フォロー上手すぎです。

えーと実は今回、特に公式小説を読んでない人は解らないと思う設定を入れました。EX純夏 天然ESP説です。公式小説の二巻でそれっぽい部分があつたので思い切って入れちゃいました。あくまで、それっぽい部分なので入れるのはどうなんだ？ つと思う人がいると思いますが、個人的にはEX純夏が天然ESPだつたら色々な所が納得出来たので入れました。因みに、自分はEX純夏のESP能力はそんなに無いと思ってます。霞よりは下かと……。

ではまた次回に。

## 宿の中で=待つている

(「おー……広いなー）

今日は驚く事が多いな。ある程度の予想はしてたけど、温泉宿ってこんな広いもんだったつけ？

広々とした玄関を見渡す。漆塗りと言つやつのかどうかは知らなけれど、床は黒く輝いていて高級感が静かに漂つていて。ホントに今日はここで泊まるのか……。辺りを眺めてみる。おっ 売店発見！後でチェックだな。

それにして本當に広いな……。生まれて始めてかもしけな

そう思つた時、目の前が一瞬だけノイズ交じりの映像を流す。まりもちゃんを筆頭にみんな酔つ払つていて。「うわ、お前ら、年頃の女の子達がそんなエロイ格好をするんじゃない。胸が見えてるだろうが。

(……懐かしい、のか？……違うな……今は……)

直ぐに視界が元に戻り、自分の手を見つめる。『ひひひひした男の手だ。

改めて自分の存在を確認する。今のはきっと、この体が状況に反応したんだろう。……少しだけイラつく。なんだろう……この感情は……自己嫌悪ってやつかもな。あの時の俺はある意味、大馬鹿野郎だ。良く言えば青春してた、悪く言えば目の前の問題から目を背け

てた。んで、結局は…………周りに追い込まれて、やっと決めた。  
記憶には無い、客観的な情報だけを並べる。

今は遠い自分に、軽い殺意を覚えた。

そして、それと同時に自分の事を棚上げしている事に気付く。  
本音はどうやら自分が残り物である事に劣等感を感じているらしく。

(……まだ、ガキっぽい所があんな、俺)

他の世界の自分を気にしたつてしようがない。伊隅大尉に声でもかけて、気分を変えよう。俺は隣に居るであろう伊隅大尉の方へ向いて話しかける。

「伊隅大尉…………って、あれ？ どこ行つたんだ？」

辺りを見回す。…………あ、居た。あそこは……受付か？ もしかして彼氏（予定）の事を聞いているのかもしれない。近づいて様子を伺う。受付に居る従業員の人との会話のやり取りが聞こえた。

「あの、この伝票をここに持つてくるよう上司に言われたのですが

…………」

そう言つて、宅配物等によく付いている伝票を受付の人へ差し出す。なんだ？ 夕呼先生は伊隅大尉に何か頼んだのだろうか。受付の人へが伝票を受け取ると受付カウンターの奥へ入つて行く。暫くすると、大きいダンボールを台車に乗せながら戻ってきた。……人が一人、入りそうなダンボールだな…………。なんだろ、今後の展開が読めて体が先に脱力した。

受付の人が苦労して、ダンボールを黒光りする床に降ろす、と言うか落す。黒光りする床の上に在るダンボールはなんだか不自然だ。今度は伊隅大尉がそれを運ぼうとするけど、余程重たいのか少し苦労している。……意識が無い人間はとても重いと言う話を聞いた事がある。

「あ、白銀！　この荷物を部屋まで運ぶのを手伝ってくれないか？」

伊隅大尉が漸く俺に気付き声をかける。……いや、部屋に運ぶより……。

「あの……伊隅大尉。その箱の中身、確認した方が……」

「それは駄目だ、このダンボールは部屋に運んでから開けるように香月博士に言われている」

「ああ、そう言えばこの人、かなり真面目な人だったな。……模擬戦の時に任務の事を瑣事つて言つてたのは……恋は盲目つて便利な言葉だよな。

取り敢えず、早く開けてあげよう。生もの注意とか、扱いが酷すぎる。

「それは俺が夕呼先生に説明すので気にしないで下さい。今は人命優先です」

「人命？　つて、おい！　白銀！？」

伊隅大尉の制止を無視してビリビリとダンボールに封をしているガムテープを破る。箱を開けると

「……ま、正樹？」

見るからに一枚田そつな男性が体育座りでダンボールに詰められていた。息はしているようなので、一安心。……意識を失っているようだが。

「し、白銀！？」

伊隅大尉は取り乱すのを必死で押さえているらしい、顔から凄い量の汗が流れているけどな……。

「取り敢えず部屋まで運んで、介抱してあげましょ。部屋まで運ぶの、手伝ってください」

おもむろに、男性の右肩を背負い持ち上げる。……背、俺よりあるな……。俺、結構背が高い方だと思つてたのに……。あ、今俺、15歳じやん。そりや、背低いよな。今からなら身長はもっと伸びますが出来るんじや無いだろうか……。この時勢にカルシウムは沢山摂れるか気になるな。

伊隅大尉が暫く呆然した後、正樹と呼ばれる男性の左肩を背負い。直ぐに冷静になれるのは流石だ。

「白銀……なんでお前は冷静なんだ？」

「もつとも質問です。

「……被害者歴、長いですから……」

「……ああ……わつか

これで通じる所を見ると、この人も俺と神富司教官の同類らしい。

……今度、被害者の会でも作ろうか……。

会の名前は「狐につままれた」で。……多分、俺は近い内に逆の立場になりそうだけど。

「……ふう」

正樹さんを和室に運んだ後、俺は伊隅大尉に気を使ってそっと、退室した。……ご武運を祈ります。

さてどうしようか？ 夕食はまだ早いし、かと言つてお土産を買ひに行くには早い。……温泉にでも行くか。特に意味も無く廊下から見れる中庭の景色を見つめる。外はすっかり夜だ、昼間なら中庭の景色を楽しむ事ができたかもしねりない。

(……人、か?)

中庭にポツンと一人夜空を見上げている人物が居た。温泉に入つたのか、浴衣を着ている。

特徴的な白い紐で青い長髪を結っているあの、意志が強そうな瞳は

『愛する者の手で……そなたに撃たれて逝きたいのだ……』

(……………行つてみるか)

心臓は割りと落ち着いていた。

(……黙つて抜け出したのは不味かつたな……)

中庭で夜空を見上げながら、自分の犯してしまった失態に毒づく。きっと今頃、月詠達は大慌てだろう。BETA侵攻の事で、気落ちしていた私の事を案じてくれた月詠には悪い事をしてしまった。せっかく自らの立場を差し引いて、今回の事を提案してくれたのに。

でも、抜け出してしまったのはそれなりに理由がある。

(今の私ですら、BETA侵攻でこんなに日本の未来を案じているのに……きっと、あの人は……)

それを思うと自分の無力さがとても悔しい。こんな所で現を抜かしていられない。何故、私は無力なのだろう。　　あの人の支えになりたい。

自分と対の名を持つ、あの人の

(……姉上)

そう呼ぶ事を許されない人の支えに。

「おー」

「一」

急に後から声をかけられ慌てて振り返る。

「だ、誰だ！」

そこに居たのは

「……よし

私と同世代くらいの少年だった。

さて、若者らしく勢いでここまで来たけど……。

（何も考えてねえな……昔話も……こいつが衛士になつてからの方が良いだろ？し……）

懐かしい顔をしげしげと見つめる。俺の知つている冥夜よりも少女らしさがそこには有つた。この時期のこいつに会うのは初めてだから新鮮さを感じる。

「……私の顔に何か付いてるのか」

警戒心剥き出しの表情をされる。そりやそうだ、赤の他人に行き成り話しかけられたら誰だってある程度は不審に思う。念のため俺も浴衣に着替えておいて良かつた。軍服のままだつたら、口調は良くても警戒はもっとと高くなるしな。

「……いや、こんな所で一人で何やつてんだろうと思つてな

「そなた、初対面のくせに馴れ馴れしいな……」

呆れた口調で言われてします。スマン、こっちは初対面じゃないんだ。

「馴れ馴れしいのは俺の癖みたいなもんだから諦めてくれ。……まだ、名乗つて無かったよな。白銀武だ」

「……御剣冥夜だ」

名乗り返す辺りに冥夜らしさを感じ、ホッとする。

「……それで、私に何のようだ？」

「だから言つたる？ こんな所で1人辛氣臭そうにしてたら誰だつて気になるぞ」

もつともらしく理由をこじつける。本当はただ、何かの会話をしたいだけ。今を逃したら、次は3年後だ。

「……お節介、つと言われた事は無いのか」

「ある。あるけど、それが俺の持ち味だ」

俺がそう言つとまた呆れた顔をされる。 变な奴に絡まれたつて感じだ。少し寂しい。ああ、やつぱり。俺を好きつて言つてくれた冥夜は 僕が殺したんだ。

「……どうした、白銀」

今度は急に冥夜に心配される。 顔に出しすぎたか。

「……悪い、昔の知り合いを思い出していた

「……そつか」

深く突っ込んでこない所にまた、冥夜らしさを感じる。まるで時間旅行で過去に行っている気分だ。遠い懐かしさが俺の胸にどんどん入ってくる。前の世界の冥夜との思い出が、一つ、一つ、明確に蘇ってきて

ヤバイ、これ以上は……泣く。

「冥夜！」

顔を見られない様に後を向き久しづりの名を口にする。まだ泣くな！

「ど、どうした！ 白銀ーー？」

俺の態度が急変した事に驚いたんだろう。名前を呼んだ事に関してはスルーされる。

「3年後に……会おう」

直後に走り出す。冥夜にして見れば、訳が解らない事になつて悪いけど……。

とても、とても、とても

嬉しかった。

冥夜との再開から暫く、温泉で今日の疲れと冥夜との再開の涙を流す。

竹で作られた仕切りの向こうからはなんだか甘ったるい男女の会話が聞こえる。作戦は成功のようで、伊隅大尉。

(まあ……壁から聞くには……良いとして……)

問題は……

「……やつぱり露天風呂には日本酒よね~」

平然と男湯に入っている夕呼先生が目の前にいる事だ。

「あんたは何でそう、平氣で男湯に入れるんですか！？」

久しぶりに激しいツッコミを繰り出す。いや、ホントスゲーコメント。

「なによ、いいじゃない。減るもんなんて無いんだし」

「間違い無く夕呼先生の中で人としてのモラルが減つてます！」

少なくとも日本の女性は男湯に堂々とは入らない。混浴にだつて入るのは基本的にご年配の方々だ。

(チクショウ！ タッキまでの俺の感傷を返せ！ ……つて、待て  
よ？ この人……)

「……冥夜が居る事、知つてましたよね

「……怒る？」

「別に怒つたりはしないですよ、それで怒るのはハツ当たりになります。…………ありがとうございます」

冥夜に再開できたのは嬉しかった。今日はあんなふうになってしまつたけど、3年後には必ず会える。今はそれで良い。再び会えた時には誇らしく、笑いながら戦友達の事を語つてやろう。あいつらの事を……。

「や、どういたしまして……」

何時も通りに素っ気無く返事をする。この人が他人に今の態度以上を取るのだろうか？ 簡単には……想像出来ないな……。

「にしてもアンタこんな美人が目の前で裸なのになんてそんな素面なのよ？」

夕呼先生が文句をタレながらお猪口に入れた酒をチビチビと飲む。

別にまつたく平氣と言つわけじゃないけど、意識しなければ特にそれが程興奮しないと言つつか……。 昨晩の純夏が脳裏に浮かぶ。

「女性の味はもう知つたって事で……」

「……アンタからその反応が返つてくるとはね……ちひ」

「舌打ちしないで下せこよ……」

「お酒、飲む？」

「次の日起きたら一緒に布団……つて事になりそなんで却下です

……もちろん実際には、何も起きてないんだろうけどな。下手にこの人に弱みを増やされちゃ敵わん。

純夏と霞は今頃何をしているんだろう？

「純夏と霞、大丈夫ですかね？」

独り言半分に夕呼先生に尋ねる。まあ、この人の事だから何かしらの手は打つて有るだろ？ その事に関しては、運命共同体になつた今なら信頼できる。

「そんなに心配しなくともちゃんと護衛は付けておいたわよ。……なんだかアンタ、2人の保護者見たいね」

「保護者ですか……まあ、良いですけど」

実際には少し違う。俺の為なんだ。失くすのがとても恐いんだ。あいつらを……あいつを失つ事が……。もう一度と手を離さない。そう決めて、誓つたんだ。俺自身の為に。

「……にしても」

急に夕呼先生が顔をしかめ、壁に向ひつゝ目をやる。……ああ。

「声、聞こえすぎじゃない？」

「……まあ、2人とも若いですから……」

漏れた声を聞き流すのは、ちと辛かつた。

タケルちゃん。私今、とってもピンチです。

「純夏さん……」

……何故かベッドの上で靈ちゃんに押し倒されています。

「あ、あのー靈ちゃん? これは……どうこう状況かな?」

「今日のお風の時に聞かせて貰つて……言いました」

そう言つて私の覆いかぶさつている靈ちゃんの表情は少しだけ頬が染まっていた。ウサ耳を外した長い銀髪が私の顔に掛かつてくすぐつた。無駄かもしれないけど、誤魔化して見る。

「な、何の事かな~」

押し倒されている私は田を背けながら吹けない口笛を鳴らしたりとすむ。……ピューフー、ピューフーと虚しく空気が口から出る。

「…………解りました、純夏さんがそのつもりなら……」

「へ？ か、靈ちゃん！？」

靈ちゃんが急に私のパジャマの捲り私のおへそが丸見えにされる。直後に靈ちゃんの顔が無表情のままキラーンと光った気がする。

「……体に聞きます」

「えええ！？ ちよ、か、靈ちゃん！ 待って、ひゃん！？ あ、そ、そこ触られたら……んッ」

「……武わふせいじをビリしたんですか？」

それを言われて一瞬だけ思い出す。何故だか、靈ちゃんの手がタケルちゃんの手と重なり更に明確になってしまつ。更にそれに釣られて気持ちがドキドキし始めて、体が熱くなる。

(ああ、あわわわ！ う、これ以上されひやつたら…?)

「れ以上は危ない、そう思つた時。

「…………か、靈ちゃん？」

私の体を触っていた靈ちゃんが手を離す。田はしつちに向つてるんだけど焦点が合つていな感じだ。私は恐る恐る様子を伺つ。

「…………わね」

「靈ちゃんー。」

靈ちゃんが急に表情を真つ赤にし、軽い体がぽてつと私の上に落ち

る。本当に軽くしてやめたじ飯を食べてるか心配になつた。

(えええっと……刺激、強すぎた…)

（ひつや、自分が思ったよりも明確にしていたらしく。無意識つて恐い…。取り敢えず、どうひつよつか…？

(……よし)

今日までのませ 露ちゃんを抱き枕にして寝よう。

やつかりて露ちゃんの軽い体を抱き寄せる。じとじと細いのに肌はツルツルして、柔らかい。

（可愛いな……ふふ、なんだかお姉さんになつた見たい）

れて、私も黙りて落ちる。明日またと

貰い田になるよね？ タケルちゃん。

宿の中で=待つこと（後書き）

どうも、もんたです。今回は冥夜初登場回になりました。個人的に  
はちょっと無理矢理感がありますが、そこは……ロマンでお願いし  
ます。次回は……ダダ甘しまくりますぜ！

## 夢覚めて＝現実で

声が届かない。

タケルちゃんの方へ向かって大声を上げてみる 気付いてくれない。

こんどは私を閉じ込めているシリンドラーを叩いて壊そりする壊れない。

私は緑色に光る液体の中で必死に叫ぶ。

『 いい間に居るよ、気付いてよ、早くここから出して、お願いだからー。』

タケルちゃんは気付いてくれない。色々な女の子がタケルちゃんの傍に居る。……出れない事とは別の気持ちで恐怖と焦りを感じた。

『 お願い、行かないで！ 私を独りにしないでー！？』

今度こそシリンドラーを叩き割つてやるつと手を振り上げよつとして気付く 自分の手が無い事に。

今度は声を出さうとする 声を出す口が無い事に気付く。

頭の中が混乱に染まっていく。なんで？ なんで！ なんで！？

シリンドラーの反射で見えるものがある。……人間の脳味噌と脊髄だ。シリンドラーの中に一人？ ふかふかと漂つていて。こんな狭いシリ

ンダーの中には私以外の人は居ない……。じゃあ、私の目の前にあるこの脳味噌と脊髄は……わた、し?

意識がその場で果然としてしまう。…………無いはずの視覚がさら  
に私を追い詰めた。

タケルちゃんが他の女の子と

それをじっと見つめる。頭の中が今度は痛くてグチャグチャしていく、何か黒い液体が湧き出て私の気持ちを満たして来た。

嫌だ。

いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ。

**嫌だ！！**

氣付いてよ……。一生のお願いだから……。

『私に気付いてよ！！』

世界が……。  
そつかりて強く願ひ。やつすると

そこで漸く、今日の悪夢から目を覚ました。

「…………

無言でベッドから体を起します。…………最悪の日覚めだ、せっかく今日はタケルちゃんが帰つてくれるのに。寝汗でパジャマがグツショリと濡つていた。ううう……汗でパジャマが胸に張り付いて気持ち悪い。くつきりと見える胸のラインがなんだかとてもエッチに見える。…………シャワーでも浴びに行こ。

「…………あれ？」

立ち上がりうとじて、パジャマの袖を誰かに両手で掴まれているのに気付いた。…………靈りやんだ。

「…………クー…………スー…………」

寝ている姿はとてもあどけなくて、さつきまで殺伐としていた私の気持ちを和らげてくれる。起じれないよつて静かに袖を掴んでいる両手を放す。

「んー…………

(あ、…………起じつけやつたかな?)

「…………一ンジンは…………嫌い、…………です、…………許して、…………純夏さん…………」

今度は布団に抱きついて呻き始めた。…………どうやら私とは別の種類の悪夢を見るらしい。もしかして、夢の中では私が靈りやん

を苛めているのだろうか。 少しだけ、ムツとする。 そう言えれば昨日は露ちゃんの体が軽すぎて心配になつたんだった。……うん、後で食べさせよ。

露ちゃんの事で一段落つゝと悪夢の内容を思い出す。 色んな意味でメチャクチャだつた。 内容は支離滅裂だし、実際の事とは大分違つしで、もうどうすればいいのやら、だ。

「…………」

屈託した自分の気持ちに堪えられず、自分の体を抱き締める。駄目だ、自分で自分を抱き締めても意味は無い。 抱き締めて欲しい。

「…………タケルちゃん」

この世で一番愛おしい人の名を呟いた。

「…………ハア、私つて…………今日は田一杯甘えるつもりだつたんだけどな…………」

知り合いの彼氏とかと会つてなんかキマズイよな。

「…………どつも、始めまして…………」

「……始めまして……」

昨日、めでたく伊隅大尉の彼氏になつた人 正樹さんと挨拶をする。何処かぎこちないのは、昨日の初対面のせいだろう。因みに温泉で漏れた声を聞いていた事については黙つておく。言つたら間違いなく、唯でさえ気まずい空気が余計気まずくなる。

「えと、俺は……夕呼先生、正確には伊隅大尉の直属の上司、香月夕呼の手伝いをしている者です」

次に自己紹介をする。初対面なんだし、この位が丁度良いだらう。

「ああ、宜しく。俺は前島正樹、趣味は写真。所属は……今は何て言えばいいんだ？」

正樹さんが途中で自己紹介を止めて、悩み始めてしまう。改めて顔を確認する。見た目は俺より少し年上と言う感じ。身長は高く、顔立ちはキリッとしていて、カツコイイ。伊隅大尉が惚れるのも納得だ。それにしても、確かにこの人は今後どうなるのだろうか？ 見た感じからすると既に何処かに所属している筈だし……。

「正樹！」

俺の背後から陽気な声が掛けられる。伊隅大尉だ、無邪気な笑顔をして笑っている。……そこまで無邪気に笑うとは……。そう言えば甲2-1号作戦前の夜では途中で様子がおかしかった様な気がする……。きっと、正樹さんの前では俺が見た事が無い伊隅大尉になるんだろう。

「さ、車に乗りましょ」

「え？ わ、オイ！」

伊隅大尉は正樹さんの腕に抱きつくと、正樹さんを引っ張つてそのまま玄関へ向かつてしまつ。……俺には気付いていない様に見えた。なんだろ……この孤独感は……。

「ホラ、さつさつと車に乗るわよ」

今度は正面から夕呼先生がやって来る。アンタを待つてたんだしょが……と言つても聞いてくれないので、その事については黙つておく。なので変わりに質問をする。

「正樹さんはこれからどうするんですか？」

「んー？ 取り敢えず伊隅に面倒見させて……後は……伊隅の好きにさせましょう」

「それ……良いんですね？」

なんか投げ遣り過ぎないか？ つか、正樹さんがんまりだ。できれば男女平等を主張したい。

「……私には遺る事が沢山あるのよ」

それだけ言つと、さつさつと先に言つてしまつ。夕呼先生にとつて伊隅大尉は右腕と言える人だ。……今回の事は夕呼先生なりの労りなんだろうな。

あ、そうだ。

御土産、買わなきゃ。

……私には絶対無理です。勝てる気がしません。

「…………」

それは私の目の前に己の存在を誇示し、自己主張していました。

それはとても大きく、太く、赤く、所々に中心の黄色い輪に集まるかのように黄色い筋が伸びており、合成バターによつて不気味に光っています。私の口では言い表せない威圧感があります。でも、それを倒さなければ私には未来がありません。……壁を超えないければいけない時が私にも来たようです。

「…………！」

覚悟を決めて手にしているフォークをそれに突き刺します。刺した所からそれに浸み込んでいた合成バターの汁が滲んできました……気持ち悪いです。

「……ハア、ハア……ハア……」

知らない間に私の手が冷や汗で湿っています。それを見て更に緊張感が高まります。……ガンバレ、私。後は……口に……入れる……だけ。

口に……入れるだけ？　違う。

口の中に入れてこそ、本当の鬪いです。口入れた瞬間にそれは私になんとも言えない不快な甘さと食感を与えてくるのですから。作戦は……嚥まずに……飲み込みます！　一嚥みもしてやるものか……です。私は作戦の準備をする為に水の入ったコップへと手を伸ばします。

「飲み込んで駄目だよ、靈ちゃん。ちゃんと食べれるようにならないと」

「あ……」

戦局が一転しました。私を監視している純夏さんが、有りう事か水の入ったコップを私から取り上げてしまいました。……私、の、希望、が……。絶望……です。望みが断たれました……。もう……私は……終わりです！　胸が絶望に染まつてきます。

ええ、解つてます。　諦めちゃいけない事ぐらい。　  
だって私の好きな人は何時も……何度も……どれだけ弱音を吐いたって、その度に色々な人に背中を押されて立つて……。だから……

……私も……。逝きます！

「おーい！ ただいまー！ 御土産買つて来たぞー」

…………。

また今度にしましょ。席を立ち上がり声の方へ駆け出します。  
逃げるのではあつません。戦略的撤退です。

「あ、じりー！ 霞ひやーん！」

後から声が聞こえたのも気にしてません。……すみません純夏さん、今  
田の一番は私です。……それにどの道、後で……。

夕呼先生達とは別れた後、俺は真っ先に食堂へ向かった。……別れ  
際の正樹さんの助けを求める視線を俺は忘れない。時間は丁度お昼。  
純夏達がそこで昼食をとっている筈だ。……にしても、御土産  
はこれで良かつたのか？ 時間が無かつたのと品物が極端に少なか

つたのでテキトーにしちゃつたけど……。

両手一杯に手提げ袋を提げながら食堂を進んでいく。途中で幾らかの視線をあびるけど、そんなのはどうでもいい。早く会いたいっていつ気持ちの方が圧倒的に強かった。更に奥に進むと、探し求めた顔ぶれを見つけ自然と笑顔になる。

「おーい！ ただいまー！ 御土産買つて来たぞー！」

気づいた時には後の祭り。何時の間にか向こうに叫んでいた。声を上げて数秒後、なにやら小さい影が俺の方へ駆けて来る。その足取りはとても不安定で、走る事を覚えたばかりの子供みたいだ。霞……転ぶなよ？

「お帰りなさい、武也…… もや」

「ただいま、霞。帰つてきたぞー！」

今の霞が可愛かつたからつい俺の所に来ると同時に持ち上げてクルッとその場で一回転してしまう。そして、手を上げた勢いで大量の御土産の入った手提げ袋が体に当たる。……うん、痛いな。

「お、降ろして下せー。もう…… そんなに子供じゃありません」

ありや、頬を染めて恥ずかしがりながら子供扱いするなと霞に怒られた。いつ言う所が子供らしい…… と言つたらなりにやらグーを貰いそつなので遠慮しておへか。

「ハハ、悪い悪い。ほれ、御土産だ」

靈を降りじてから袋の中に手を突っ込んで渡すものを取り出して差し出す。……喜んでくれると良いんだけどなあ。

「……風鈴？」

「オウ、よく知つてたな。そうだ、風鈴だ」

靈に買つてきたのは風鈴。ククク……季節はずれと言つ事なれ、この風鈴なんとウサギのデザインが施されているのだ！ 陶器で作られた白いボディに可愛らしいウサギのペイント……これを見た時に直ぐに靈の顔が浮かんだんだよな。

「……ウサギなんだ……」

靈は風鈴を手に取りながら田を輝かせている。喜んで買つたみたいで何よりだ。……にしてもなんでこんな季節外れの物を売店に売つていたんだらうへ。買つた俺も俺だが。

「あ、そりです……武さん……」

風鈴を一通り眺めて満足したのか、顔を一いつ瞬間に向ける。靈の田の真剣さを見て考えを切り替える。

「どうした？」

「耳、貸して下さる」

「あー…………」

『靈ちゃんを追いかけよつとしと…………体を止めた。

帰つて來た。一瞬体が飛び出しちやうになるナビ…………。

『私に気付いてよーーー』

……あれは唯の夢だ…………でも…………や、思つ所は…………やつぱり…………あるんだよ…………。

立つたまま俯いて、下を見る。下には規則的に並んでいる硬いタイルしか見えない筈なのに、私の足元が酷く不安定に歪んでいる気がした。

(恐い……)

……兎に角、今はこの場を離れよつ。このままタケルちゃんに会つても心配させてしまつ。運良く今日は午後にやる事ないし、どこかで1人落ち着くよ。もう……タケルちゃんの負担にはなりたくない。

(今は靈ちゃんと話してゐみたいだし……抜け出すなら今の内に……)

…（

私は水月先輩達にも見つからない様にそーっと歩き出す。うん、バレない。バレない。ダイジョブ、ダイジョブ。

「オイコラ、ばれてるぞ」

「わひや！？」

いきなり頭を後から驚掴みされる。手にはかなり力が籠っていて…

……痛い！ 痛い！ イタイ！？

「純夏よ、せっかく俺が帰ってきたのに何処へ行こうと思つのかね？」

あれ？ あれれれ？ な、何がどうなつてゐのさ？ セツナまで霞ちゃん」と話してたんじや…。

「あ、そうだ、水月先輩。これ御土産です、孝之先輩達と一緒にどうぞ」

私が訳が解らずワタワタしている間にタケルちゃんは水月先輩に御土産袋を差し出す。水月先輩は私の事は特に気にせず喜んで受け取る。

「お、気が聞くわね～。実は最近、知らない間に誰かさんが抜け駆けしてた見たいで困つてたのよねー。出汁に使わせて貰うわ

「み、水月！？」

水月先輩が一矢付いた表情で言つとそれを聞いた遙先輩が途端に顔を赤くする。どうやら何か進展が有つたらしい。少し気になる。

「まあ……その事については仲悪くならない程度にお互い頑張つてください。んじゃ、俺は純夏を貰つていきますね」

「ハイハイ、」さあやつさん

「えー？ ちよつと、タケルちゃん何言つて……や」

私の体が一瞬中に浮く。びっくりして田を瞑つてしまい倒れそうになる。このまま転ぶと思つて痛みを覚悟した。

「よつヒー。」

「……ふえ？」

あれ？……痛くない？ と言つた。お姫様だつこわされてるー。?

ど、どう聞つ事？

「それじゃ、失礼します」

「あんた達も程ほどにね～」

なんでみんな私を無視して話を進めるのー！？

「水月、武君……凄かつたね」

「うん、私も驚いたわ……まあ、でも一安心じゃない？」

「そうだね、純夏ちゃんなんだか、朝から表情暗かつたし」

あの後、純夏をお姫様抱っこしたまま部屋まで連れて来た。周りの視線は……きつかったな、流石に。

「なんで無理矢理連れて來たのさー。」

……なんだか久しぶりの脹れつ面だ、やつぱり白昼堂々のお姫様抱っこは恥かしかつたらしいな。

「お前だって俺がせつかく帰つてきたのにその顔は無いだろ? よー。」

ちよつと非難がましく言つてみる。反応を見るためだ。

「……嬉しく無い訳、無いじゃなー。」

純夏はばつが悪そつに顔を俯かせる。……うん、やる事は決定だな。

「……………」

「……………」

純夏の隣に腰を下ろす。拒否の仕種は無い、無いって事は……傍に居て良い、居て欲しいって事だろ?

「ほれ、こっち来い

「…………うん」

純夏を抱き寄せて俺の膝の上に座らせる。何時もより少し、体温が低い。思わず抱き締める腕に力を込めた。暫くすると、純夏の方も俺の腕に手を添えてきた。添えられた手は冷たくて……丸で……何かを確かめる様に必死に見えた。

「…………ふえ…………ツク…………ハツ…………ツ」

また暫くすると純夏が声を殺して泣き始める。別にもっと声を出しても構わないのに……変な所で意地張りやがつて……。顔を純夏の頭へ摺り寄せる。

「…………ただいま、純夏」

「…………お帰り…………ツなさい…………」

口を耳に近づけてそつと囁く、純夏はポロポロと零のように涙を流しながら返事をしてくれた。今度は軽く、純夏の髪にキスをした。やっぱり純夏を一人には出来ないし、俺もこいつから離れるのは不安だ。

……一先ず純夏が落ち着くまでのままでいよ。

「なんだか色々と……ごめん」

「うん？ 何の事いってんだ純夏。俺は俺がしたい事、しただけだぞ？」

「……迷惑、かけちゃった……て、っわ！」

びしりとこいつのおでこに少し強めにテコピンをきます。何でこいつは当然の事に謝つてんだ？ 人が他人に迷惑をかけて生きていくのは当然だ、害を与える事とは違う。特にその人にとって身近な人なら尚更だ。

「痛つたい～」

んで、ここで透かさず、おでこにキス。

「あつ……なんだかタケルちゃんに主導権取られつ放しな気がする

「あ……」

そつぱつとおでこを摩る。でもと、今のお前じや俺に素直に甘えてこれないとと思うんだが……。それにホラ、これからはもっと直接的に行くつて決めたし。……にしても、アレだ。こう、体を密着させ

たままでいると……その、純夏の……が、俺の……に。で、ホラ、俺も健康優良日本男児な訳で……。

「…………あ…………タケルちゃん…………」

ナニかに気付いた純夏が顔を赤くしながら俺の方に顔を向ける。何と言つたか視線が妙に艶やっぽくて、何かを待つてるようにも見えて……。潤んだ純夏の赤い瞳が吸い込まれるくらい魅力的で……。

「あの…………その…………」

俺の膝の上でモジモジし始める。純夏の腰より下の所が俺のに当たつて快感を感じた。お、落ち着け俺、今日は優しくしないと駄目だぞ？ こう、もっと大人っぽく余裕を持つてだな……。

「…………する?」

「この時、完全に俺の理性は消えた。

どもっす、最近もつ少し書くのが上手くなりたい、そんなもんたで  
す。

今回は……その……R15のラインって、実際結構微妙ですよね、  
15禁は遊んだ事が無いです。

次回から明星作戦に入つて行く予定です。もつとも大した変化は無  
いので面白みは少ないでしょうが……。明星作戦と言えば公式で話  
がホビージャパンに乗つてゐるらしいですね。どしそう……。  
小説一話読むのに840円は高い気が……。立ち読みしてしま  
おつか……。

次回は少し時間掛かりそうです。

朝、冬の寒さに俺が寝ている布団の温もりが合わせてなんと言えない眠気が俺に容赦なく向かつて来た、起きる気力が失せて来る。点呼にはまだ30分位の余裕があるので少しだけ、冬特有の甘い罠に嵌つておく。…………ついでに。

「いいつ……」

俺の胸より少しだけ高い所に見知ったアホ毛が一本。ハートの形でゆつくりと左右に揺れている。何故か犬の尻尾を連想した。どうやら昨日は悪夢を見ずに安らかに寝れたようだ。

「んむ……タケル……ちゃん……」

自分の枕ではなく俺の胸を枕代わりにして、両手を俺の胸に添えながら寝ている。生憎、典型的な軍人の胸筋なので、寝心地は良くないと思つ。それなのにこいつと来たら……。

「なんでそんなに幸せそうなんだよ……」

純夏の顔は無防備過ぎるほどに微笑んでいる。それが俺に向けてのものかと思つと急に小恥ずかしくなつて來た。あー……やばい、俺はなんでこんな朝から惚氣てるんだ？

(せつ思いつつ、ちやっかり純夏を抱き締めてる)…………

自分の両腕を恨めしく思ひながら、純夏の背中に回してくる両手に

少しだけ力を入れて、もつと俺と密着させる。純夏の温もりと柔らかい匂いが数秒前よりも強く感じられて、なにか温かいものが俺の中で強く、ゆっくりと広がって行く。

ずっとここにいたい。ここを独り占めしたい。

そんな気持ちが俺の中で過ぎる。いつか戦いを終えて、純夏と一緒に俺の家に帰つて……。

夢を頭の中で描く。今の俺が一番欲しいもの、どんな手を使ってでも手に入れたい未来のイメージを明確にして行く。

「……絶対手に入れてやる」

寝ている純夏を起こさない様に声を潜めた。まだ時間は有る。今暫くはここでいるよ。

俺の宝物を両腕に抱いてまじめむ。

今日の朝、この時間は間違いない俺は……世界で一番の幸せ者だ。

「孝之さん

「どうした、白銀？」

俺はシコリーネータ内部の通信で孝之さんに話しかける。目的は、これから起きた事についての理不尽さを確認する為だ。……確かにどんな世界においても、新人は苦労を通して成長をする。特に軍なんかは殊更にそれが顕著だ。俺自身もそれは当然の事だと想つし、別に違和感は無い。

けどや……。

「なんで行き成りこんな事になつてんですかー？　今日は普通に中隊同士の演習の筈ですよね？」

「それは俺が聞きたいわ！　なんでお前の不用意な発言で俺と慎一とあと……なんだ、ほらー　伊隅大尉が連れて來た奴」

俺が起きた事の突拍子の無さに驚きながら孝之さんに不満をぶつかると、逆に不満をぶつけられる。と言つた正樹さんの自己紹介は今日の最初の時に済ませたじゃないですか、覚えておきましょっつ……。

「正樹さんですよ、孝之さん。って言つた俺、そんな不注意な発言しました？」

「……自覚無いのかよ……」

孝之さんの呆れた声が俺の入っているショミーレーター内部で響く。このままでは埒が明かないのに、数時間前までの自分の言動を呴きながら思い出してみる。言つたことは……。名前、やつと貰えた階級（因みに少尉）、出身地、それと……何か自分の特徴を話そうとして、これと言つた日常的な特技や趣味が無いことに気がついてこれではいけないと思つて。

「恋人がいますつて言つただけだしな……」

後はその時、この前正樹さんに撮つてもらつた純夏の写真を見せただけだ。自分の彼女を紹介するにあたつて、変な事は一切していい。

「それしかないだろ！　お蔭で向こうのむせぐるしこ先任共がブチギレで何故か『ドッキ！　男だけの大演習！』になつちまつたじゃねえか！？」

直後に今度は孝之さんのシシコミが飛んでくる。……なんだろ、なぜだからこ最近はシシコミ担当だったから妙に嬉しさを感じるぞ……。

「声に出して喜ぶなよー。」

おおー、またシシコミが来たよ……。わてはいつもこのに慣れているんじゃないのか？　孝之さんはなかなかの上級者と見た。

「慣れてるんですか、いついつ余話のやり取り」

「あーっと、そうだな。じつちかと言つと俺はふざける方だな……慎」と水月がそれにシシコミで返して、遙が偶に斜め上の反応をする

る

会話のやり取りが上手い人、もつと言うと人を楽しませる才能がある人は何かと人間関係で中心になる時がある。この人の場合もそんな感じじやないんだろうか。聞いたことから4人の日常的なやり取りを想像してみる。……なんか、これぞ青春って感じだな。

「おーい、2人とも。先輩後輩で仲良く会話するのは全然良いんだけどな、そろそろ始まるぞ」

俺の顎に付けているヘッドセットの所から新しい人の顔が投影される。そう言えば回線をオープンにしてたの忘れてた。今新しく会話に入ったのは慎一さんだ、孝之さんとは親友と呼べる間柄らしい。  
……同性の親友って少し羨ましいな。まあ、その分俺の隣には純夏が居た訳だけどな。

「作戦は如何する？ 孝之」

「作戦も何も……勝てる相手か？」

「……正直な所、あの人達相手にして引き分けに持つて行けたら、次の作戦は何があつても生き残れそうだ」

なにやら始まる前から諦め気味な2人。引き分けになれたら次は生き残れるつて……。A - 01部隊の人人が言うと意味が強く現実味を帯びるな。そういうや、ヴァルキリーズ以外のA - 01を全然知らない。……今はまだ沢山人がいるけど、3年後はどれくらい生き残っているんだろうか。

犠牲者を減らせるか？ 自分にそう、自問自答してみる。俺は

出来るか？

(どうだろな……)

正直に言つなら今この場に居る人達全員を死なせたくない。当たり前だろ？ 誰が好き好んで他人の死を望むものか。でも現実は違う、違うんだ。

誰も彼もが救える、そんな事はありえない。そんな目を背けたい現実を心が擦り切れる位体験して来た。選択しなきやいけないんだ、誰を犠牲にして、誰を守るか。誰を殺して、誰を救うか。答えは既に決めた、そしてその結果から目を背けない事も決めた。もう迷う気は無いさ、何度も自分の中で繰り返してきた答えだろ？ 止まる積もりは無いぞ。

「孝之さん、慎一さん」

気持ちの整理をつけた後、ため息を繰り返している2人に話しかける。2人は俺の顔を確認すると急に顔を引き締めた。目の色が変わつてているのは自分でも理解できている。

「勝ちますよ、俺たち」

自分で大見得を切つたんだ、勝たなきゃ格好がつかない。

「ここ最近、ずっとやっていた夕呼先生に渡される仕事を終わらせた私は『今日はもう鑑の仕事は無いから邪魔』と言われ暇なのとタケルちゃんに会いたいので、タケルちゃんがいる筈の戦術機のショミーレータ室に来た……」のは良いんだけど。

「へー、貴方が白銀少尉の彼女さん？」

「は、ハイ……」

「ねえ、ねえ、2人はどうやって知り合ったの？」

「あ、えと、実は子どもの時からずっと一緒に……」

「キャー！ それって幼馴染つてヤツじゃない！ ロマンチックー」

なぜだか私が来た途端に、モニターを真剣に眺めていた女性の衛士が波になつて私の目の前に集まつて来る。この人達の迫力に圧倒されてしまう。多分みんな娯楽に飢えてるからだと思うんだけど……。あ、それと女性にとつてこいつの話は大好物だった。

「どこまで行つたの、もつキスはした？」

「ええええー？ エと、あの、その、……」

ショートヘアの人が興奮気味にドストライクの部分を突いて來た。どうしよう……ホントの事は言えないよね、まだ私15歳だし……。

よく考えたら今の私って不良?

「お前らいい加減にしろー。鑑が困っているだろがー。」

波の向こうから伊隅大尉の怒鳴り声が響いた。その声を他の人達が聞くや否や蜘蛛の子を散らすように散ばつて行く。私はその慌しさとはに反対に一息を吐いた。

「悪かつたな鑑、部下達が迷惑をかけてしまった」

苦笑いをしながら伊隅大尉が謝つてくる。元はと言えば急に来た私の方が悪いんだから、伊隅大尉が謝る必要なんて無い。

「そんな、気にしないで下さい。急に来た私の方が悪いんですから」

「やうか? なら良いが……白銀に会いに来たんだろ?」

「はい。あ、でも無理なら別に……」

そう言いながら私は室内の様子を眺める。どう言つ訳か、タケルちゃんを含む男の人達の姿が見当たらない。衛士に男女別での訓練なんてあつたつけ?

「まあ、一応今は一緒に訓練中なんだが……少しあもしろい事が起きてな」

「おもしろい事?」

「男同士で先任と後任に分かれて勝負をしてるよ、最初は急な事で反対をしようとしたんだが……」

伊隅大尉は途中まで言つと、視線をモニターに向けた。モニターの中では戦術機が物凄い速さで駆け巡っている。きっとあの中にタケルちゃんが居るんだろうなあ。実感が湧くと無性に会いたくなつて來た。

「一体どいつ言う積もりかとデリング中隊の小隊長に問い合わせしたんだ、そしたらこう言われてしまったよ」

伊隅大尉は思い出しながら少し笑つてゐる。頬が少し赤くなつてゐる気がした。

「『伊隅ちゃんといい写真の子といい、こんなに可愛い子と付き合つてる連中がこの部隊とか酷すぎるだろ？だからちょっとくら扱いて来る。あんな連中が死んだら、美人が泣くかと思うと腹が立つ。ついでに先日出たばかりのうちに居た馬鹿2人もな』……だとぞ」

伊隅大尉は言い終わると、何かを誤魔化す様に咳払いをした。なんと言つか……私も恥かしいな……。このまま黙つてゐるのは私と伊隅大尉の精神衛生上好くないから、何か言葉を搜す。

「良い人なんですね、その人」

「そうだな……これは聞いた話なんだが」

伊隅大尉は少し目を閉じると何かを決めた様に口を開いた。変わつた顔つきで真剣な話をこれからするんだと解つた。きっと、今さつきの人の話なんだろう。

「今回の侵攻の時に奥さんと子供を亡くしているらしい」

「え……」

ある程度の予想はしてた。もしかしたらそんな話しなんじやないかと思っていた。でも、実際に聞くと心には予想以上の重たい石が載つてしまつた。私は黙つて伊隅大尉の続きを待つ。

「それにこれはまだ極秘なんだが、来年に横浜ハイヴに大規模な反攻作戦を開始するそうだ」

「…………それって、私に言つて良いんですか？」

「お前には私が与えられた情報を教えても良い様に言われている。もつとも、都合が悪い時は止められると思つが

なんとも夕呼先生らしい内容だ。都合の良い時は教えて、悪い時は教えない。恐ろしいほどに合理的で、本当は口ボソトなんぢやないかと疑つてしまつ。

「そして、その事はA - 0 - 1の各中隊長にまで伝えてある。だからあの中隊長殿は……」

「自分が鍛えられるつちに鍛えてやりたいって事なんですね。でもそれって……」

確かにこの部隊の人達は通常の衛士に比べたらずっと死より近い場所に居る。だから今の内について言つのは別におかしくは無いと思つ。けど、さつきの話を聞いた後だと……。

「次の反攻作戦で死ぬつもりかもしけないな」

ああ、やつぱり。変な事に、すんなりと理解してしまつ。きっと簡単に理解できたのは私自身も解るから。自分にとつて心の支えにしてる人を失つてしまつのは本当に辛い。自分にとつて一緒に居るのが長くなればなるほど、失つた時にはその時間と比例した傷で心を抉られてしまう。自分を形成していた要素を失つてしまつんだ、誰だつて不安定になつたり訳が解らないほどの喪失感を感じて自暴自棄になつちゃうよ。もしかしたら、その中隊長さんも同じ事になつちやつてるのかも知れない。

私が暗い顔をしているのに気づいた伊隅大尉は優しく笑う。……お姉さん見たい。

「言い出した私が悪いんだが、そんなに気に病むな。まだ、実際にはその反攻作戦の時には何をやるかは言られて無いんだ。だから心配するな」

「……そうですね」

嘘だと思つた。正確には伊隅大尉のそつ思つていたいと言つ意見を言われたんだろ？でも、私もそう思いたいな。嘘でも信じたい。

「……タケルちゃんと伊隅大尉は大丈夫ですかね？」

小さく口を動かして囁く。中隊長さんの話を聞くと、どうしても聞きたくなつてしまつた。私の声を聞いた伊隅大尉は目を白黒させた後また、優しく笑う。

「当たり前だ、鑑。私には死にたくない理由が出来たんだ。……正

樹と一緒に」

伊隅大尉は男性の名前を言つと誓つよつに田を閉じる。

(……正樹？ 誰だらう……)

少なくとも大切な人なんだとは理解できた。そつ言えば昨日は新しい人がどうのつて、タケルちゃん言つてたつて。なにか関係有るのかも。

「なあ……鑑、お前に尋ねたい事が有るんだが良いか？」

「はい、何でしよう」

あれ？ 伊隅大尉は視線を周りに泳がせて、なんだかそわそわし始めている。内緒の話なのかな？ 気付くと伊隅大尉の顔が気が付いたら赤くなっていた。年上の伊隅大尉には凄く悪いんだけど可愛らしく見えてしまう。

「その……なんだ、白銀と鑑は恋人同士なのだろう？」

「はい、そうですけど……」

「その、それで聞きたい事はだな……」

「はい」

また一段と伊隅大尉の行動が挙動不審になる。返つて田立つちやう気がするんだけどな。数秒間も「も」した後、漸く伊隅大尉は口を開いた。

「こんな事を聞くのは正直アレなんだが……耳を貸してくれ」

「あ、はい……はい、はいつでええええええええ！」？

……とんでもない事を言われちゃった。確かにそれをした経験は有るけど上手に出来たって訳じやないし、タケルちゃんもその時は別に無理するなつて言つてくれて軽く済ませただけだし。

「だ、駄目か！？」

「あの、その……あの時は私も見よう見真似だつたので……」

「それでも頼む！ 恥かしい話なんだが……私の今の立場上、こういつ話が出来るのは鑑しかいないんだ」

「伊隅大尉……」

とても真剣な目でお願いされた。……うん、決めた、私も伊隅大尉にはお世話になつたし。私とタケルちゃんが逃げた時、伊隅大尉に拾つて貰つてなかつたらどうなつてたか解らないもん。もしそれがタ呼先生の命令でも、私とタケルちゃんを助けてくれた事実は変わらない。

「解りました、伊隅大尉。力になれるか解りませんけど、手伝います」

「やつてくれるのか！？」 鑑

勢い余つた伊隅大尉が手を握つてくる。ここまで来たら後には引け

ないよね。

私、頑張るからね、タケルちゃん！

温もり＝所有者（後書き）

どうもです。念願のメカ本ゲット！ もんたです。

カツコイイですメカ本！ 戦術機のページは興奮しましたぜ！  
そして、そして！

メカ本のあるページは自分の精神を見事に削つてくれました。  
イレルナヨ。

今回は男性メインで書こうとしたら何故か純夏で締めてしまつた…

次回こそは……！

## 欲しい者＝あげる人

鑑を部屋から追い出した後、先程まで鑑にやらせていた物を自分の目で確認する。渡した時には余白だらけだった紙は見る影も無く、無数の記号と数字に埋め尽くされている。書かれている文字は丸みを帯びていたり、8が逆から書かれたりと、書いた本人の癖がよく見れた。

（短時間でのこの量……ある程度時間が掛かったのは手作業だからとして……やつぱり今の鑑は……）

まだ、繋がっている。他の世界の〇〇ユニット達と。リーディングとプロジェクトショーンは〇〇ユニット本体の能力なので今の人間の鑑では扱えていない様だが、この異常なまでの計算能力を見ると仮定が確信に変わり私の胸の中が狂喜に染まって行く。口から笑い声が湧き出す。使える！ 鑑純夏にはまだこれ程の利用価値がある！

きっと今の鑑には、〇〇ユニットだった時の因果が強く残っているのね……。それに〇〇ユニット自体も他の世界の鑑純夏に繋がっている。こう言う事象がおきるのは可能性としては〇じゃない！ どうやら鑑純夏はシロガネタケルだけじゃなく、私にとつても大切な物らしい。

どうする？ どう使う…？ 言つて見れば今の私には手元に量子コンピュータが有る様なものだ。使い道はそれこそ幾らでも……！

私だつてね、一応教師なのよ？

(……ツツー?)

気分が絶頂まで達しそうになつた時、私の中の教師である香月夕呼の記憶が邪魔をした。内心で強く舌打ちを突く。頭の中で自問自答の茶番が始まる。

今の鑑にそんな事をさせたら数時間も持たないわよ? 自分で解つてゐる筈でしょ。

(解つて……るわよ、だから、それを補つために体力を付けさせでんでしょう……)

それでも人間としての限界はあるわよ? 体が機会じゃない分、負担は大きいでしょ? う。

(何が言いたいのよ……)

自分で解つてゐるでしょ?

幾らか茶番を繰り返すと、片方の声が消えた。もう声を出してくる気はしない。取り敢えず落ち着き直そうと自分のソファに深く座りなおす。一息ついて落ち着くと、霞が私の事を見ているのに気が付く。……嫌われただろうか。

「博士……」

霞はこちちらを真つ直ぐな瞳で見つめる。少し前まではどこか漂つていた希薄な感じは鳴りを潜め、最近は自分をハッキリと出す様になつた。……本心を語るなら、嬉しく思う反面、名前と正反対な瞳に見つめられるのは後ろめたい物を強く感じた。

「何よ、霞」

何時も通りのなんと思つてないような感情を声に乗せながら返事を返す。憎悪を向けらるのは慣れている。

「私は……純夏さんとタケルさんの味方です」

「やう、別に良いんじやないかしら？ も、今日さもう上がりても良いわよ」

予想通りの事を言われ、予定通りの返事を返す。これでもう良いでしょ？ 霞は特に不満を言わずに部屋を出ようとすると、扉に手をかける所まで行くと振り返つて先程と同様にこちらを真っ直ぐと見つめる。

「……でも

なによ、まだ非難したい訳？

「博士は好きです」

「……もう行きなさい」

「ハイ」

今度こそ霞は扉を抜け、部屋から出て行く。出て行った霞が此方に戻る様子が無い事を確認すると、机に肘を付け顔を伏せる。

(まつもといい、白銀といい、鑑といい、あの子といい、どうして)

「私の周りには……」

呆れるほどのお人好しが多いのだろうか。利用する此方の身にもなつて欲しい。私だって……人間なのだから。

『先輩に胸を借りるつもりで来い』

世間一般で先任が後任にの訓練等で良く使うであろうセリフ。これに騙されはいけない。世の中にはその言葉に安心したら最後、徹底的に此方の自信とプライドを折りに行く鬼畜共が居る。そして俺と信一が前に居た部隊の鬼畜共もその例外ではない。最初は余りの鬼畜振りに思わず「生まれてきてごめんなさい」と信一共々グロまみれになつたショミーレーター内で繰り返し呟いた。黒歴史だ。

そして俺達はそんな素敵なトラウマを『』えた鬼畜共とリベンジマッチの最中なんだけど……。

(くつせー！……流石こ、手強い)

四対四の筈なのに、向こうの攻撃の勢いがこちらよりも強い。つま

りはそれだけ、向こうは連係が取れているんだね。それに比べて俺達は、今日そろつたばかりのチームだ。もうこの時点で相手からの悪意を感じるぞ。

（けど、一番の問題は……元・隊長！　こっちに突っ込んで食い破る気満々じゃないかよ…？）

味方に援護をしてもらいながら1機のLNブルーに染まった不知火が独特的の機動を描きながら迫つてくる。あの動きは嫌と言つほどに覚えていた。なにせ、毎日の様にアレの動きに怯えていたのだから。しまいにはあの動きをする不知火が夢に出て、大量に迫つてくる始末。部隊が変わるものでは催眠治療を本気で受けようかと悩むほどだつた。

（あの変体がこっちに来るつづーなら、来る前に撃ち落す…！）

87式突撃砲を構え直す。狙うは隊長機！　唯でさえ、相手の面子は今までのA-01部隊内を生き残ってきた猛者達だ。戦力差は歴然。本当ならこんな勝負は適当に切り上げ、さつさと通常の訓練に戻した方が部隊全体のためになる。けど、そうしなかったのは…。

『勝ちますよ、俺たち』

後輩がこんな訳が解らん事に全力で相手に勝とうとしてんだ！　ここで先輩が頑張らなきゃ

「先輩の面子、丸潰れだろうが…」

叫び声と共に、隊長機に向かって狙撃のトリガーを引こうとする。

「まだ、甘いな、坊主」

オープンになつた回線から、良く知る人物の声。寒気が背中を駆け抜けた。気が付くと、カメラ越しに捉えていた隊長機の不知火が目の前のビルの上で屈み込み、こちらを見下ろしていた。

（何時の間に……相変らず機動が変体過ぎるんだよ！？ クソ、躊躇するな！）

おちょくられた事に腹を立てながら87式突撃砲を乱射しようとする。駄目だ、距離が近すぎる！？ 隊長機が直後に長刀を振り上げた。殺られる！？

その時、自分のレーダーにもう一機が近づいてゐるのにやっと気が付いた。

「オオオオオオ！ 横から、貰つたあアアア！」

「おおうー？ アツぶねーな」

諦めて、虚無感に包まれそうになる瞬間。隊長機の右横を狙う様にビルの陰から1機の不知火が長刀を両手で持ち、下段構えで下から上に切り上げる様に襲い掛かってきた。しかし、隊長機は途中で気配を察したらしく、後に飛び引かれてしまった。くつそ……助かつた。

「ナイス回です。孝太さん！」

網膜に映つた白銀がこちらを特に気を止める様子もなく、相手の隊

長機へ身構えたまま声を掛けて来る。別にわざと殺られそうになつてた訳じゃないんだけどなあ……。まあ、結果オーライ？

「このは俺が抑えます！ だから孝之さんは正樹さんと慎一さんは所へ！」

「……あの中隊長殿は動きが変態だから、抑えるだけで良いからな」俺はそれだけ言つて、2人の方へ駆け出さうとする。跳ぼうとする時、返事が来た。

「まかせて下さい。俺も動きには自身があります！」

それって、深い意味は無いよな？

(……泥臭いな……)

今の自分と相手である中隊長の戯い振りをどこか客観的にそう判断した。俺も相手も唯、ひたすらに食い下がる。互いに、相手の隙を狙つてはそこへ目掛けて長刀を振るう。しかし、それが咄嗟に気付

かれたり、わざと見せていた隙だつたりで、互いに気力と体力が削れて行く。ここは一旦引くべきか、いや、駄目だ。こんなお互いで押し合っている最中に引いたりしたら、そのまま一気に押し込んでくる！ ここは……徹底抗戦！

暫く、刃と刃が擦り切れあう音が絶えず耳に響く。擦り切れあうたびに飛ぶ火花が俺と相手が如何に力押しなのかを証明する。

引いては押し、押しては引く。互いに長刀を無骨に振るいながらぶつけ合い、往なし、またぶつけ合う。互いに引かないのは、お互に引いたらそこで終わってしまうのが解っているから。この終わりの見えないチャンバラを延々と演じる。きっとこれに負けるのは

心で相手に屈服した時だ。

それを確信すると心から自然に氣概が溢れ出て来る。そうだ、こんなじや、みんなを、あいつを、守れる訳が無い！ 絶対に……勝つ！

「こらのおオオオオー！」

（だから…………こらでええエー！）

言葉とは裏腹に相手の攻撃を往なす。一瞬に互いに数秒間の隙が出来るが、小さい為に互いに決定打を欠いていた。

アクセルペダルを一気に踏み抜き、飛翔ユニットを光が爆発する様な勢いで噴かせる！ 決定打が足りないなら、足せば良い！

「んなあ！？ オイオイ！ んなのあり、かよおおおおー！？」

不知火の質量と跳躍ユニットによる加速、止めには長刀の圧力。今、自分が使えるありたつけの力を隊長機に向ける。隊長機は咄嗟に身構え、攻撃を受け止め様とするけど、こちらに押し切られるのを自分の跳躍ユニットを噴かせる事でなんとか持ち堪えた。

ペダルを踏む足に更に力を入れる。不知火の機体ステータスが関節部分の惨状を知らせるけど、知った事か。

「んだとおー!? オッサンを舐めるんじやねえぞ!　社会はオッサンで回ってるんだからなー!」

隊長機は負けじと跳躍ユニットの出力を上げる。

(あー、もう!? いい加減しけえぞ! おっさん!-!)

中隊長相手に毒づきながら、更にペダルを踏む。気が付くと不知火の機体ステータスは関節が真っ赤になっていた。が、その甲斐あつてか、徐々にこちらが隊長機を押し進める。このまま、このまま！

「おい、坊主……」

中隊長が結果を悟ったのか、急に口調が変わる。……何故だか寂しい口調だ。

「なんでお前さんはここに来た？あの、純夏って言つ御嬢ちゃんが居るつてーのにお前さん、何でこりんな部隊に来た？」

「……は？」

突然の質問に思わず間抜けな声で返事をしてしまった。何故って……普通はどこの部隊に集められるかは、個人が自由に出来る事じゃない。なんでそんな意味が解らない質問を？

「お前さんが他の連中と違う事は見た目見れば解るよ、こいつ見えても一児の親父だつたんだぜ？ 他の連中寄り餓鬼の見た目との違いは解るさ、それともお前さん、そんなに第四計画の深い所に關つてるのかい？」

俺の動搖が伝わったのか、伝わってないのか、中隊長は言葉を続ける。子供の事を話す時には何か、感情が籠っていた。この人……変に鋭い。やはりA-01の中隊長を務める以上、一定以上の洞察力が求められるのだろう。……向こうが少しだけ自分の事で腹割つたんだ。俺も、少しだけ……。

不知火の勢いをそのままにし、俺は語りだす。中隊長が黙っているので続けて良いと、肯定で捉える。

「……確かに、俺自身は基本的には部外者に近いです」

この世界においては社会的にも存在的にも。

「でも……守りたい仲間達が此処には居ます。それに俺の恋人は、その第四計画に絡んで俺が離れると何されるか解りません」

「なるほどなあ……仲間と、恋人のためねえ……それはお前さんの望みかい？」

「欲しいんです、どうしても。みんなと楽しく平和に馬鹿やれる日が、純夏と寄り添いながら生活していく毎日が」

そして直後に「クルピット内部で鈍い衝撃と轟音が響く。遂に2機の不知火がビルに激突した様だ。その時の衝撃で俺の不知火は半壊し、隊長機共々まともに動けなくなる。中隊長は勝敗を気にせず語り続けた。

「ハハハ、良いなあ、そりゃあ……しかしな、ちーとばかし、我が僕じゃないかい？仲間を切り捨てて、御嬢ちゃんだけを守るのは不満かい？」

中隊長の言葉に過去の断片を感じる。なにより、その言葉には後悔が滲み出していた。……この人はきっと、俺を通して自分を見ているんだろう……。

「……純夏はアレでも、結構真面目で、責任感が強いんです。だから、俺がその選択をしたらきっと、負い目を感じます」

俺はそれを痛いほどに知っている。だから俺はもう、アイツにそんな役目を背負わせたくない。あいつは幸せになつて良いんだ！俺の隣で、馬鹿みたいに毎日嬉しそうな顔をしいて欲しいんだ！

「それに、困るじゃないですか」

「……何がだい？」

「祝ってくれる人達が居ないのは」

「お前さん…………馬鹿だなあ…………」

呆れる様な口調でそれだけ言つと、中隊長機は機能を停止する。俺の機体も関節部分が完全にいかれてしまつた様で、大破判定が目の前に表示された。

模擬戦が終わつたのを実感すると肩の力が抜け、溜まつた緊張を息と同時にコクピット内でぶちまける。

もつと、強くならないとな……。

(……凄いな、あの馬鹿は……正樹も見習つて欲しいわ)

モニターでテーリング中隊の隊長と白銀の戦闘を見ての素直な感想だつた。本当に凄かつた、人目も憚らずにあんな会話をすることは……。白銀は兎も角、中隊長は確信犯の節がある。心配になつたので、横に居る筈の鑑の位置へ体を向ける。

「…………はひゅう…………」

「鑑ーー?」

振り向くと鑑は茹鶏の様にのぼせていた。無理も無いか……白銀の発言はプロポーズにも取れる。人前でみんなに堂々と発言をされてしまう恥かしさで死ねると思つ。取り敢えずは……医務室で、氷嚢漬けだな。

今日の夜、俺は二度目の土下座を行使した。実際には行使じやなくて、使わなきや許してくれそうに無いからなんだが……。模擬戦は結局、孝之さん達が他の「テリング」中隊の隊員たちに、奮戦空しく負けてしまった。もつとも、一番先に中隊長と相打ちになつた俺が何かを言える立場では無いんだけどな。元々相手は今日までをA - 0 1と言う苛酷な環境で生き抜いてきた猛者達だ。一度で勝てるとは思つていないさ。今回の反省を踏まえて次はあの人達の鼻を明かしてやろう。そして、その後が問題だった。純夏が医務室に運ばれたと聞いて、訳を慌ててその場に居た女性陣に聞いたら、みんなわざとらしい演技をしながら中隊長と俺の会話を再現し始めたんだ。流石に死ぬかと思つたぞ……。

訓練を終えた後、急いで医務室に駆け込んだけど、眼鏡のナースさんにもう純夏が部屋に戻つたと知らされて、今度はダッシュで部屋に前に着くとジャンピング土下座を使しながら部屋に入り、純夏の許しを待つ事にした。そして、そのまま20分。

純夏よ、もしかしてお仕置きの内容は放置プレーなのか？ そうなのか？ 悪いのだがこちらは永年、訳解らん空間を彷徨つていた身。屁でもないわ！ ……調子こいてスイマセンでした！ だから黙らないでくれ！ 人間、相手が何も反応を返してくれないのが一番辛いんだ！ これ以上は泣いちゃうよ！？ なんかさつきから、布が擦れる音が聞こえるし！ もしかして首を絞める積もりか！？

「むー、ここをこうして……後は……よし、出来た！ あ、もう顔を上げて良いよ。タケルちゃん」

予想に反して、楽しげな声が掛けられる。怒りを通り越してしまつたのだろうか……。俺は神に平伏す子羊の様に恐る恐る顔を上げる。

「……あ、純夏……それ……」

顔を上げると純夏が着替えていたのに気が付く。さっきまでの音は着替えの音だったのか……もつと早く顔を上げればよかつた。

「えーと、どうかな？ 似合つ？」

そうやって小ねく一回転する純夏を見つめる。純夏が今着ているのは俺がこいつのお土産にと買った浴衣だ。生地の色は薄水色で白い水玉模様が記事に散ばっている。そしてそれを緑色の帯で締めている。一応買う時に、純夏の特徴を話して頼んだんだけど……これは……可愛いな。小母さん、グッジョブ。因みに金は……給料前借。

「いや、なんつて言つか……普通に可愛いな」

「ほ、ホント！？」

純夏が確認を求めて来て一瞬、抱き締めたい衝動に駆られる。おおつと、今はまだ、我慢我慢……。じこつに許して貰うのが先決だ。

「えへへへーーあ、でも今日のは反省してよね。すうじーく、恥かしかったんだから！」

「それについては本当にスマン…でも、俺の本心だ…」

一度頭を強く下げる後、今度は顔を上げて俺の気持ちを伝える。純夏は少し田を開じると、照れているのか少しだけ、視線を逸らす。

「……ちやんと、してくれるんだよね？ プロポーズ……」

「……へ？ オ、オウ…」

「プロポーズ！？ そ、そう言えばそんな事……関係ある事は……い、言つたな、俺。……うわ～恥かしいぞ、これは…」

自分の失態に気が付くと今度は俺が照れ始める。

「よ、よしー それじゃあこの話はこれでお終い！ ……す、座つてー！」

「え？ ああ、うん……」

純夏は俺の手を引いて立ち上がらせると、部屋にある椅子に俺を座らせて自分は田の前で屈み込む。えつと、この構図は……。

「あの、昨日は……上手く出来なかつたから……」

それだけ言つと純夏は俺のズボンのチャックに手を伸ばす。おい、待て待て待てマテマテマテ！ 何する積もりだ！？ 俺は慌てて純夏の頭を両手で押さえる。

「べ、別に無理してやる事は無いんだぞー！？」

純夏に言つて聞かせるように田を見渡す。純夏は少しだけ困った顔をしてはにかむ。ぐっ……この上田使いは……。

「私、タケルちゃんに色々して上げたいんだ……駄目かな？」

「お、お前……」

純夏の気持ちを伝えられ、たじろぐ。好きな女にそんな事言われた  
ひ……。

「……ハア～、……無理するなよ？」

「うそ」

最近、いろんなスキンシップばかりな気がするナビ……。幸せではある。

欲しい者＝あげる人（後書き）

ナチュラルに純夏の十八禁を書きたい！ もんたです。

みなさん台風は大丈夫でしたか？ 自分の場合は大学に来ると同時に休講の放送で無駄足になってしましました。でも、台風が来る前に帰れて良かったです。そしてこの後書きを書いてる最中に思い出した事が一つ……課題やつてねえええ！

（明日提出期限）

まあ……それは置いといて……ひうひよひ、本気で書きたいな工口

イの  
書くか  
。 。

## 結成"似た者同士

『明星作戦』別名、Operations Lucifer

1999年に発動。作戦の内容は横浜ハイヴ、甲22号の攻略だ。BETA大戦ではパレオロゴス作戦に次ぐ大規模反攻作戦。俺にも少なからず関わっている作戦もある。なぜそう言えるか。実はこの作戦中にしようされた、ある爆弾が関係している。

### G弾

正式名称は『Fifth-dimensional effect bomb』これで五次元効果爆弾と言うらしい。威力は経験上の折り紙付き。2発で横浜ハイヴを落せる。それでまあ、当然と言えば当然なのだが、落された後の被害も凄い。世の中、何かしらのプラス面があればマイナス面が必ず有る物だ。プラスだけの美味しい物は存在しないのがこの世の事実。そしてそんな簡単な事を俺は理解できなかつた訳で……。それを知らないままG弾と純夏の切実な願いに呼ばれた訳で……。

「なんか……へコむなあ~」

「あんた人の話の途中になんで溜息吐いてんのよ」

夕呼先生が俺の突然の溜息に気分を悪くする。この人が気分悪くなるのは個人的には少し勝てた気になるので気分が良いのだけど、後の報復が恐いので姿勢を正して聞く氣が有る事をアピール。直後に背中に温かく柔らかい感触。一つの丸い膨らみと首に回された腕に

ドキリとしながらも表には出さない様に努める。……少し大きくなつた。前回のアレ以来、段々と積極的になつてきた。もつとも知り合いの田の前限定らしいが。

「タケルちゃん、なんで急に溜息吐いてるの？」

俺の後ろから顔を覗かせる純夏。どこか楽しそうに笑つていて。笑顔に心が安らぐけど、夕呼先生と靈の黙つた視線が痛い。離す様に視線で訴える。

「どうしたの？　ずっとこいつ見てるけど」

返事を満面の笑顔で返される。どうやら云つていないうつだ。今、俺の心を読んでないことが。……もうこのまま良いや。今度は夕呼先生に視線を向けてこのまま話を聞くと訴える。夕呼先生は呆れると、話を開始した。

「まあ……良いわ、続けるわよ？ 明星作戦、正確に言つと横浜ハイヴの攻略作戦を国連に提案して来たつて言つのは解つてるわね」

こちらに確認の視線を向けてくる。俺は純夏が背中にくつついたまま頷く。純夏が体を少しだけ強く擦り寄せて来た。俺は振り返らずに首に回してある純夏の腕に黙つて手を乗せる。夕呼先生は気にして話をつけた。

「作戦内容については特に変更は無し。米軍に怪しまれない程度にA - 0 - 1は使う積もりよ。G弾については……」

夕呼先生に躊躇いの色は無い。けど、強がりは見えた。俺も同じ穴の貉だ。偶には代わりに言つてやるつ。

「そのままにした方が良いですね？ そうすれば反米感情は強まつて日本は更に第四計画寄りになる。しかもG弾の脅威を見せれば第四計画の立場も上がる。反面、日本でクーデターが起きたる確立が上がるけど、俺達が特にその事に介入しなければ歴史は俺達の知っている歴史通りになるから対処しやすい。しかも、相手のする事は一度体験しているから上手くすれば前回よりも効率的にやれて成果を増やせるかもしない。つて所ですか？」

「……合格点」

後、残っている問題は純夏か。まさかとは思つがこいつ一人がBE TAに犯されることは歴史的な変化があるとは思えない。現にこいつは……『俺の知つてゐるどの世界でも生きていた』……生きていたんだ。

「……タケルちゃん」

純夏の腕を強く握る。

自分の心が鉄の塊みたいになつてゐるのに今更ながら気付く。顔から表情が消えている。自分の為に他者に犠牲を強いるのが罪ならば構わないさ、怨んでくれ、憎んでくれ、呪つてくれ。真っ向から受け入れよう。そして全部抱えてやろう。そして笑つて幸せになつてやるう。人々人間はそう言つ生き物だ。聖職者には悪いが、俺は人間がそこまで上等だとは思つてないし、かと言つて下等とも思つてない。徒ひたすらに一生懸命生きて幸せにならうと進むだけだ。神に祈つても純夏は守れない。

「白銀」

夕呼先生の声で意識が思考の海から現実へ引き戻された。 しまつた。

「話、続けるわよ？」

「……お願いします」

場の空気が息苦しい。もちろん俺のせいだけど。夕呼先生は何食わぬ顔で会話を続行する。直後に思考が再び冷たくなる。具体的には殺意を堪えた。

「あんたには明星作戦中に手伝って欲しいのよ、鑑の実験にね……」

「……へ」

今なんていった？ 実験？ 純夏で？ 可笑しいな、この人は俺に『そう言う事を言つた時のデメリット』を知っている筈だが。純夏に触れてない方の拳を強く握る。

「目、恐いわよ？ ケダモノみたい」

「解つて言つてますね？」

内容を早く話せ。こつちはこう言う事を言われる度に我慢をしなくちゃいけないんだから。誰にだって限界と言つものは有るんだ。特にそここの部分は今の俺にとつて妥協できない場所だ。心が軋む。

「えと、えと……タケルちゃん？ 夕呼先生？」

「純夏さん、ここはシーです。これは上司と部下の2人にとって  
スキンシップなんです」

背後から非常に心外な声が聞こえるけどここはスルー。夕呼先生も  
なにやら眉間に皺を寄せながら固まっている。心境は同じかよ。

「気を取り直して言つと……早い話が、鑑に練習させたいのよ。私  
の作る装置を使う為の練習。もちろん、鑑に対する負担は極力減ら  
せる様に努めるわよ。鑑に何か遭つたら被害を受けるのは私達も同  
じなんだし。場所も大分後方にするわ」

……拳の力を少し緩めた。力を抜いた時に自分の体が予想以上に固  
まっている事に気付く。馬鹿か、俺は。

「最初からそう言つて下さい。お互に疲れるだけですから、こう  
いつのね」

「…………」

「じゃ、失礼します」

「あ！ タケルちゃん……」

そう言つて純夏を振り解き逃げる様に部屋から立ち去る。いけない、  
このままではいけない。少し頭を冷やしてこよう。純夏の事になる  
と、どうしても冷静でいる事が難しくなる。守りたいからむきにな  
るとか餓鬼かよ。

「クソが……！」

そんな自分に無性に腹が立つてくる。思わず、誰か居るかも確認をせずに壁を殴りつけてハツ当たりをした。直後に手に痺れるような痛みが走る。当たり前だ。いい加減、自分のアホらしさをひざりして来る。

「タケルちゃん……痛くないの？」

「…………純夏…………」

「その、えっと……これはだな」

背後からの声に大慌てで振り返った。振り返ると純夏が心配そうに俺を見詰めている。追いかけて来たのか。よりもよつて一番見られたくない純夏に見られてしまった。心が動搖に染まって行く。B E T Aと戦っている時よりも純夏に弱さを見られた事に恐怖を感じた。どうしよう、どうしようと悪戯を見咎められた子供のように狼狽してしまう。

「…………タケルちゃん」

直後に温かくてふんわりとした感覚。そつと、純夏に優しく包まれた。子供の頃に母親に抱き締められた時の記憶と感覚が甦り、幼かつた頃は何かと理由を付けてお袋は俺を抱き締めていたなど今更ながらに思い出す。

(アレ……可笑しいだろ？ なんでだよ?)

久しぶりに家族を思い出したせいなのか、目頭が熱くなってきた。  
遠すぎる、今の俺には本当に遠すぎる。家族なんて……遠すぎる。

「一人で抱えすぎだよ」

純夏が俺を抱き締めたまま、子供諭す様に優しく呟いた。背中に回された手と胸に添えられた体の温かさが体に染み渡つてくる。

「言つたじやない、私とタケルちゃんは半分こだつて。……お願ひだから、一人で背負わないで」

「でも、そ……駄目なんだよ……お前に背負わせちやつたら……駄目なんだよ」

それだけ言つて純夏を抱き返す。言葉とは裏腹に泣くほど嬉しかった。けれど、だからこそ、背負わせたくない。こいつには重たい事は何一つ持つて欲しくない。

「……大丈夫だよタケルちゃん。私ね、タケルちゃんとなら一緒に持てるよ。だつて、半分こなんだもん。全然重くないよ」

「純夏……でも……」

「もー、男の子がナヨナヨしないの！…… 独りで背負う事の辛さは私も良く知ってるもん。だから、ね？」

「あ……そつか……そうだったよな」

純夏が一度離れた後、強く笑いながら俺の手を握る。…… そつだつた、純夏は一度経験しているんだ。そして最後まで背負つたまま、成し遂げたんだ。 敵わないな。握られた手を俺から強く握り返す。勿論、肯定の意を込めて。純夏はそれを確認すると心地良さそ

うに笑顔を俺に向かた。その屈託ない笑顔に惚れ直す。

「……悪い……頼む」

「うんー。」

俺の手より少し小さくて、柔らかくて、温かい手。この手を繋いでいたい。これからも、この先も。ひたすらに守つて、生きていたい。それが俺の幸せだ。

「あ、そうだ。はい、これ

純夏は思い出したかの様な仕種で懐から何かのファイリングケースを差し出してきた。……何処に入れてたんだ？ 取り敢えず受け取つてみるとケースの中にはファイルがこれでもかと詰まっている。

「純夏、これは？」

「夕呼先生に頼まれたんだ。これ読んで少しは最近の事知りなさいつて」

ケースからファイルを取り出すと中身を見てみる。ファイルには新聞の切り抜きが規則的に貼り付けられていた。これは……スクラップブックか。確かに俺も純夏もこの年の事は良く知らない。世間知らずも良い所だ。今日は休日でこれからやる事も無いし、これを見て時間でも潰そう。

「部屋、帰るか」

「そうだね、帰ろう」

手をもつ一度強く繋いづとして偶然、お互に同じタイミングで同じ様に手を強く握ったので思わず噴出しそうになる。結局、俺と純夏は笑つたまま部屋を田指した。

先輩にはやらなければいけない事が沢山ある。

職場の人間関係に気を使つたり、上司と後輩との間のパイプであつたり。後輩に仕事を教えつつ、自分の仕事をこなしたりと言つた具合に。だから

「えー、では……これよりヴァルキリーズの少ない男達で親睦会をしたいと思いまース」

「わー」

「よつよつ事をやつたりする。俺が親睦会開始の音頭を取ると投

げ遣りな反応が返つてくる。狭い個室に野郎面子だけで、合成ジュース片手のなんと寂しい事が。しかしここで挫けてはいけない。こ

の状況から如何に盛上げるか。それが今の俺のやるべき事だ！」

「よーし、お前らー 取り敢えず大富豪やるぞ、大富豪！…」

テンションを無理矢理上げながら、トランプを高らかに掲げる。さあ、お前らもこれに乗れ！ ここでテンションを上げるんだ！

「凄いなこのカメラ。ほぼ新品じゃないか」

「実は香月博士に頼んだんですよ。もつとも今月の分はパーですけど」

「その話、本当かー？ だつたら俺もなにか頼みたいな……」

「他人には他言無用でお願いしますよ。博士の機嫌も結構関係ありますから」

「無視……だと！？ お前ら、俺に乗れよ！？ ジャなきや、俺がイタイだけだろうが！」

「無視、するな！」

俺は怒りに身を任せてトランプを床に叩き付けた。叩き付けられた紙製のケースから勢い良くトランプが散らばり部屋の宙を舞う。因みに俺の部屋。それに気づいた信一と正樹は面倒な顔をしながらこちらに振り向く。……なんだよ、その反応。なんか文句有るのかよ。

「あのなー孝之。お前は大切な事を一つ忘れてるぞ」

信一が一いつ瞬いつの間にジト目で睨み付ける。いつの間にかなり

正論を言つたりするので困る。」この前なんか『何時までもなあにあに出来ると思うなよ』とかなり痛い所を疲れた。原因は解つてゐる。解つてゐるからこそ厳しい。考へても答えは出ないので俺は今の考えを振りほどきながら信一の言葉に耳を傾ける。

「白銀はどうした？　あいつも居ないんじや意味ないだろ？」

「ああ、白銀？……実は朝食を食つたら直ぐに行つたんだけど留守だった」

あいつがこのメンバーの中で一番年下なので、なにか不満が無いかついでに愚痴を聞いてやろうと先輩風吹かしながら部屋を訪ねたら誰も出なかつた。一人で返事の無いノックを繰り返す時の虚しさといつたが……。白銀に理不尽な怒りを燃やす。どうせ鑑ちゃんと一緒に朝のデートと言ひ合のスイートターゲットアイムウを決め込んでいたに違いない。そしてこれは完全に当たづっぽうだが、このお昼の時間帯は恋人同士で過ぐす sweet noon を部屋で過ごしているに違いない！　いかん、いかんぞ白銀！！　そう言つのは18才を過ぎてからの極々一部の大人の楽しみだ！　お前みたいな剥けてない（見たこと無いけど）お子様には早いんだ！？

「よし、お前らの言い分は解つた！　白銀の部屋へ行こうじゃないか！」

「……今凄い私怨が……」

正樹が何か言つた氣がするけど氣にしてはいけない。うん？　待てよ……ただ押しかけるのもツマラン。そのまま押し掛けて甘い空気をぶち壊すのは後味が悪い。ならばいつそ笑いを取りに行くのはどうだろうか？

俺は背後の二人に振り返る。二人とも俺の様子がおかしい事に気が付いたのか後ずさろうとするがここは狭い部屋の中。……どこに逃げ様というのかな？

「慎一、正樹！ 大富豪……始めるぞ」

さあ、闇のゲームを始めようか！

「それ……様は罰ゲームが有るだけだろ？」

「いひむわこ、慎一」

心地よい時間だ。

ベットに腰掛けながら渡されたスクラップブックに貼り付けられた新聞の切抜きを読み漁る。情報は本当に色々あって、ゴシップ記事に軍のプロパガンダ、国連や米国に対する不満、そして自分達の国に対する政治不信。民間人の不安がそのままダイレクトに伝わって

きた。みんな恐いんだな。米軍なんかは良い的だ。日米安保条約を一方的に破棄したから、元々悪かつた仲が更に悪化してしまった。別に米軍が一方的に悪い訳では無いだろう。一ヶ月は条約に基づいて律儀に京都防衛に付き合ってくれたんだ。その事実は一体何処へ行つてしまつたんだろう。

(……結果が全てか)

一通り読み終えたスクラップブックを閉じ、自分の膝枕で寝ている純夏の頭を撫でる。撫でる手が気持ち良いのか、寝ている純夏が時折頬を膝に擦り寄せてくる。

(抱いた時の肌の感触といい、撫でる髪の気持ち良さといい、訓練してるんだよな……？)

この窓間に流れる静かでゆっくりとした時間の一秒一秒が至福に感じた。今日はこのまま一日過ごせたら最高だ。

「おーい、白銀居るかー？」

ドアからノックの音が響く。……残念。現実とは非情である。純夏の寝顔を眺めて一日過ごすのは来週までのお預けだ。

「居ますよー、今は動けないので入ってきて下さい」

「しようがねえなー……って、アレ？」

「……何で鼻眼鏡付けてるんですか？ 孝之さん」

声の主は孝之さんだった。もっとも何の罰ゲームなのか鼻眼鏡を装

着しているので一瞬誰なのか判断出来なかつたが。孝之さんの後ろから正樹さんと慎二さんが続いている。

「これは……入つていいのか？」

孝之さんが確認を取つて来た。別に追い返す理由は特に無いので頷きで肯定する。三人は頷き返して部屋に入つて来た。純夏に氣を使つてくれる所にて、この人達の優しさを感じた。

「えと……どういった用事で？」

声を潜めながら用事を聞く。鼻眼鏡を付けたままの孝之さんが声の調子を合わせて答えてくれた。

「Jの面子になつて始めての休暇だし、少し親睦会でもして友好関係築こうと思つてな……それに、横浜出身なんだろ？……お前と鑑ちゃんは」

最後の方に言葉のトーンを落して確かめる様に言われた。成る程、同郷の生き残りとして仲間意識を感じているのか。……寝ている純夏の頭にそつと手を置く。

「……せっかくだから、色々と話しましようよ。あ、純夏は寝かせてやつて良いですか？　こいつ結構寝不足なんで」

「ああ、構わないさ。……じゃ、まず始めに」

孝之さんが紙パックの合成ジュースを渡していく。男四人で輪になり、それぞれの利き腕で持つた紙パックを前に突き出して低めに掲げる。音頭は孝之さんが取る様だ。

「それじゃあこれより、ヴァルキリー中隊所属。シグルズ分隊の第一回親睦会を始めます。カンパニー」

俺達は紙パックを握つたままの拳を軽く当てる。そしてそのまま紙パックのジュースに口を付ける。うん、美味くないな。ここで気になつた事を一つ。

「シグルズって……孝之さん、俺達には縁起悪過ぎません?」

「……言つて、俺達も気にしてるんだから……嫌がらせだろ博士の孝之さんが紙パックを強く握り、中身が少し漏れてしまつ。……後で掃除しなきやな。

「シグルズって確か……ヴァルキリー助けた後、恋愛関係で……」

「正樹、先輩として言つておく。深く考えるな、ヴァルキリーを助ける男の意味だけで解釈すれば良いさ」

不吉な事を思い出しかける正樹さんを慎一さんが留まらせ。四人で少しの間沈黙し、直後に同時に息を吐き出す。

良いチームになりそうだ。

片手で純夏の頭を撫でながらそう思えた。



先週1・8禁をアルカディアとこの1・8禁板に上げて来たもんたで  
す。

因みに18歳未満の純夏スキーのお友達は読んじゃダメですよ？

にしても……やつと明星作戦に本格的に入れそうです。そして何故  
か増える課題。

おかしいな……後期の方が授業少ないのに……。まあ、自分の愚痴  
は置いといて。

大丈夫かな……次回。ただでさえ戦闘描写へタクソなのに……。

最後に余談と言つたが思い付いてしまったネタを。危険を感じる方は  
回避推奨です。

なんか今回は武のへタレ部分が目立つたので自分が武に言わせて見たいセリフをば

( Wikipedia のページで似たようなネタが有つたので)  
本編では使わないと思いますが。

「俺は最初から最後まで純夏の味方だ」

そうです、桜派です。ではまた次回に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1544u/>

Muv-Luv ALTERNATIVE The future in my future = other side

2011年10月6日12時25分発行